

創刊大正十三年 通卷八四四号

# 川柳塔



白川協加盟

No. 844

九月号

# 第3回 川柳塔まつり

## ＜平成9年度同人総会＞

と き 10月3日（金）午前10時から

ところ ホテル・アウィーナ大阪（なにわ会館）  
（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車）

議 事 平成8年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告  
平成9年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

## ＜各賞表彰式＞

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時半から行います。

## ＜記念句会＞

各賞表彰式に続いて開会。午後4時半終了予定

|     |         |           |     |       |
|-----|---------|-----------|-----|-------|
| 兼 題 | 「手さぐり」  | 西宮北口川柳会   | 西 口 | いわゑ 選 |
|     | 「ゆっくり」  | 三幸川柳教室    | 三 宅 | 保 州 選 |
|     | 「バイパス」  | 赤 碕 川 柳 会 | 新 家 | 完 司 選 |
|     | 「曲 が る」 | 大 原 川 柳 社 | 小 林 | 妻 子 選 |
|     | 「海 岸」   | あおば川柳会    | 菱 田 | 満 秋 選 |
|     | 「行 方」   | 川柳塔社主幹    | 橘 高 | 薫 風 選 |

◎各題2句 出句締切午後1時半

会 費 1000円（記念品贈呈）

## ＜懇 親 会＞

と き 同日午後5時から同会場で開催

会 費 6000円 宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪

◎懇親会および宿泊は、人数に制限がありますので、  
9月20日（土）までに氏名を明記して川柳塔社事務  
所へハガキでお申込みください。

主 催 川 柳 塔 社

## 弘前ねぶたまつり

川柳塔みちのく

十周年川柳大会に参加して

### 橘高 薫風

小出智子理事長の死去により、車の両輪の片方が損なわれた現状では、川柳塔の活性化は地方との一層密接な交流を促進するほかはない。

その手始めの弘前行であり川柳塔みちのく十周年記念川柳大会への参加である。一行は十九名、西田柳宏子、野村太茂津、高杉鬼遊の三相談役と高須賀金太、宮崎シマ子常任理事の参加で本社挙げての協力を示すことが出来た。

大会はまことにスムーズに進行、句会後の懇親の宴も和やかで、会場の格式あるさくら亭はたっぷり二時間、歓談の渦で賑わった。

課題「思いやり」は七名の選者での共選であったが、関西の作風と多少異なる表現に得るところ大であったと思う。

夜七時三十分からの弘前ねぶたまの運行

は感動の連続であった。

大型扇五十台、組み六台、小形扇八台、担ぎ一台の華麗な装いが、太鼓と笛との勇壮な調べに乗って出陣するのである。

私は数年前に青森のねぶたを妻と見物したことがある。工藤甲吉さん呼び出し居酒屋でビールを痛飲、棧敷席で豪壮な運行を見た。「はねと」の小さい鈴の音が優雅に耳に残った。ねぶたは戦の勝利の凱旋、いわば勝鬨の象徴でいやが上にも高揚するのだった。

出陣を意味するねぶたは扇の表の絵に三國志や水滸伝、日本の酒吞童子など昔話の英雄豪傑が描かれ、これを鏡絵と言う。肥後和香子さんお住居の宮園の鏡絵は「閻魔大王怒る」で、見送りと呼ぶ裏絵は「官女」であった。見送りもさまざま、「悲母観音」「楊貴妃」「静御前」「八百屋お七」と艶を競うたのしい。

情緒的な雰囲気にも酔えるのが「動」に対する「静」と言われる所以かと思えるうち、ふと小出智子さんの面影が浮かんできた。智子さんが何人もの女人に姿を換え、つぎつぎに遠ざかって行く。

先刻、ギネスブックにも記載されていた

という直径三米三十糎の「津軽強情張太鼓」の音に感動して涙ぐんだのと異質の涙が込み上げてくるのだった。

「祈五穀豊穰巖鬼大権現」の大幟が迫ってくる。豊作を祈り、祖先の霊を迎え送り、魔の退散を念ずる北国のまつりは老若男女の別なく溶け込んで短い夏を駆け抜けるのだ。ヤーヤドーの掛け声が今度は耳に残った。

九時過ぎ、ホテルの近くの酒場で新鮮な山海の珍味をいただく。またまた酒とビールの饗宴で、至れり尽くせりのおもてなしに夜の更けるのを忘れる。

翌日はホテルを八時に出発、三内丸山遺跡の広大豪壮なたたずまいを見学、奥入瀬溪流の美と十和田湖の景観を遊覧船で見つ三沢空港へ。

五楽庵氏をはじめ、魚、花峯、一花、叶、隆樹の同人諸氏が空港まで行を共にして下さった友情と、村田伊都子さんご一家のお心遣い、川柳塔みちのく、その他青森の柳人お仲間のご厚誼に心からのお礼を申し上げます。

関空着は定刻八時ジャスト。爽やかな旅を象徴したかのような帰阪だった。



座右の句

無から出て無へゆくまでの娑婆の風 (柳宏子)

私の句

文盲の闇から辞書に導かれ

井上源一

## 川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 弘前ねふたまつり……………橘高薫風…(1)

戦争体験者のあなたは・今……………岩佐ダン吉…(2)

川柳塔(同人吟)……………橘高薫風選…(4)

自選集……………(47)

川柳の群像 岸田万彩郎……………東野大八…(50)

古川柳歳時記『秋の虫』……………清 博美…(52)

水煙抄……………西田柳宏子選…(56)

秀句鑑賞「同人吟」……………玉置 重人…(54)

大空のころろ(80)……………前 たもつ…(79)

渺湖抄……………橘高薫風…(83)

茴香の花……………八木千代選…(80)

宮西弥生選……………(84)

戦争体験者のあなたは・今

岩 佐 ダン吉



徴句う軍服前に立ち尽くす94年の「平和のための大阪の戦争展」で入選した作品です。

父は私が三つの時に「もう、わしが出ているうじやこの戦争は負けじや」と三十九歳で出征しました。

言葉どおり、間もなく中国で戦死したと軍服はおろか、遺骨のかけらもない「軽い死」の知らせがありました。

山林の仕事をやっていた父。四人の子と職をもたない母を残して異国の地で、どんな思いで死んだのだろうか、時に思います。

さて川柳の句会では年配者が多い関係で、「お話」や選のあい間によく戦争体験を聞くことがあります。貴重なお話だと思いますが、

大半が「支那(中国)人を……した」など中国や朝鮮人民を虐殺したりべつ視、時には輸送船が撃沈され漂流したなど、九死に一生をえた体験まで往時を懐古することに終っているのは残念です。

と申しても教育からマスコミまで一切を天皇制軍国主義に支配されていた時代です。



|                  |                  |       |
|------------------|------------------|-------|
| 「露」              | 中井ゆき選            | (86)  |
| 一路集「あきれる」        | 川端一步選            | (86)  |
| 「プライド」           | 新家完司選            | (87)  |
| 初歩教室「肩」          | 吐田公一             | (88)  |
| 路郎賞・川柳塔賞中間発表     |                  | (90)  |
| 嗚呼肝つ玉智子さん        | 黒川紫香             | (93)  |
| 川柳塔みちのく十周年記念大会   |                  | (94)  |
| 八月本社句会           | 高須賀金太・宮崎シマ子・高杉鬼遊 | (96)  |
| 各地柳壇(佳句地十選/榎山隆盛) |                  | (100) |
| 柳界展望             |                  | (114) |
| 九月各地句会案内         |                  | (115) |
| ■編集後記            |                  | (116) |

座右の句  
私の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか  
宇宙からサインありそな秋の空

(薫風)  
亀岡哲子

「聖戦」と信じ(させられ)ていたあなたに今、戦争責任を問うていたのではありません。きびしい言葉ですが「母」を書いた三浦綾子はこう述べています。

「多くの命を奪った戦争になぜ反対をしなかったのか……あの時は「仕方なかった」とよく言われる。しかし、その仕方なかった時代に、小林多喜二をはじめとする共産党の人たちは「戦争をしない」と叫びつねに殺された。困難な時代に誠実と勇氣に生きた人たちを思う時に、せめて私自身は自分の卑怯さをみつめる姿勢だけはもっていたと思う」。

敗戦後52年、他国を侵略し他民族を殺戮したあの侵略戦争を、あなたは今、どう総括しているのか、其の後の人生にどう生かしてきただのか、お話に「そのことを」加えてほしいのです。

戦争は「昔のこと」ではありません。「朝鮮支配には良いこともやった」「南京大虐殺はなかった」「従軍慰安婦なんて……歴史の真実から目をそらす人たちは、憲法九条の改悪、自衛隊の海外派兵まで着々とすすめているではありませんか。川柳の世界にも作者の生き方・世界観が大切でしょう」。

体験談が懐古だけに終らず、核廃絶・平和を守る運動の大きな力になることを願っています。



橘 高 薫 風 選

神戸市 中 村 ゆきをを

八つ当りしてたら隣からお萩

お元氣な年寄り夫婦に席取られ

美術展誘われベレー探してる

学校にたいがい物は落ちている

満月に吠えるどころかバーで酔い

なれあいの一日だった灯を消そう

枚方市 海老池

洋

昭和史の虫干し確と敗戦忌

只管打坐 向き変えただけヒキガエル

曲折の夫婦の川もはや河口

台風一過 屋根屋へ電話かからない

貧しかった頃は旬には旬の味

ダルマとて万歳できる手の欲しい

弘前市 中山 雅 城

ねぶた笛会いたい人はもう来ない

少年の眉が凜凜しく脱皮する

ボクシング闘犬場と間違える

消ゴムの腰の強さで頑張るぞ

荒れた夜の酒は男の子守唄

転んでも青空を見る達磨さん

弘前市 一 戸 ツ ネ

夏の星ねぶたに埋める城下町

ねぶた囃子穢土の濯ぎの清涼剤

ねぶた囃子釈迦も弥勒も踊ってる

旅人も葉月はねぶた思いだす

動にいて静の涙のねぶた笛

戻りねぶた蛙ゲロゲロお出迎え

鳥取県

鈴木公弘

褒め合っている舌先を見てごらん  
仏壇を開けておはようございます  
梅雨明け三日 釜ゆでの刑に遭う  
盃蘭盆の暑さを知らぬたまごつち  
かき氷食べに来ないか蟬しぐれ  
口あけて寝ている妻よありがとう

米子市

青戸田鶴

美しいものにいつでも目をこらす  
地図のない旅が始まりかけている  
花火消えて老いた二人が残される  
先の事答えてくれぬ鰯雲  
あの世まで行きつ戻りつする螢  
水吞んで明日の朝へつなげよう

鳥取県

岩崎みさ江

折鶴の溜息を聴く深い闇  
生きていてよかった合歡の花に会う  
道祖神 峠で浮世みておわす  
寝ころんで見る青空が抱いてくれ  
解らない明日と言う日へ生きられる  
天職のように女の厨ごと

富山市

舟渡杏花

北国のしじみはめった泥吐かぬ

ガンバらなくていいと励ます電話口  
落丁に気付く人生の踊り場で  
ピカソの片目を捜している画廊  
備忘録の隅に息づくわたしの名  
ひと知れず真理を探る立ち読みで

松山市

宮尾みのり

世の中を見る目が変りそうギブス  
労られすぎて元氣萎えてくる  
振られ癖ついてしまった待ちぼうけ  
觀光のコース貧しい蕎麦を打つ  
太郎冠者どうあがいても太郎冠者  
来し方をみれば浄土は似合わない

藤井寺市

中島志洋

台風よお手柔らかに兎小屋  
美しい声でつれない事を言う  
世話やきが纏まる話搔き回す  
大関の力はあるが運がない  
明日当たる相手に付ける力水  
盆踊り菊水丸で締めくくる

堺市

桑原道夫

螢飛ぶ 点線は美しき

終点のバスが半分怒っている  
女笑いつづけいつしか鳥の声

似て非なる遠泳の道蟻の道

コーヒーのこと考えてコーヒー飲む  
マツチ消すときの顔みな柔らかし

島根県

伊藤 寿美

孫三つ桃が初めて生りました

ハイと言う返事ばかり雲が浮き  
アイバンク少し疲れた眼だけれど

川に橋架けて住井するが近く  
網走でニポポ人形買った旅

ピアスしたトラック野郎とすれ違ふ

呉市

楨田 英詩

老いたのか欲の幾つか干からびる

長男の無口に頼り甲斐がある

南無阿弥陀の時間ベツトよお静かに

満腹の人科 神仏から離れ

お月さま地球が揉めて困ります

おふざけはこれまで始業ベルが鳴る

広島県

藤解 静風

いい笑顔いい自画像に遺したや

涅槃像みたいな顔で逝けたらな

去年より今年と首が前にでる

掌に海を握っているか孫

初恋のラムネをボンと抜いた音

右向いて左を向いてタバコの火

藤井寺市 吉岡 美房

燃え尽きた蛍の闇に包まれる

僕だけにある僕だけの敗戦忌

少年法子供の方が知りつくし

まだ少し生きたし母の墓洗う

花菖蒲一本ずつにある俠気

思惟の海水平線が越えられず

岸和田市 岩佐 ダン吉

人間は素晴らしいよと教えられ(さくら道二七〇キロ走破の友へ)

血煙をあげる富士を撃つなかれ

寄せては返す何事もなかったように

君が代で何を学べと言いますか

花が咲く嵐に耐えた日のことは

菊人形僕を迎えた母の顔

大阪市 川端 一步

水上の母文学に耽る夏

図書館で郷土史を読むボクの避暑

筆写した句の人と会う葬儀の日

綱引きはいつも負けてる定年後

仲直りしようの合図今日の膳

ワープロで火がついた妻のエネルギ―

熊本県 高野 宵草

CMでカード打出の小槌めき

いそいそと藪蚊もうれし村まつり

蟻たちが葬るひたすら鳴いた蟬

合歓木が寝た間に政治伐りたがる

惚けさせぬよう折紙の色を選ぶ

消毒をすれば雀も来てくれぬ

米子市

政岡 日枝子

父の掌のぬくみ覚えている干草

仲良しが出来て山草展開く

遠くからきたタンポポに居着かれる

勇気を出して駆け降りてきた山の草

郵便屋が運ぶ遠く遠くの草いきれ

クサカゲロウ心惑わす花を産む

倉吉市

松本 よしえ

爪染めて今は草取り出来ません

漫画家の陰しい顔も知っている

水中花夜になっても眠れない

夕闇にとっても眠い合歓の花

竹踏みの効きめ信じたお人柄

胆石が暴れぬようにそっと寝る

青森県

諏訪 柳々

町中をトンボ行き交う町に居る

衰えたかやたら真面目な話する

雨傘も二つ並べば物を言う

出世のたびえくぼの数が減ってゆく

女ひとり意趣があるのか石を蹴る

有る事は言わず無い事ささり言う

島根県 小砂 白汀

徳利はさておきおいしい日本酒

トウヤングそんな昔が懐かしい

ポップジャズ奏していった通り雨

虫の息とふんだかしつこいファイナンス

彼もまた超高齢となりつるか

痴呆症現世は地獄か極楽か

茨木市 堀 良江

六月台風少年に住みづらし

大見得を切った仁王と紫陽花と

食べてくれる人が居るから立つキッチン

手作りの梅酢染まっている氷

取りあえずこの場ど忘れたことに

言うことはやさしあなたは評論家

大阪市 渡部 さと美

恋語る海で透明なふたり

仲間達と別れて来れば秋の風

片方が今日は重たいヤジロベー

逝きし人偲べよ泣けよ雨はげし

うまいものと言うから妻の手が抜けず

夫婦仲ようしいやと七十路の助言



弘前市 齊藤 島

遠い日の亡母と五重の塔で據り  
聖域を侵してまでもクローンとや  
サ克蘭ボ熟れると僕の誕生日  
朝顔が一年生の顔で咲き  
出穂の稲の力を信じよう

弘前市 佐治 千加子

経こけしその一身の祈りかな  
暑中見舞ざんぶと海を運びくる  
はげましの言葉のような波がしら  
なるようになるさと虫は死んだふり  
枯山水の石のはてりに雨しずか

弘前市 高瀬 霜石

携帯電話あなたも凶器持っている  
人情に明日は義理に揺れる葦  
引き際が上手な人の太い眉  
頼りない父だが許せこれからも  
旅の空ますます食いしん坊になる

弘前市 肥後 和香子

想い出が乳房一周して困る  
活字のように一人の男たどってる  
たんぽぽの下で咲いてていいですか  
斎場がまっすぐ見える白い坂  
哀しみをめいっぱい食べ肥満症

弘前市 小寺 花峯

風鈴がチロリン秋の爛れまじ  
グーチョキパー負けてるグーを繰り返し  
諦める心に射してくる西日  
空席へ野菊を乗せる無人駅  
最果ての岬で涙乾かない

弘前市 岡本 花匠

生きざまの蹟き重く嘘ひとつ  
執着を抜きとる草も人も修羅  
法話聞く浮生なる身につまされる  
枯華微笑 解脱もならずあるがまま  
明日あるを信じふたりの米二合

弘前市 蒔苗 果林

見回れば稲ら葉末の露零す  
稲とスキんシップしなけりや日が暮れぬ  
稲同士励ますそよぎ見せつける  
田を作る心を見抜く稲の姿勢  
実るほど稲のそよぎが歌になる

弘前市 相馬 銀波

パンは焼けてもまだおにぎりは不得手  
炎天下田水に聴い独楽になる  
ライバルに見せる尻尾は細くする  
喜びの一夜明けたら倍になり  
誰の手を借りても欲しい水がある

おにぎりという別な調味料

弘前市 須郷井蛙

思い出の貯金大きな旅に出る

働けば快眠薬の幸を知る

一日の長さビリビリ定年後

お喋りがしたくて趣味の会に行き

弘前市 今生恵子

輸血されエイズ気になる七十歳

正気づけばはやベッドから命令す

看護婦が来るので寝たきり髭を剃る

カブト虫を主役にしての村おこし

女性好みの少年の顔 阿修羅像

弘前市 櫻庭順三

揺れてくる押印せねばオベ出来ぬ

絶望と希望の夢にうなされる

信頼は仏の顔でオベにゆく

オベ担架 赤紙のよう拌まれる

磨崖仏掛からぬ鉗子掛かるオベ

弘前市 高橋岳水

月満ちて欠けて生命が輪廻する

望郷の視野で明滅するホタル

小心ですぐ深読みをしてしまう

人脈の谷間で喘ぐ雑魚である

方便の軽い嘘から曲り出す

七分粥食べていながら止めぬ酒

黒石市 相馬一花

牧場を我が物顔に行く巨乳

夫にはさせぬ口付け鳥にさせ

宵宮で年に一度のラムネ抜く

おめでたい日はご破算の血糖値

青森県 西谷大吾

のんびりと峠を下る明日も晴れ

鈍行で駅弁食ってフルムーン

砲弾の雨降り止まぬ地球村

平和とはペットに餌をやることか

新聞を読むとジクリと胃が痛む

仙台市 川村映輝

九十三恥ずかしながら役立たず

腰痛のおかげで暇のないくらし

孫結婚老いに鞭打ち新幹線

パンの耳雀にわけて朝餉すむ

座頭市パンツ穿かずに旅立ちし

町田市 竹内紫鏑

脳を病むとや文通の一人減り

療友の長寿を知った電話帳

万博跡地老いて二度目の観覧車

翻訳も句稿も永き楷書かな

エスプリを教えて九十路も語る (河盛先生)

横浜市 菱田満秋

指摘した誤字から恋が冷めてくる

気に入らぬ人の香水むせかえる

お互いに見つめあつてゐる観覧車

父の日に贈つてくれる嫁がいる

亀という仇名に油断させられる

横浜市 清水潮華

ヘルベスの痛みは毒矢かも知れぬ

橋までの散歩と犬も承知する

五合目でガレキの富士を見て帰り

洗剤を見せられ新聞とり替える

見えすいた言訳を聞く約束日

富士宮市 渥美弧秀

老鷲に二病息災励まされ

富士と描く詩と音楽の終章よ

二病息災老年送る句読点

反骨の血も薄らいで時移る

老年へ喝采もなく舞台去る

静岡県 蘭田漠杏

目出たさの重なる家の木が繁る

童心にかえつた妻がおもちゃ買ふ

母が逝き梅干しの色褪せてくる

世の欲をさらりと捨てて避暑の宿

夏の海忘れて居ぬか塾通い

富山市 島 ひかる

願かけては梅干しをようけ漬け

中庭に我が物顔の親子雄

紙風船おんなの会に配られる

嫁ぐとき焼いた手紙の人に逢う

丁寧にプールサイドでするお辞儀

富山県 増田紗弓

ぬるま湯が嫌いで檻を出てみても

お茶漬が食べたくなつてきたふたり

君恋の余病がみえてきたカルテ

椅子取りのゲームを知らぬかたつむり

来客があつたふりして切る電話

京都市 都倉求芽

この国の心臓どうも不整脈

曲れない胡瓜にストレスたまつて

濃淡の雲せめぎ合い暴れ梅雨

宵山の暑さの中の京すだれ

街盛夏いたるところの反射ビル

京都市 大河未佐子

台風一過男衆が組む鴨の床

まなうらに白きお骨のきえぬ夜

婚礼に会った顔ぶれ通夜の席

らつきょうの漬け具合みるカレーの日

凜子より白蓮さんの恋をする

京都市 山海友熙

緞帳が下りても夫婦 夫婦とや  
いくたびか母に出逢った二年坂  
高瀬川の流れは母想い  
母の樹に少しやつれた傷がある  
朝に咲く花へわたしも話しかけ

京都府 稲葉冬葉

同窓会みんな主人が居てはった  
宅配便 留守宅の世話やいてます  
夏くるたびに買う虫籠の値段  
たまごっち子供の遊ぶものでなし  
波の音人生観が変わります

大阪市 榊本落児

数知れず途中下車した人生よ  
父の日の父はやっぱり蚩族  
女房の時計はいつも進んでる  
白髪にクラリネットが似合ってる  
歓喜天若い尼僧が経をよむ

大阪市 井上白峰

傘寿まで生きて此の世にまだ未練  
輪の中に居て伴せに気がつかず  
身の程を知らぬ男の勇み足  
盃の底に孤独がしのび寄る  
ひと言が多くて掘った深い溝

大阪市 板東倫子

十五歳の散華 少年航空兵  
十五歳の殉国ひめゆり挺身隊  
十五歳の孫よ愛知る人であれ  
ひたむきに戦う阪神いじらしい  
さくらんば別れ話のデザートに

大阪市 河井庸佑

ぎつしりと詰った祖母の予定表  
病とは付き合い生きることにする  
もう終りまだ終らない夏休み  
生かされた今日一日を無駄にせず  
平凡な日に飽き足りぬのも若さ

大阪市 神夏磯典子

日本の夏 朝顔のある暮し  
茄子漬があるからお昼楽しいな  
老夫婦 枕二つが行儀よく  
九十の親に逆らう馬鹿でなし  
手枕で見てたら巨人ヒット打ち

大阪市 本間満津子

あたりまえと思ひ込んでる有難いこと  
そっくりでどこかが違うかくし味  
余ってる脳が遊んで働かぬ  
やっと納得出来てお腹が空いてきた  
朝顔の蓄数えた日は遠い

大阪市 津守柳伸

避暑客に紛れひと夜の軽井沢  
下駄履きの素足へそ出し耐暑法  
パノラマで撮るアルペンのオゾン層  
降りることできぬ室堂 地獄谷  
ああ世相びつくり箱に慣らされる

大阪市 福岡雅楓

遊ぶ目もいまや世界のたまごつち  
背と心丸くならない姥桜  
三保の松天人五衰の調べ聞く  
この年で男性わかるわからない  
歩きます病気せぬのも国の為

大阪市 稲本凡子

年三度検査の度に捻子ゆるむ  
ああしんど今日は何度言うたかな  
朝早く起きても予定何もない  
丁寧な鳩の歩みを見習おう  
肩書とは別に気さくな話しぶり

大阪市 藤田頂留子

笑っても霧がうずまく胸の奥  
だんじり好き祭りすむまで晴れぬ空  
ジーンズを浴衣にもどす祭り笛  
いいわけのつらさじつとり汗をふく  
悪知恵も日進月歩ニュース欄

大阪市 小林周信

指折れば悪友ばかり生き残り  
料理本 男が困る塩少々  
混浴に眼鏡のくもるあほらしさ  
市場籠下げた男の丸い背な  
落葉帰根 香港島の百年史

大阪市 玉置英子

殺すには髪切虫はきれいすぎ  
見られては困る手帳が見付からぬ  
道連れもゆつくり歩く同い年  
嘘でしょうほえんでいるその目元  
似た人を見掛け駅まで従いていき

大阪市 奥田良子

下駄はいたギャルたちつづく御堂筋  
目にふれるもの皆もえて人遠し  
日傘さし三年坂に今ひとり  
薬師寺の写経を終えて仰ぐ塔  
悲しみに足を向けたは裏通り

大阪市 大塚節子

どうしました どうもなければコールせぬ（短い入院）  
病室で猫のお悔み受けている  
弱々しい方がナースの受けがよい  
退院許可出た荷造りの早いこと  
点滴の青じみ残し退院し

大阪市 川原章久

高槻市 井上照子

舌の根が乾くと又もウソをつく  
母の日になんとも欲のない妻よ  
入江深く小舟の集う盆休み  
折角の喜寿のベレーが似合わない  
日暮れ待つ祭衣裳の風の盆

大阪市 田中節子

だしぬけに相合傘の友と遇う  
人生の句だったころ思い出す  
捨てきれぬ遠い記憶にさまよいて  
海峡の汽笛遠吠えのごと佗びし  
衣替えついでに爪の色も替え

高槻市 川島諷云児

あざやかに負けて敗北感がない  
冷静になろうなろうと深呼吸  
良妻賢母二足の草鞋こなす妻  
向こう傷むかし昔の語り草  
日の丸を遠慮しながら出す旗日

高槻市 芦田静江

百済観音友好の海風になる  
水無瀬宮 水清らかな献茶式  
茨木土木かこい平和にねこじやらし  
梅真っ赤 兄の命を聞き糺す  
華の師の隣と知らず席もらう

目を病んでサングラスです見給うな  
悪いのは教育 吾をふりかえれ  
病院で孤独を語る情ある目  
逢うたとて丸木の橋で泣く話  
再会に話題火の輪を抑えてる

茨木市 藤井正雄

お祝いに妬みも入れている女  
禁酒禁煙電話の声も低くなり  
腰痛の祖母に椅子出す丸い月  
西部劇わが青春の戻り橋  
指切りの橋を渡って行つたきり

茨木市 島元ふみ

まぎれこんだ虫にもやさし独りの日  
足止めの台風友と長電話  
マチネーに男は怯む女性群  
幸せな女の時代生き残り  
夢の中九十の亡母の髪黒く

枚方市 八田敏

遠い日を蘇らせる孫の九九  
車椅子駅々の世話受けながら  
娘と電話する楽しさか妻の声  
百合活けて祝杯妻の誕生日  
老いの夢消えても欲は湧いて来る

枚方市 森 本 節 子

師の悲報知る日あじさい色極め  
斜陽館の画像『津軽』をよみ直す  
兄からの絵便り庭に咲くぼたん  
すき間にはクッキー詰めてユーパック  
煩惱やそむかれたこと思い出す

寝屋川市 岸 野 あやめ

習うより慣れるか使用説明書

ビール飲むしぐさまぎれもない大人  
半歩措きついて行きましょライバルに  
読みきれぬ本を抱えてする昼寝  
翔んでいる寡婦でだんだん若くなる

寝屋川市 江 口 度

寝たら朝妻のいびきがうらやまし  
それはけちった砂糖でコーヒー飲まされる  
朝顔の種をまく 絵日記のために  
野仏の影を育てる草を刈る  
はもしやぶの川床で聞いているコンチキチン

寝屋川市 平 松 かすみ

あの世とは真つ暗闇のこんなところ（普通寺）

琴平奥社 登った足をほめてやり  
金丸座木戸でごつんこしてしま  
太龍寺の鐘は心に浸みました  
マイカーを一服させてよもぎ摘み

寝屋川市 堀 江 光子

描きつつ花の命の長かれと  
富士一つ世に富士の絵の数知れず  
よみがえる面影枇杷の実る頃  
無理通す数は充分揃えてる  
大国の無理もう通じない世紀

寝屋川市 後 藤 黎之助

人の世と思ひ込むから腹が立ち  
飴を噛む人がいるから忙しい  
何時からか肩にくい込む孫の守り  
竹光をまだ捨て切れぬ二度の職  
改めて十四歳の孫をみる

寝屋川市 柴 田 英壬子

じんわりとこだわり溶ける夜が白み  
芒の穂しばしバレーリーナの如く  
深い秋絵皿にとかすひと一言  
お互いに苦手を持っているさだめ  
メール用の秤をととても愛してる

寝屋川市 森 茜

ねむりたい父へ馬乗り機関銃  
ひよっこりと出会った発車二分钟前  
しあわせつ 首をすくめて言ってみる  
くちなしが匂って葬の列うごく  
どぶ川に落ちそう枇杷の実がたわむ



寝屋川市 太田とし子

右向けば右にもあつた真正面  
一番乗りの好きな私が死に遅れ  
逢いたくない人と出逢つたごあいさつ  
叱つたり褒めたり家族ややこしい  
百歳を祝つた写真を黒枠に

寝屋川市 酒井 勇太朗

水入り後 明暗分ける稽古の差  
満天の星を眼下にモンブラン  
孫ポーズ ジョンベネちゃんに似て不安  
星空を仰いだ人と半世紀  
見合五度その数父を遙か超え

寝屋川市 坂上 高 栄

緊張のピンピン張つて呱呱の声  
左遷だなア月も覗かぬ隠居部屋  
名案をタオルに包む風呂上がり  
布袋さん笑いの種をたんと詰め  
山よ山 山は地球のお父さん

吹田市 栗谷 春 子

朝きいた訃報に一日中無言(小出智子さま)  
巴里祭ときいて思ひは松竹座  
気の弱い孫が私に無理を言う  
手にふれし本が百聞とはうれし  
これでよしと合わせ鏡に言つておく

吹田市 山 本 希久子

まなうらのあじさい褪せず笑み給う(智子さんを偲ぶ)  
水たまりにもさざ波が立ち茶の間暮る  
顔見せるだけの孝行しかできず  
おしゃれた顔が不遜な言葉吐く  
家族と趣味を天秤にかけている

吹田市 古 川 喜美子

口惜しくて御飯三杯食べました  
露天風呂に昭和担つた手足あり  
野の花に慕われている白い靴  
男だとばかり思つていた名前  
父の日の何貰うても有難う

吹田市 瀬 戸 まさよ

隠れてる羨望ですよ失楽園  
男の料理ザクザクとキャベツ切る  
初めてのキスは涙で驚かせ  
山紫水明 災害の国日本  
少年犯罪社会のひずみ噴き出せり

吹田市 茂 見 よ志子

逝つた人偲ぶよすがの句集読む  
四方は海 波の怒りは侮れぬ  
歳月は嫁の仕草が姑に似る  
くつろぎは新聞を読む余暇の朝  
バルサンを焚いて帰省の子等を待つ

守口市 森 川 まさお

愚鈍なる日焼けの腕で釘を打つ  
夏木立 鴉ばかりがやかましい  
大いなる岩すり抜けて車行く  
大夕立 心の塵が洗われる  
寡黙なる親子並んで鮎を釣る

守口市 結 城 君 子

その扉無理には開けぬ夢消える  
岩は見ていた人の心のうつろいを  
ときどきはベットのになりたいときがある  
ルーズソックスばあちゃん一度はきたいね  
大会に智子さんの笑みがな

東大阪市 森 下 愛 論

ためらわず秋だコオロギ罷り出る  
血圧がどうあろうとも飲みたがり  
酒タバコ止めよはとうに聞き飽きた  
夏バテの薬はビールの泡でっせ  
老人は死んで下さい今日も生き

東大阪市 指 宿 千枝子

わたくし的一天を書く手帖なり  
還暦の午後の手習いドレミファソ  
はち合わせ蟬も私も仰天し  
お散歩にはあちゃん犬を抱っこして  
無言電話無言で受話器そつと置く

東大阪市 安 永 暁 子

波風を立ててはならぬ喉ぼとけ  
目に青葉小鳥の声を聞きに行く  
餌をさがすびつこの鳩に米をやる  
自慢のように親を越せたは靴サイズ  
よくぞここまで溜まったものだ不用品

東大阪市 西 村 哲 夫

菩薩様さてさてさてと思案中  
お浄土で終着駅だと起こされる  
俱会一処 ボクの運もありました  
不思議ふしぎ我が分際で米のめし  
気がつけば母の手枕如来様

交野市 福 崎 しげお

あばかれて満たされたのか顯示欲  
大気汚染馴染まなければ生きられず  
言論の自由へ楔 宮仕え  
満ち足りて貧しいドラマにある人気  
クラス会雄弁になるルーブタイ

箕面市 岩 津 ようじ

遣伝子が何だとトビが生んだタカ  
上衣手に弱冷車選る瘦蛙  
ののしって慣らされてゆく消費税  
亡父にいう他人さまにはいえぬこと  
頭取の尻尾に恐れ入る狸

池田市 金崎峰子

お互いに無理しないという齡に

卒寿とは思えぬ友に励まされ

幼い日浮んできます泰治の絵

遠くてもうなぎ買う店きめている

幼児の幼い願ひ笹にさげ(セツ)

豊中市 安藤 寿美子

バグマンの帽子召されてお旅立ち(智子さま)

あじさいが心変りをそそのかす

喪服着て豚まんの袋提げている

どこからも牽制球は飛んで来ず

どないする気やと自分を叱りつけ

豊中市 田中正坊

重役がネクタイのない顔さらす

小うるさい小銭ちやらちやら消費税

老春は二度の思春期かも知れぬ

生きているから喜びも哀しみも

欲みんな消えると体透けてくる

豊中市 吉田 あずき

友の訃へ蠅一匹がたたかれず

夏至すぎて夕陽南へ帰り出す

七夕へ老女も秘めた願ひあり

切札がなくて貧乏ゆすりする  
火星探査車 漫画のようなエアバッグ

豊中市 江口 明光

返さねばならぬが今は返せない

しなやかな眉描き鬼を飼っている

結び目をほどいて終る紙の鶴

育つ孫十四歳か叱れない

QアンドA妻には妻の希みごと

豊中市 井上 直次

バッグには歴史街道フルムーン

二度の職ふんぎりつけて赤いタイ

追い風に乗って世間を甘く見る

古里のビデオに見入る今日祭り

亡き母のテープに元氣貰う日々

豊中市 月原 方郎

へそくりがうまい話に乗って消え

七十歳乗せてくれない観覧車

車椅子に乗って迎える見舞客

毎日をこまめに生きる車椅子

栗駒を降りてランプの野天風呂(栗駒山)

豊中市 滝北 博史

孝行をする気ないけど親がいる

北新地の老妓と小唄ゆかた会

何の兆し庭にたくさん半夏生

震災で崩れた池に蓮の花  
ばくたちの中三のころ思う日々

堺市 吉本 菁風

充電に來いと故郷待つており  
記録より記憶に残る人であり  
名を惜しむ死語になりけり社会面  
またしてもマスコミ噂たれ流し  
原作の中味を落とす映像化

堺市 山本 半錢

ナイアガラ霧にカメラと突入する  
大水河輝く白に点となり  
断崖絶壁マウンテン・シープの細い脚  
旅終えてガイドブックを読み返す  
伝説になってしまった亡母の寿司

堺市 志田 千代

話上手まるで教祖様のようだ  
卒論の資料百円本となる  
蚊を叩く快感蠅つぶす不快  
母親にそっくりの恋してるよう  
宿浴衣粹に着こなす人のいて

八尾市 内海 幸生

昨日 今日 あすも海だけ船の旅  
視界みな海ばかりなり鳥の舞い  
日が暮れる何もできずに日が暮れる  
雨乞いの雨にもらった土砂崩れ  
ムツゴロウ賄賂贈らず死すと書く

八尾市 宮西 弥生

時どきは輝く日のための坐禪  
子のいない女で明日の風に舞う  
仏の数より少なくなつてゆく善人  
三度目の正直に出会うまで歩く  
茶髪して変身仏に叱られた

八尾市 宮崎 シマ子

人並のこともできずに小さく老い  
おとなしい猫になつて回復期  
相槌を打てば相手も共犯者  
表沙汰にさせぬお金という力  
一つ早い電車ライバル乗つたらし

八尾市 高橋 夕花

早朝の電話胸ドキドキ足ガタガタ(智子姉に捧ぐ 三句)  
君逝つてさむい寒い桐一葉  
亡きあとのずつしり重い露の臺  
如何にせん路郎忌と重なる誕生日  
七月は私の命 星の降る

八尾市 吉村 一風

詫びる文切手真つ直ぐ貼り直す  
言葉巧みに叱る女の店で飲む  
爽やかな虹を画く子に魅り  
一枚の絵にあいづちをうつ他人  
君にはまだ母さんが居ていいよなあ

八尾市 大内朝子

松風に龍馬を偲ぶおらが土佐  
紫が脱げぬおんなのやせ我慢  
緑陰の風に甘えている亡母よ  
生ききった蟬バンザイをして眠る  
追憶の旅をたどれば亡父母の風

八尾市 生嶋ますみ

目を閉じて順番を待つ眼科院  
年金を受取る顔の輝いて  
保険屋の老後老後と言いつぎる  
すててこを許されている孫の留守  
生真面目と言う遺伝子を組み込まれ

松原市 玉置重人

無為無策男の髭が伸びている  
減点法私にすぐにゼロになる  
植えたての田へ空き缶を捨てて去に  
孫曾孫土産の数もふえた旅  
好き勝手してます感謝しています

松原市 小池しげお

杖にする木にはたっぷり水をやる  
三つずつ分けると余らないミカン  
勢いのある字で返事書いておく  
信号の青まで待てる年になる  
人数の都合でいつも呼びにくる

藤井寺市 福元みのる

身嗜み緩むに連れて老けが込み  
励まし合いが労り合いになる夫婦  
昔華宵に惹かれ彦造に奮起  
墨一色のペン画に多彩あるを知り  
無理言ってじらす本音は好きなのに

藤井寺市 鴨谷瑠美子

虫の音を尼寺でこそひとり聞く  
根っこまで愛が育っていた桔梗  
平凡な女にあった導火線  
冷えている身体に温い色を着る  
お月さま昼の戯れ許されよ

羽曳野市 田中透太

薄情な女が酒を酌ぎこぼす  
世渡りの下手な男の数え唄  
海に来てや々と赦せる息を吐く  
どっこいしょこれから先は下り坂  
朝食のパン焼き過ぎた昨日今日

羽曳野市 福田満州

御遺徳を偲びあじさい忌と覚え  
みささぎの蟬が目覚まし時計です  
ありったけの知恵で失敗くりかえし  
お父さんすし屋に負けぬ飯を炊き  
治らないかもとぎょうさん薬くれ

富田林市 片岡 智恵子

妹の声昨日より遙か向うで (十五歳違いの妹急死 二句)

逆縁へ母の港の灯が煙る

見つかるように隠れる姉のかくれんぼ

結論まで聞いた話を聞いてあげ

人生の垢落しすぎうつろなり

富田林市 松本 今日子

五月晴れ登校拒否の子と遊ぶ

その子にはその子の絵あり信じよう

孫に來たラブレター読むドキドキと

たわいない話が弾む柿の種

こんな時買えば当るか宝くじ

河内長野市 植村 喜代

六月の風辛い話が飛んで來る

少年よどんな顔して友殺し

台風と少年六月をふるわせる

病院へ毎日同じ道通い

もうレンゲ咲いているんだふと思う

高石市 浅野 房子

閉ざされた窓はノーだと言っている

老人と言えども好きな人は好き

冷蔵庫一杯にして飢えている

胡蝶蘭枯れてあなたと共に逝く

クーラーの風に風鈴静かなり

岸和田市 高須賀 金太

土石流 地球断末魔の悲鳴

紐掛けるように飛行機雲流れ

決断がつかず飲んでしまった 酒

レコードは置いてないのにレコード屋

傍観者になり好きなこと言うてます

岸和田市 芳地 狸村

日本語が通じる電話ありがたい (ロンドン)

ロマンスの舞台に酔った旧市街 (ハイデルベルグ)

看板のすかし細工が素晴らしい (ローテンブルグ)

モナリザに見とれて孫と行違い (ルーブル美術館)

ブランドの袋が重いパスポート

岸和田市 原 さよ子

呼び合える距離にいて子にあてにされ

落札のいびつな瓶を床に置く

ドリンクを一本飲んでまだやる気

切り返す言葉がすぐにわいてこず

参道は人影まばら梅雨明けず

岸和田市 長谷川 呂万

こけしにも郷土の味が夫々に

賑やかな人でしたから賑やかに

アナウンサー ニュース報道にもファン

お粗末なお口汚しというキャビア

お祭りが好きでダンジリ曳いている

岸和田市 田 中 文 時

自販機の酒夢に出る回復期

花言葉知らずカサブランカ買う

身の程を知れと鰥夫の友が言う

一徹の父が頷く気の弱り

夕刊を慈しむよに配る古希

岸和田市 井 齋 一 齋

家の価値ぐんと下がった三代目

コチコチと明治が生きる掛時計

十年の満期を目処に生きてゆく

舌戦にあきれた公約まかり出る

プライドが無駄なお金を使わせる

岸和田市 古 野 ひ で

肥後守鉛筆削るなつかしき

空っぽの頭で長雨じつと見つめてる

句の影が少しも見えぬ暑さかな

ていねいに今日噛みしめる八十路坂

今日も無事御飯美味しく食べてます

岸和田市 寺 田 甚 一

悪い奴と言われみんなに親しまれ

天国に遊んだあとの二日酔い

気遣いの遠慮辞退と受取られ

性格が似過ぎた友と反り合わず

割り勘の酒に恰好などいらぬ

貝塚市 池 田 寿美子

精いっぱいシャンソン唄い生き延びる

店頭の行列に見る好奇心

水菓子に蜜のいのち重ねてる

インターネットやがて地球が狂うだろ

蓮開く川の向こうにめぐる日を(小出智子さま追悼)

和泉市 西 岡 洛 醉

ポンポン船木場に明治の影残り

夢を追いつた現実を追いつた雲の峰

孝行の真似事決めた盂蘭盆会

三面鏡女の本音見つけたり

日溜りの余生に今日も夢を追う

大阪府 榎 山 隆 盛

秋茄子を姑と嫁の皿に盛り

逃避した宿にも逃げる非常口

走る恋袋小路につきあたる

本命にされて罵声を浴びる馬

フランス料理箸で気ままに食したい

大阪府 八十田 洞 庵

盆栽は父の好みに曲がらない

三猿を捨てて御説に合わします

時効とは言わぬが妻もあきらめる

残照の中に立つ群れ戦友よ

ねじそつと巻いて夫の陰に添う

神戸市 小林 一夫

智子逝く 長いトンネルがはじまる

智子逝く タイルの花絵見えています

六月に広がる空やあなたの忌

ネクタイの少し苦しくあなたの忌

蟻の如つづく喪の列 紫陽花忌

神戸市 池田 善守

運動会最後の子にもテープ待つ

大切にされて長生きしてる夢

駅前のここに本屋があつたはず

笑い顔みんな美人だハンサムだ

引越してへそくり迷子捜索中

芦屋市 黒田 能子

若者には生まれ小さく座ってる

昨日から新聞をまだ読んでない

サングラス隠し通した嘘ひとつ

ほどほどの力で足りる荷を背負う

長年の夫婦さらりと暮してる

尼崎市 春城 年代

師の面影を眼裏に溜め偲ぶ（小出智子先生を悼む）

泣くよりも苛まれる訣れる

長い手紙に重い返事をいただいて

メツと言う眼があたたかく優しく

手花火の松葉となつて深い闇

尼崎市 春城 武庫坊

老いの意見をすぐ裏返す夏の風

風鈴を吊つたら梅雨がすぐ明ける

梅雨豪雨噂行き先見失う

シャープペンシル男の愚痴がつまってる

運不運であきらめのつく齡になり

尼崎市 長浜 澄子

七夕さま小さな秘密できました

言い足りぬ言葉を紡ぐ揺れる椅子

息詰めてみてもだあれも気付かない

母さんの明るい声が頼りです

ポテトチップスささやかな夢聞いている

西宮市 門谷 たず子

こころ病み毀した古い家を恋う

わたくしを変えろしかない飯茶碗

子も孫も呼びたくなつた水呑場

咲かぬ花にも同じに注ぐ如露の水

生き様を問われる靴が脱いである

西宮市 西口 いわゑ

雨しとど大事なひとの計が届く

ほめることも心得ている姑だった

ビール冷やして花にも水をあげましょう

あじさいに女の顔をのせてみる

ちぎれ雲子はそれぞれに親しい



西宮市 奥 田 みつ子

疲れ果てたとか細く告げる目がうるむ（習子さんを悼む）

幸せだったの一言何より重し

緑濃き山ふところに還られし

錯覚か鳴るはずのない電話ベル

それからの日々虚ろなり虚ろなり

西宮市 亀 岡 哲 子

雨期続くレモン一盛り買い足して

柔らかい爪で魔女にはなり切れぬ

水しつかり飲んで萎びてなるものか

ペルモコの半券が出た古靴

雨期終りバーゲンの傘選っている

西宮市 山 本 義 子

ご免なさい仏花お日持ちせぬ暑さ

十年定期満期くるまで生きますよ

退職後も序列のずつとある無気味

ときどきは造花に霧を吹いてやる

愚痴する海は荒れてるほうが良い

西宮市 秋 元 て る

他人様に育てられた子の親思い

波瀾万丈過ぎれば結構面白い

子のためと夢中で生きて病抜け

からくり時計あの日に戻りたい人に

ラッシュアワー似たりよったりの顎並ぶ

西宮市 菊 池 トミエ

雨上がり家族の傘はカラフルに

余生とはこんな形か無人駅

笹百合が咲いて草刈る亡父思う

家族みな達者で居たい梅漬ける

一人逝く片道切符予約中

西宮市 牧 渕 富喜子

松風に父の声する墓の道

這松に変わるこの先神の郷

子供らは今ひまわりを画けない

真っ直ぐな目に傷跡を見せてやる

父に似てちつとも吠えぬうちの犬

西宮市 久 保 まさお

訃報しきり余命は知らずつゆさ中

しあわせもひとつください月見草

仕合せのひかり燦爛立ち葵

無人駅仰ぐは阿蘇の活火山

火口壁そつと見上げる阿蘇の霧

西宮市 刈 田 泰 司

人恋えば雲の流れの早いこと

恋ですかお遊びですかイヤリング

老いてなお楽し碁の友酒の友

壁の絵に惹かれて通う小さな店

甘口の酒にときどき殺される

川西市 松本 ただし

知らぬ間に持病となつて身をまとい  
聞いてたら病氣自慢に見えるだろう  
もう少し歩こか雲についてゆく  
捨てるより諦めてゆく欲の数  
都会の灯自己顕示欲強すぎる

宝塚市 上田 佳秋

妻の忌へ詫びても済まぬ事ばかり  
絆ひとつ切れる予感の受話器置く  
乙女座の故か腑甲斐のないわたし  
エレベーター人夫々に無表情  
誰ももう指切りなどはしてくれず

宝塚市 黒台 伊佐武

小夜更けて月に遠音の村囃子  
糸蜻蛉弱々しくも優雅なる  
日盛りを焼きつくさんと蟬時雨  
惜別の余韻漂う夏の月  
佳き人の不帰の知らせを聞く夜寒

加古川市 吐田 公一

左遷地の上司とウマが合う屋台  
酒肴持つて三途の川渡る  
飾り物にされて言いたいこと言えず  
心掛け試されている奉賀帳  
わずかずつ立場が代る姑と嫁

相生市 中塚 礎石

ハイヒールちびてヒップが太くなり  
謝罪する課長代理は板につき  
勲章の男の無力たむろする  
遺言を書こう書こうとまだ生きる  
ばんやりと記念切手の列にいる

奈良市 宮口 笛生

熱いから焼かんといてと母が逝く  
公園のD51皆に愛される  
犠牲者の出るまで梅雨の降り続く  
お茶漬がうまいすこし酔うている  
智子さん惜しまれて逝く梅雨晴れ間

奈良市 米田 恭昌

アルバムに若さあふれる妻の青春  
悪役が名を伏せ励むボランテア  
訥弁の建て前本音見えすぎる  
表札の妻の名前がでかすぎる  
口うるさい妻が不在で頼りなし

奈良市 天正 千梢

お休みなさい今日の日付に引く斜線  
太陽の匂うふとんのしあわせよ  
母性本能 飲みすぎないように  
老いひとり雀に米をまいてやり  
泰山木咲けば咲いたで思い出し

奈良市 吉田笑女

風鈴の音も涼しげすだれごし

一步外へ出たらお金が物を言う

テレビ見て気持をほぐす独り者

朝夕茶を供える湯のみにひびが入り

今生きて居てくれたらと娘を想い

生駒市 麻生アート

皿洗い機ボスト女房というかたち

バードウオッチ喰べたいような鳥も居り

独り者のグラタン皿が欠伸する

今日を占うネクタイの締めぐあい

シェーカーを真似てヤクルト振って呑む

生駒市 北山悟郎

足跡を大事に残す老いの坂

一日を美しくする汗流す

ひたすらに前向き心燃えたぎる

先進国僕一員のおもはゆさ

自分責め人を責めずに天仰ぐ

大和高田市 岸本豊平次

古希をまだ叱ってくれる師のありて

呆け防止軍歌が四番まで歌え

原節子を観た松竹座で大向う

不幸中の幸いなんて他人ごと

夏至の陽に庭の隈なく緑映え

大和郡山市 坊農柳弘

草いきれ秋手探りの地藏盆

夕顔が涼しい夏に早々と

孫五歳初めて蚊帳を見た帰郷

夏大根母の小言の味がする

夕立をシャワー代りにキャンブ村

奈良県 長谷川春蘭

がまんがまん孫のしつけに眼をつむろ

子は宝そんな言葉にある誤算

ノータイで気楽に出来る五七五

日めくりの中を歩いている命

梅雨傘で投函の音たしかめる

和歌山市 福本英子

彗星の騒ぎは何処天の川

チンだけで出した料理を褒められて

忘れない中に彫りたい亡夫の面

二十年よたよたと来た道ひとり

想夫恋恥じらいながら白百合と

和歌山市 堀端三男

盆栽ひとつ置くにもあった裏表

目立たないとところで善を積んでおく

ひと言が忘れられない女にする

的を射たコラムに負けたなと思う

老若男女みんな自分の港あり

和歌山市 川上大輪

返品も交換もせず妻とい

汗かいてるからいい人だと思

回れ右すれば景色も変わります

お早うさんただそれだけの顔なじみ

不意に笑い出す消し忘れのテレビ

和歌山市 川上富湖

父の真似 母の真似する鳥を飼

風鈴が騒ぐ凧子を読み終えて

落とし穴も抜け道もある但し書き

ひよこひよここと亡者も揺れる熊野灘

柔らかき受胎告知の残る耳

和歌山市 木本朱夏

仏壇に花の無き日をかなしめり

振り向けば夢と契ったあとばかり

耳朶に愛の科白をぶらさげる

セロファンに包んで仕舞う夏の恋

いつぞやの顔が別れであったのか

和歌山市 桜井千秀

血液型できめられている人間味

意地っ張り淋しがりやで泣き虫で

岐路いくつその都度生れ変われたら

心細さにこぼす涙は本物だ

虚勢張るあなたに最早無い砦

和歌山市 青枝鉄治

役付きになつて変つた主義主張

野次だけの議員が税を食い荒らす

嫌われているとも知らず見栄を張り

一族に政治屋いないのが誇り

税吏さえ税の高さをなげく日々

和歌山市 福井桂香

アバウトの評価ばかりを下される

夏瘦せをしたのは庭の糸蜻蛉

露天風呂に浜木綿と二人つきり

なめらかな乳房に埋もれている呪縛

夏帽子まだまだ夢は捨てきれぬ

和歌山市 細川稚代

狂乱の宴の裁きいつ果てる

抱かれて命が宿る人形の目

天国から届くファックス待ってます

前置きが長くてかさむ通話料

目いっぱいほおばる故郷の目はりずし

和歌山市 堀畑靖子

様子みています夢なら覚める恋

富むことなく母召されたり天の川

ありていに無いと申せばけりがつき

表向きばかり繕うプラントー

弱虫が居直り続く無言劇

和歌山市 榎原 公子  
乗り遅れまいぞカタカナ辞典買へう

露地物を虫と分けあう自然体  
伸縮自在互いに結び合う手綱  
一山が雨に梳かれて生き返る  
雨の日の和音わたしを取り戻す

和歌山市 岩本 美智子

約束の刻み仏になり給う（小出智子先生追悼）

亡母に似た人追ってみる花菖蒲

母の忌に今年も活ける白木槿

母さんの忌は雨降りになりました

蛍昇天ぼつりぼつりと青い雨

和歌山市 古久保 和子

交番と一つ違いと言う電話

茶柱が斜め雨傘持つて出る

目薬が効いてときどき虹を見る

星空から殺し文句が降ってくる

アルミ缶握り潰してへラクレス

和歌山市 池永 正 嗣

入道雲海へ海へとけしかける

新聞に載らないほどの人助け

賑やかな光の方へ行きたがる

曲っては風情を作る川の面

キャンプではなく夜當なる重い文字

和歌山市 玉井 豊 太

おじぎする親の姿を見せておく  
若者は傍の見る目を気にしない  
招待の酒にあまえて目が据わる  
ひたむきに歩いて落ちぬ身の汚れ  
せち辛い世の中向きがわからない

岡山市 時末 一 灯

茫洋として沈黙は金と言う

宥めても騙しのきかぬ病抱く

またふえた死語の供養をせにやならぬ

楷書から行書にかえただけの日々

清談も男と女が見えかくれ

岡山市 川端 柳 子

ドシャ降りに夫婦の絆締め直す

郷愁の舌をころがす甘い味

風鈴チリン夢追い人を育てます

古鏡古い私よどこへ行った

瞳がきれいな娘は人形の母になり

岡山市 井上 柳五郎

平凡のしあわせ傘寿にて覚り

雑踏の喧騒にいて孤独感

ネクタイに背広拷問暑い夏

夏痩せのしなびた父の細い腕

ど忘れもまた居眠りも老い二人

年金のか細い腕で口達者

岡山市 花田 たけ志

結果からの判断汗が苦笑する

アクションが勝利監督派手になり

新入りを迎えて弾む唄の会

思う事多く寝付きの悪いこと

倉敷市 小野 克枝

見るだけの虹にドアを開け放つ

空気と水の夫婦になってカルタ取り

半分に聞いて辻褄合う話

言い訳のできる高さに友が居る

爪丸くきれいに齢をとりました

倉敷市 田辺 灸六

ふるさとの山が緑を着て笑う

我が家がいいな三日の旅疲れ

地獄までおいでおいでをする麻薬

国籍を越えて土俵の鬼となる

旅が好き人の情けに触れるから

倉敷市 井上 富子

傷鳩が治り平和の使者となる

手際より人情を盛るレストラン

カタカナ語で高級感をちりばめる

福祉事業を食い物にするカラス

Uターン父の遺した桃畑

競馬ほどの視野で老眼鏡がいる

数は見栄烏合の衆でないように

電話機がこわれるほどに怒鳴られた

平成の空気も知らず亡弟よ

指切れば天罰らしき罪のかず

岡山県 矢内 寿恵子

お人柄惚びはるかに合掌す(智子先生を悼む)

年金の夢は小さく書き直す

未来図がかすみはじめる世紀末

刹那せつなを積んで崩しているドラマ

墓参り逢いたい人が増えている

岡山県 二宗 吟平

剣花坊の句と握手した院庄

チョイ置ききのチョイと忘れてチョイナ節

あれこれの頼み果して寝正月

酒の癖巻いて酒の座そつと抜け

古城趾も句碑の感化で丸うなり

岡山県 荻野 鮫虎狼

悪友の好意上座に座らされ

巡礼の道 野良犬が従いて来る

歯科 眼科 老人医療が吹き溜り

父の日の天眼鏡はよく動く

華やかな女が泣いた舞台裏

岡山県 山本玉恵

ひとり呑む酒の小言をきいてやり  
マリオネットの糸のもつれか罪一つ  
風は夏自我に目覚めた花の彩  
母と少し違う女の道を選ぶ  
想い出も褪せる峠の途中で

岡山県 大石あすなろ

すこやかに老いる明日にまだ燃える  
約束を破る小指の痛さかな  
赤を着てパワーアップをしたい夏  
バラ一輪波長の合うた壺の彩  
相づちを打ったばかりに火傷する

岡山県 江口有一朗

児の曰くちよつとゆつくりしてみたい  
悲しみはどうあれ仕事せかされる  
雷も予報に合わせ鳴り始め  
老人ホームの暮し甘くはない噂  
現実の見えぬバーチャルリアティー

岡山県 福原悦子

命の軽さ果敢さ思う兵の墓  
眼鏡拭き今日のプランを思案する  
打ち返す鉄は先祖と私語交わす  
的を射た父の言葉が温かい  
涙つば枯れて仏の瞳にすぎ

鳥取市 両川洋々

土壇場は神にリリーフ頼もうか  
税務署よ君は引き算好きです  
弱い鬼だから手の内見せたがる  
老いらくの恋ときめいてなぜ悪い  
絵に書いた平和へ不安ないですか

鳥取市 西村黙光

雨続き腐敗しそうな粗大ゴミ  
酒出すとや々と本音を覗かせる  
缶詰の脳細胞を賞味する  
物言えば火傷しそうな渦の中  
敵味方見分けのつかぬ下り坂

鳥取市 杉本孝男

負け方が立派でしたと褒められる  
ライバルの持たぬアンテナあげてみる  
調子づくまでに舞台の幕が下り  
そのままでもいいよ二十歳は美しい  
何もかも妻が舵とる余生です

鳥取市 美田旋風

声援で僕を麻酔にかけてくる  
花に水やるにも妻と食い違う  
目を入れたダルマがひとり歩きする  
満洲の落日木漏れ陽が赤い(田満洲の旅 二句)  
二〇三高地 記念の塔が夢となる

鳥取市 岩原 喬水

酔つても軍歌唄えば武者になる

陣痛に夫も腹が痛みだす

影武者が裁きの庭で土下座する

孫が来て裏話までつい喋り

困つたら頼りにしてる妻が居る

鳥取市 植田 一京

初恋は袴姿の君だった

アルバムの中にちらちら過去の女

希望する結果といつも食い違ふ

この辺で赦しましょうか指切りで

地獄絵図もし本当ならどうしよう

鳥取市 春木 圭一郎

北風になれずお日さまにもなれぬ

向い風それでも船はまっしぐら

風のまま雲は流れて今日も暮れ

ふる里に心を洗う風がある

風鈴を聞くあの人がそばにいる

鳥取市 小谷 美ツ千

その昔母も歩いた今も炎天

病母の乳房はきつと炎を抱いている

大切な時間を温めながら行く

貴男の宇宙のたつたひとつの花になる

微睡みの芯まで沁みる君の息

倉吉市 野口 節子

ほんの一瞬先に散らせてくださいな

年金を信じ続けて好いかしら

九十のじいちゃんまだまだ本の虫

かげろうのような絆を温める

彫り上げた面が勝手なことを言う

倉吉市 米田 幸子

老人の声を天まで届けたい

天と地の間で花がゆれている

金持ちになつたら外車乗り回す

駄目なのを駄目だと言えぬ世が怖い

血を分けた結び目だからゆるまない

米子市 澤田 千春

ハガキ一枚故郷の蛍が呼んでいる

まみれつく花はわたしの化身かも

松籟が父の読経をのせてくる

灰汁ぬきをしすぎ悲しくなってきた

たじろがぬ崖に一輪百合の花

米子市 石垣 花子

子供達へ亀観念の目をとじる

小石一つの波紋中々おさまらぬ

神妙に法話を素通りさせる耳

裏帳簿息をひそめている戸棚

ためらわず脱ぐ娘ヘカメラ面喰らう



米子市 野坂 なみ

教育ママが盆栽松にしてしまふ

畳の目埃吸つてもさりげない

餓鬼大将に逢うと方言こぼれだす

花暦とりどり仏なごませる

世話になるアロエの花にまだ逢わぬ

米子市 鷺見 正子

清貧の暮らしでアンチ・ジャイアンツ

雲の上のモンローよりもうちの妻

頼りない男乳房を響かせる

わたくしに似てる息子のお嫁さん

銀行へ行くと奥まで通される

米子市 白根 ふみ

波があろうに水平線はおだやかだ

法話きく波をしずめるように聞く

歪な壺と知らずに百合がよく薫る

大根が煮える不思議と亡母がいる

鬼灯が熟れて不思議な音がする

米子市 光井 玲子

いい便り明日の朝までひとり占め

一段ずつゆっくり上がり今がある

苦い水飲んで蜜は人ぎらい

ほんのりと初恋の味草いちご

茜雲遠い記憶を呼び戻す

米子市 木村 富美子

かもめにも悲しみがあり群に居る

苦勞した話はしない蝶のはね

草刈りのははが背に負う百合の花

約束を果たした肩のローレライ

今日泣けば明日が涙で消えて行く

米子市 中井 ゆき

薬包紙散薬とばし夏になる

棒杭のやさしさ好きな川とんぼ

遍路みち草もそよいで慈悲の顔

胸の内怒涛はみんな空にする

すぐ替える首がないのでそのままに

米子市 永井 三津子

苦の地獄知って小さな幸に酔う

表裏無く花は命を燃え尽くす

母の歌音痴だけれど胸を打つ

何もかも忘れた母の凝拭く

ジェラシーよりも食い気を好む歳となり

鳥取県 新家 完司

靴下に孔あり青い空の下

夢いっぱいくれる十年パスポート

監督になると似合わぬユニホーム

薄汚いところ見詰めて手を洗う

心がけがそのまま顔に現れる

鳥取県 土 橋 螢

人間の顔に五感の壺があり  
正確に脈が毎分六十五  
やがて死ぬ螢が籠の中にいる  
草むす屍夏草に寝ころんで  
残り時間を大切に昼寝する

鳥取県 土 橋 はるお

玄関先に女に弱い犬がいる  
阿呆にするから険しい顔をしていよう  
末席で険しいことを言いだした  
延々と無職に蟬がなっている  
平社員の居ない会社の社長さん

鳥取県 土 橋 睦子

八月の炎は夢となり難し  
海の絵に夕陽の赤がよく似合う  
ポケベルが滝のしぶきにかき消され  
電線で家庭学習する燕  
墓石のひとつひとつに恩がある

鳥取県 林 露 杖

飯米だけの田でも気になる稲の出来  
日曜版バズルみな解き茶を吸る  
オウム以後殺し破廉恥頓に増え  
破防法不発を悔いる秋がくる  
被害者の心も思え弁護人

鳥取県 乾 隆 風

晩酌だって毛穴を洗う汗となる  
ライバルの拍手鼓膜が破れそう  
あやまちを思い起こせと叫ぶ蟬  
鉢巻きをして昼寝する大工さん  
帯芯の中に炎を閉じこめる

鳥取県 大 角 正 道

子どもの頃から青空が大好きだ  
満点をとる脳味噌は持っていない  
不器用で捨てる術しか知りません  
寄り道をしてから答え見つけます  
淋しくなつてアルバムをまた開く

鳥取県 羽 津 川 公 乃

贅沢に暑い寒いと生きている  
瓶ひとつ余分に漬けた梅の出来  
十円で頑張る玉子ありがとう  
花いちもんめ先ずライバルを攻め落とす  
返し針女の嘘はくどくなる

鳥取県 石 尾 かつ 乃

風船に託そう夢をぶらさげて  
留守番もまたよし趣味に囲まれて  
姿見の中で女の灯が燃える  
解約はすまい明日が解らない  
振り返る旅の疲れの出ぬうちに

鳥取県 谷口次男

理想論ばかりで社でもカヤの外  
理想から遠い同士のティータイム

あべこべの結果があつて面白い

巧妙に男を利用する悪女

楽をして金を儲けるチラシ刷る

鳥取県 西原艶子

魂がさ迷う夫を見放せぬ

記憶喪失というしあわせかも知れず

もの思いとぎれ許せぬこと思う

哀しみを溶かす万能薬がない

美しさひとときなれど夢紡ぐ

鳥取県 田村きみ子

ばあちゃんと呼ばれて愛のありったけ

外は雨冗談言つていいでしょか

赤とんぼお前も元氣だったのね

向日葵さんお前も日焼けしたんだね

長居して構いせんかお母さん

鳥取県 さえきやえ

落ちこぼれの種がみごとな花咲かす

わたしから草かんむりがはなれない

リストラもなくのんびりと鍬一本

二の矢三の矢かまえて妻が動じない

素顔のままで生きよと孫に書く便り

鳥取県 橋本多哥由

火葬場で骨の話を聞いている

花が散るまでに遺影を撮っておく

女の園ざくざく噂掘り出した

らっきょうをくばり恩師を偲んでる

無口ふと喋りたくなるカバンです

鳥取県 黒田くに子

プロポーズ妻がおぼえていて困る

風邪の床ふとあの世を考える

きつちりと愛の乳房が張ってくる

頂いた恩を返せぬまま老いる

頂点の椅子で友とのすきま風

鳥取県 上田俊路

因習に馴染み過疎地に腰据える

山低く父の笹が返らない

墮落した鬼から消えた火の匂い

嘘ついた口をすすいでから拝む

土石流自然破壊の報いだろ

鳥取県 太田幸枝

呼び戻せ日本の心青い空

飽食に溺れて心やせている

父母の歳越してゆうゆう趣味に生き

朝刊のお悔み欄を真っ先に

百歳の気骨に喜寿も負けられぬ

松江市 舟木与根一

七人の孫に隔世遺伝が一人  
少年法殺され損をどう裁く  
死に損ないの運の強さで五十年  
泳ぐのは泳ぐがやはり蛙の子  
火星探査車 地球の未来暗示する

松江市 柳樂鶴丸

自画像にバラ一輪そえて描く  
時々豪速球投げる妻  
木綿のハンカチーフの好きな妻  
グラウンドにたつと走ってみたくなる  
枝豆を一層おいしくする緑

出雲市 園山多賀子

花言葉探しています鬼あざみ  
紫陽花の色を好んで孤を守る  
一刻を自己陶醉の蟹気楼  
義理堅いところ是非か母譲り  
蝸牛優柔不断持て余す

出雲市 吉岡きみえ

幸せは回しつづけた独楽ふたつ  
よく降る雨につぶやく水中花  
以心伝心逢いたしと言う電話  
縄梯子ゆるんで高所恐怖症  
背を曲げたわたしみにくい影法師

出雲市 板垣草丘

長雨に隠せずトマト熟れてくれ  
銀紙を巻かれ哀しい鳥の足  
たまに勝ちはやぐ巨人を不思議がる  
仕事でもボランテアでもなく忙しい  
蚊帳吊った頃には何もなかったね

出雲市 久谷まこと

年金に見合った旅に練り直す  
自慢した分だけランク下げられる  
定年の靴に昔の夢残る  
うるさいがやはり隣に座らせる  
親心昨日は昨日今日は今日

出雲市 板垣夢酔

許す気になったが娘折れてこぬ  
茶柱に期待したのにもう日暮れ  
大雨が汚れた野山みな清め  
わあと出て我が家がいいと旅疲れ  
もう歳で後は神さままかせます

出雲市 竹治ちかし

似たような顔が喫煙席に寄る  
下車準備して一服の火を付ける  
陽が昇るまでには脈を整える  
下駄の音途絶えて眠るお湯の町  
不思議だと思わないから大人です

出雲市 小玉満江

押し花展花は命を永らえる  
夕あかねドーム横切る飛行雲

ドア押して外は真夏のギンギラギン

行く先は真つ暗闇の少年A

終戦日遺族に深い顔の皺

出雲市 石倉 芙佐子

むらさきのロマンで綴る古稀の坂

一言を今でも信じ秋の川

智子先生の星は何処よ天の川

ちっぽけな噂に負ける風の町

媼様は鞆と傘をはなさない

出雲市 小白金 房子

変形も熟す我が家の初トマト

観光地歩き疲れた夏ぼうし

花びんから愛がこぼれるいい日和

夫よんで好取組へ加勢する

情けいっぱい生きる姿を子に残す

出雲市 岸 桂子

自分史の途中にあった無のページ

しがらみをぬけて温泉で棘を抜く

何をしに生まれて来たかまだ不明

汽車に酔うほんの些細な悩みごと

さようなら夾竹桃は花盛り

島根県 松本文子

グラスの中でやっと落ち着くひとりごと

やがて陽が昇る元気になる箸

日本縦断やれやれやと病母に着く

ロウソクがゆらゆら私のだらうか

ことばなど要らぬ夕焼雲と居て

島根県 堀江 正朗

災害のニュース神話の里除けて

雨音も話し相手にしてビール

人間の一生ひたすら生きて行く事か

長い闇ぶつかる壁の多くても

聞き分ける言葉も音も空回り

島根県 堀江 芳子

智子さんの笑顔客間に生きてます(小出智子さんを悼む 二句)

打ち消しても寂しさだけの雨の音

さあ書くぞ眼鏡を拭いて身を正す

夢追うた暮らしいつしか金婚に

笑わねば済まぬこの場の痛い胸

島根県 西村 早苗

分校の小道コスモス花ざかり

迷い道ふつと切れてる街あかり

満天の星居酒屋はあたたかい

紫陽花の果てる彩など考える

木の陰に寝てるを見る赤トンボ

島根県 佐々木 鳳 笙

笹舟が沈むと一本橋揺れる  
雷はもう落とさない壺の亡父  
年寄りの知恵が届かぬ核家族  
精根の尽きた五体待つ畳  
やがて曾孫に登らせる気の枇杷植える

島根県 藤 原 鈴 江

すすくと育つ曾孫に支えられ  
生き抜いた青春なれば懐かしい  
台風一過家族団欒夕餉時  
呆け防止なんと素敵なセリフです  
青春が夢の中だがよみがえり

島根県 森 茂 美

沖縄に二ヶ月早い敗戦忌  
磯の香や青田波打つ出雲みち  
子燕の自立を急かす宙返り  
やさしさより強いものなし母の愛  
鶯の声に熱帯夜が明ける

広島市 森 田 文

富める国信じられない事が起き  
怯える世にいやしの彩で咲くすみれ  
核反対声囁れるまで叫んでも  
雨の日も晴れも神島おだやかに  
除草剤に負けずスギナが起ち上がる

竹原市 小 島 蘭 幸

弟と母が仲良く住んでいる  
合宿から帰ると美しくなりぬ  
柔道部に誘われたのは二女ですか  
追悼や師の胸像と向かい合う  
川上にはやさしい人が住んでいる

竹原市 森 井 菁 居

パン食に慣れふるさとに遠く住む  
ライバルに一理があつて逆らわず  
親馬鹿の見本に僕と妻がいる  
言い難い事をフアックスに頼む  
煩惱を少うし悟る五十路坂

竹原市 岩 本 笑 子

カチカチ山へ二人で行ったことがある  
芋の葉のころりと川が始まるよ  
ちよつと拗ねちよつと甘えて女傘  
飼いたの気持ちになれと言われても  
地下足袋が一番似合う夫が好き

竹原市 時 広 一 路

影を見てごらんよ人はみな同じ  
並んだら二人に開く自動ドア  
日曜が続いて雨を聞くゆとり  
矢は一本的が一つで無い悩み  
効くものと決めているんだなあ薬

竹原市 古谷節夫

雲の向き良さそう風に乗って見る

雨が好き蛇の目と和服着て女

絵日記の川へ蜚が乱れ飛び

コンビニの弁当今日も買う夫婦

雑草がマーチ奏でて伸びて来る

竹原市 石原淑子

夢の夜や火星の謎を眼の当り

餌をねだる朝の金魚のフラダンス

雨ニモ負ケズ タヌキ唐キビ食べに来る

最下位の巨人ファンの涙雨

句ですなときめき大事に五十路坂

甘日市市 林野甦光

筋のないドラマ書いてるちぎれ雲

雑草の時を忘れて胸を張り

こうなると女は強い離婚劇

親一人子一人目移りする街で

宛名書き出来て本文まだ出来ぬ

広島県 森川抜智

香港返還北方領土まだかいな

節水は困るでしようと台風来る

油絵の涼氣を贈る雪景色

いらぬ事まで聞いて来る補聴器

トンネルをいつ抜けるのか暗い世の

宇部市 平田実男

仲人の帽子から出た君と僕

鍵つけてから引き出しが軋み出し

敵がいた頃は生き生きしてた僕

握手しているが鎧が見えかくれ

総会屋モグラ叩きのように出る

柳井市 弘津柳慶

ライバルの欠点つかんだ闘争心

未成年教育勅語がわかるまい

策もなく炬燵へ頬杖ついたまま

幕引いて明日から一の人生路

裏町へ住んで人情教えられ

下関市 石川侃流洞

月明りお手々つないで老夫婦

長雨へ静止画像の老夫婦

夢はまだ見ている錆びた捕鯨砲

蛇口から水平凡に生きている

少年犯罪責任論の綺麗ごと

香川県 木村あきら

肩書が背広着てゆく暑さかな

耳タブで女の見栄が揺れている

あの世まで持つて行く金の金を貯め

信楽の狸暑さでのびている

この闇を抜けると海の見える丘

香川県 工藤吟笑

大海の波に男の詩がある

大海を知らず養殖魚がふとる

胸の炎をヒタ隠してる娘の笑顔

満面の笑顔舞台はもう回る

酸性雨知らずに萩は真つ盛り

香川県 山地 マツエ

パーティーで裏情報聞いて来る

一日を手酌でしめる縄のれん

雨つづきひっくり返るオモチャ箱

公約を信じた一票ふいになる

虹ばかり追うて足場を踏みはずす

香川県 池内 かおり

ナイターにへソ出しルック居て楽し

乳飲み児に鉢巻ささせたトラ・ファン

梅雨晴間あわてんぼうの蟬だこと

名を呼ばれハイが言えないけど大人

打たれ強いとこ似て来たたよお父さん

香川県 川崎 ひかり

記念日を忘れ愛情うたがわれ

生き残るすき間見つけた草の種

先走る虚像に真実見失う

沈黙を破れば闇がはじけとぶ

借りがあるだからほこ先すぐ曲がる

松山市 丹下 美津子

母と子の絆を結ぶ一通話

立って座ってじりじりと待つ子の電話

赤青黄 子らで賑わうかき氷

一坪の庭が玩具の定年後

浮世絵の団扇が似合う浴衣の娘

今治市 矢野 佳雲

古里の道くねくねと温かい

信念の有無を造花に聞いてみる

ポケットで握りしめてる自尊心

独立独歩とても好きだという孤独

獲物引くアリを見ているアリもいる

今治市 越智 一水

まつ暗な夜でくちなしよく匂い

どくだみの白さが好きよ雨続き

茶菓子買うて仏の花を買い忘れ

生きるため表と裏の顔を持ち

たてよこの糸を大事にして生きる

今治市 野村 京子

生きてきたすべてを知っている手だな

シナリオになかった人の夢を見る

紋白蝶の行方知れずや喪が明ける

戻らない愛を追ってる遠花火

修復のきかぬおかめの笑いじわ



西条市 片上明水

ご近所も呼びサボテンの花が咲き  
農繁期納屋がくらしの軸になる

サルビアの赤さ土用の陽に吸われ

石竹の色から日記書きはじめ

ご近所へ配るナスビを順に採り

高知市 北川竹萌

少年の日の慕わしい合歓の花

一日の花と思えど杖を添え

茗荷取り潜ると並ぶ花茗荷

還暦を迎え不肖の子は逝きぬ

糸瓜植えぶら下がる日を楽しみに

高知県 赤川菊野

悠久の流れへしばし無我の境 (長江の川下り)

旅に出て別の自分に逢うてくる

長江の空にも丸い丸い月

赤トンボ唄って故郷たぐり寄せ

最後までごまかしぬいたデスマスク

北九州市 梅田宣司

次の手を考えている低姿勢

アイウエオ順で上座にかしこまる

嘘もうそ金は天下の回りもの

まるい輪がお気に召さないのが一人

狂わないリズムに乗っている老化

唐津市 久保正剣

CMがふえた気がする間引き以後

無住寺の無縁仏も待つ施餓鬼

登記簿は日本にある北の島

絵馬吊ってからの賽銭賄賂めき

校門の生首が問う世間とは

唐津市 田口虹汀

赤トンボだってお盆にやきつと来る

紫陽花の前は素通り出来ないネ

忠臣が出ない日本は揺れてるヨ

孝行って何と聞かれて知らぬ親

音立てて川柳塔の袖が落ち (悼 智子先生)

唐津市 仁部四郎

叙勲沙汰ああじいさんは偉かった

ネクタイを買い替えました仲人す

当然にスポーツ欄も金のこと

雷を落とす役目を逃げまわり

生意気な新人ですと連れまわり

唐津市 山門幸夫

求愛の鳩に見とれて箸とめ

しぶ柿が虫に食われて色づけり

プライドもネクタイ共に剥ぎ取られ

「チャンギー」の月も泣いてた敗戦日 (八月十五日 二句)

重労働 死を見つめつつ耐えた日日

唐津市 山門タミ

踏まれても踏まれてもなお蟻の列

母ちゃんが家に居てほしビショ濡れて

メモをしたそのメモ行方不明なり

子どもから教育されて母育ち

母ちゃんのスカート掴むいじらしさ

唐津市 市丸晴翠

定年後レール外して雲となる

老いを知りひと日ひと日を抱きしめる

荒波の向こうに父母の待つ港

職人の父に寄り添う母の影

この世での極楽宿す子の寝顔

唐津市 山口高明

悪党に所詮なれない肝っ玉

天井の染みが疑心を膨らます

決心はしたが一步が踏み出せず

国境の無い列島の民は猫

教科書が部落部落と差別する

唐津市 浜本ちよ

鶯も佐賀のなまりのアクセント

日進月歩生活用品に追いつけぬ

愛でられた花は別れを考える

下積みの声囁らしても却下され

辻褄を合わせて心うそ寒い

砂川市 大橋政良

見誤ったあたりにあった非常口

伝わってくる足音はもう他人

みちづれはお前だったか影法師

笑つてるように紋白蝶が舞う

十和田市 阿部進

のんびりと力まずのぼる喜寿の坂

七人の敵に気配り疲れ果て

主婦達が刺激欲しくてアルバイト

古里へ帰れば五感弾み出す

八戸市 島田昭治

どうしよう亡妻の答えがないものを

死亡欄少し儲けた気がしてる

お地藏さん嘘つきがきたと笑ってる

お迎えを催促したら叱るエンマ

大阪市 小糸昭子

空の青こどもの服が溶けてゆく

シャボン玉空へこどもがたんと出来

鳴き砂に波も耐えてる風の音

鬼が来ることも何時も桃太郎

大阪市 北勝美

招かれてホテルのロビーを車椅子

ウェディングドレス孫がまばゆい披露宴

自己紹介新婦の祖父と声の張り  
百八十度窓の眼下に光る海

大阪市 清水絹子

大阪市 黒崎恭子

無器用も亡父の娘に違いなし  
家近くに移り病人うれしそう  
古希めざし昼寝もしごと仕事好き  
無欠勤なのにのびない棒グラフ

大阪市 町田達子

野性味をその紫が大好きで  
かしましいカラスご苦労さんと歌うのか  
国際永久平和祈念祭典に参加する  
少し弾んで孫と会う日のバースデー

大阪市 清水利武

カラオケを唄えば若さ蘇る  
友達の無理は笑って聞いてやり  
盆栽の苦勞が実り菊が咲く  
無理をして初松茸を食べた夢

大阪市 松尾柳右子

ストレスを電話口から吐いている  
暑い国 男のピアスに連想し  
赤トンボ上手に車抜けて飛ぶ  
古里も世代変りにうとくなり

大阪市 中田あい子

逆風のあとは順風来ると母  
台風の銀座 九州 枕崎  
思うよういけば終りが母のくせ  
腰を痛み道の目線が高くなる

カタカタと音がするよな年になる  
退職し自慢料理の数がふえ  
サン格拉斯美人に見える友が来る  
ひる下がりねこのストレス聞いてやる

大阪市 川内叭笑

総理よりフジモリさんは人気者  
ニューヨーク アイラブ伊良部で大騒ぎ  
中国の今 二制度が試される  
世紀末核がお国を潰す時

大阪市 寺井東雲

百年後地球の知らぬ人間が  
笑うことないのに笑顔つくれない  
二ツ折れ固い握手に頼まれる  
火になった本当の話かたれない

枚方市 前たもつ

少年もトップの悪も凝視する  
長男が葬儀仕切って見直され  
辛抱も根性も上 海女潜る  
子育てに夢中の女満ち足りて

枚方市 二宮山久

出張の宿で人生考える  
旅の宿僕の人生変える人  
二度とないこの人生にわくとうし  
幸せを願うあしたへ流す汗

寢屋川市 富山 ルイ子

初対面親しく声をかけられる（習子さんを偲ぶ）

母の足も一度大地歩けるか

生死のさかい薄氷を踏む如く

梅雨晴れ間杖をお供に銀閣寺

寢屋川市 籠島 恵子

寄ってたかつて息子のネクタイを結ぶ

血液型あてて会話がはずみ出す

あいまいな言葉敬語で正される

逆らっているのではない自己主張

寢屋川市 北岡 波留吉

死を恐れず命大事に老いてゆく

大切な妻飾りものには出来ぬ

名物のうどんが伸びる長ばなし

美しい友情が待つ里帰り

箕面市 椎江 清芳

母の波子の波島の温い春

指名され歌う音痴の枯れすすき

丸ポスト情けも消える風の街

下積みの夫の靴を光らせる

池田市 栗田 久子

桃の実の光るうぶ毛が手に残る

新月のやさしい光窓にくる

並木道去年と同じ風が吹く

般若の面今夜はそつと裏向ける

池田市 岡本 吉太郎

好き嫌い言えぬ時代に永く生き

射るような視線の男まれになり

潮時を見て乗りかえる永田町

トコトンまで落ちてプライドふつとびぬ

池田市 藤井 計光

紫陽花がすねるごんたをいつくしむ

四季のない国から届いた花便り

天ぷらは油の機嫌取りに尽き

自分史にコンピュータが背を向ける

豊中市 湯浅 馬洗

失楽園ビデオにとれば妻笑う

大切に仕舞い込んで探し物

ワントンボ遅れて笑い笑われる

観覧車乗ったときめき風化した

豊中市 松岡 久留美

お人好し人の心の裏よめず

腹割って話の出来る友ができ

反対を百も承知でいどむ恋

病む母に澄んだ空気を吸わせた

八尾市 高杉 千歩

ええ顔になってきはった笑い皺

ラストまで謎が解けない不眠症

わがままな人やったねと通夜にきて

スケジュール余命が従いていきますか

藤井寺市 高田美代子

ハイヒールの脚も見えてる縄のれん  
遠花火去年のことをまた思う

夕立をともに受ける野の仏  
足して二で割れるのならば事もなし

羽曳野市 吉川寿美

橋のない川を渡って逝ったきり  
(智子先生追悼 二句)

流れ星黄泉路の旅はどの辺り  
青嵐人のこころの裏表

風呂敷に年月包んで姉離婚

羽曳野市 酒井一壺

人生をごめんなさいで逃げておく  
逃げ道を作っておけば噛まれない

すぶ濡れで応援をした甲斐がない  
濡れ衣も我慢そのうち乾きます

富田林市 池森子

写真の向こうから走ってくる真実  
白旗を軽く振るから許せない

てのひらをこぼれてからの深き彩  
河の幅雨期も乾期も身の内に

河内長野市 井上喜醉

ありがたや足も自力で酒も飲め  
他人へは相談できず墓参り

公害へ不治の病になる地球  
隠し味ひとつ覚えて娘は帰り

堺市 柿花紀美女

ほどほどの期待通りに子は育ち  
萩の花今年も母の忌にこぼれ

素直になりたい老いへ春嵐  
一期一会旅のドラマを持ち帰り

堺市 黒田真砂

友と見てさえ恥ずかしい失樂園  
明晰な頭脳と共に逝き給う(智子様)

紫陽花に流した胸のわだかまり  
癌告知せずに妹の寝顔みる

堺市 近藤豊子

パソコンにハローキティがよびだされ  
「舞踏会の手帖」を知らないひと

というふりかえることふえてゆくわが手帖  
「路の臺」の手ざわりいまはなつかしき(樟小出智子先生)

和泉市 岡井やすお

稼いでる電器自動車つきマンガ  
悪にさえLMSのランクあり

ウォーキング決心した日雨になり  
缶ビールのアルミの粉まで飲んで惚け

岸和田市 藪野けい子

バラを買い寿司出前する父の日に  
ライバルの退職にほぼ調子ぬけ

おしゃべりに中ジョッキおかわり有り  
後ろすがた知人に似てゐるすれちがい

神戸市 山口 美穂

ボーナスのことなど遠い日の話

ミニトマト庭夏にする色をつけ

ゴミの日を鳥も猪も待っている

紙芝居見ながら食べた蕨餅

伊丹市 山崎 君子

チュンチュンと目覚しがわり今日は晴れ

あす開くつばみ数えて今日も暮れ

シヨウウインドー銀色の雨受ける傘

斜めから入る日射しは梅雨明けか

伊丹市 小熊 江美

ばら咲けばばらが好きだと移り気な

九死一生越した命の有難さ

相槌は良いが頼りにならぬ人

愛犬に死なれて涙もろくなる

宝塚市 嵯峨根 保子

この人の笑顔が好きでそばにいる

旅待ちの膝に思わぬ湿布やく

大切な話で仏壇にすわる

大切な息子を嫁に差上げた

川西市 氏林 洋敏

紫陽花を咲かせ雨垂れリズムカル

新緑の溢れる先に分譲地

季節ごとイメージをする空の色

褒めることあつて一日愉快なり

姫路市 古川 奮水

合掌の館煙に艶が出る

古里に木霊は消えて家並ぶ

請願書筆蹟も変え時期も変え

優勝へ近くて遠い千秋楽

大和郡山市 榑原 慧心

夕立に一杯だけが終電車

定年が鏡の中で近くなる

ぶらんこに大人乗るのは悩みごと

娘の記憶孫の仕草で甦る

和歌山市 山田 高夫

乗り継いで乗り継いで行く終の駅

情熱の冷めた夫婦のぬるいお茶

舞台裏覗くと湧いてくる疑心

底抜けの馬鹿と気付いた崖つぶち

和歌山市 宮口 克子

直球がダメならここは変化球

恋をしてからの親友疎ましい

忍耐の持続ですねと笑い合う

燃えかすが尾を引く今もずると

和歌山市 山口 三千子

目から鼻へ抜けるお方もミステーク

波風を躲し寡黙な貝になる

夕食の手を止めさせる虹の橋

連続テレビ最終回へ鳴る電話

海南市 三宅保州

ほんとうは水だけ欲しい喫茶店

流行を確かめに行く繁華街

過労死もあつて繁榮する会社

情念が女の櫛に引っかかる

鳥取市 武田帆雀

鮭の頭でチビリチビリとは好日

やる気挽回妻のやさしい瞳も久し

舟型の砥石で鎌に刃を付ける

物欲を捨ててひょうたんよく太る

鳥取市 前田一枝

念入りに書いた手紙が返される

逢つて来た匂い隠すも一思案

わけありのネクタイ妻の目が光る

われ鍋にぴったりのフタ見つかった

鳥取市 倉益一瑤

花ばさみわたしが羽化をする時間

感性の充電中だ夕涼み

いい人で心の風邪をひきやすい

漁火は暮しを背負う哀愁か

鳥取市 坂田和歌子

椅子八つ観音様の居る茶房

蓮かおり蛙くつろぐ小糠雨

無防備なお尻が並ぶ露天風呂

仏にも鬼にも見える美人なり

倉吉市 淡路ゆり子

置き去りの母が気がかり風の音

リズム良く朝を歩いたさわやかさ

距離おいて理想のタイプ値踏みする

もうひとつ泊れと孫のいい笑顔

倉吉市 野中御前

理想とは遠いお方と添うはめに

細いけど丈夫な紐を利用する

五十年夫のリズムに踊らされ

買いかえた眼鏡にリズム狂いだす

倉吉市 最上和枝

女医さんの笑顔に痛み楽になる

妻の乱きようは朝から声がない

暮れかけた余白に赤をたしてみる

童謡のリズムに乗って夕暮れる

倉吉市 山本玲子

自販機のエゴでビールが出てこない

陽を背なに咲く向日葵の痩せ我慢

リズム取るように六十路の下り坂

目立たない顔でもわたしには過ぎた顔

米子市 林瑞枝

伝統の熱い蕎麦湯を飲んで秋

おんな旅俄か添乗員となり燥ぐ

いざと言う時に利くライオンのたてがみ

本音建前ふたつ調合して生きる

米子市 茂理高代

払っても払い切れない吹き溜り  
炎天下心と体分離する

やさしさと違う気力が失せただけ  
これ位な事に疲れる目がにくい

米子市 木村春枝

流れから抜ければ僕も阿弥陀様  
迷いみち蛭に明かり借りにゆく  
何回目あきらめて出る試着室  
横綱の不惜身命波をうつ

鳥取県 津村八重子

仏心におとらぬ深い母性愛  
老いの顔カバーしますよ紅うすく  
鹿野音頭うたえば皆ういてくる  
肩の荷をおろした父のいい笑顔

鳥取県 乾喜与志

田植歌きかず田植を終りけり  
卯の花の歌なつかしく老いの部屋  
弱虫のんびり卒寿坂を登る  
去りぎわの梅雨大暴れしてからに

鳥取県 石谷美恵子

ひっそりと心豊かに師の住まい  
絶叫も思えば哀れ蟬しぐれ  
冗談がパンチとなって効いてくる  
弱虫の鎖はクシヤミでもきれる

鳥取県 西川和子

情報がさまざま自分見失う  
顔見れば湧いて出るのは愚痴ばかり  
さまざまを聞いてゼーんぶ忘れちゃい  
退院の母に安らぐ風呂が沸く

鳥取県 幸家單車

善悪は他人の方がよく見える  
情報が針の穴から洩れていた  
借金は棒引きにして嫁にする  
重い靴はいて浮世に遠く住む

出雲市 富田蘭水

壺いっぱい甘い水ためている  
甲子園砂が涙で光ってる  
おひざもと出雲も結婚難つづき  
腹ばいの砂が乳房をうずかせる

美祢市 安平次弘道

天に唾吐けば私の負けになる  
罪深い女がたどる花遍路  
不老不死そんな薬がありますか  
もう少し待てばよかった昼の月

香川県 永峰伽名子

森羅万象暗い響きが鳴り止まず  
幼児期に必罰必賞で子育てし  
七匹の子犬の戯れあきもせず  
似なくてもよいのに同じ病持ち

(小澤幸泉・永田俊子・岩切康子三氏の句は78ページに掲載してあります)



# 自選集

藤井明朗

人生の木蔭ばかりを選る不運  
ふれあいを大事に笑ってゆずり合い  
トマトの感触くちびるの赤さに似て  
句友と楽しむ日課のさくら土手  
ふる里の憩いにさくらの散歩道

西田柳宏子

得ばかりした姉ちやつかり先に逝き  
和太鼓に挑む若さの村興し  
熱湯好き一人占めする朝の風呂  
核持たぬ国の反対吠えるだけ  
耐え忍ぶ勇気を父の背に貰う

月原宵明

夢ばかり多く無色の過去ばかり  
姿見に映した帯は叩かれる  
胸襟を開いて酒を追加する  
思春期の足から初夏の風となる  
総会屋看板あげた店はない

正本水客

無駄なことくりかえしているとは思わない  
かたくなに沈む夕日を見ていたり

智子さんを想う

あわただし理事長の名を抱いたまま  
路郎を識る明かりが一つまた

野田素身郎

今朝の散歩便座でコース考える  
これも歳か活字を見れば眠くなる  
散歩コースに珈琲の安い店  
五月晴れ検診結果異状なし  
接待の酒に少しだけ漏らし

黒川紫香

活気出た町のうどながまた旨い  
神様がそばに居るからまた頼む  
九十の白髪を撫でるのは亡妻だ  
手の届くところへ来たな新世紀  
お互いが笑顔言うことない集い

小林由多香

うぬばれた鼻を花粉にねらわれる  
人前があるから許すとは言わぬ  
少子化の波に分校さらわれる  
軽い事故やっとお役所腰を上げ  
台風も梨が大好き挽ぎにくる

辻 白溪子

中腹に家建ち眺めをかえた山  
看護婦が思わず顔をそらす傷  
お布施より先に茶菓子に手をふれる  
夜警まず倉庫の鍵をたしかめる  
バイキング皿からはみだすのも混じり

八 木 千 代

沖からの手紙に波が打っている  
波音が絶えぬ浜辺の蟹の穴  
夏帽子浅瀬の波も侮るな  
波しぶき隣の塀を越えてくる  
一病の波とあやとりして暮らす

金 井 文 秋

老いたとてときめくものは持っている  
イエローカードちよいちよいと医者が出す  
咳したら気の付く人が飴をくれ  
余命表に消化出来ない贈り物  
うまく丸める上司はNOを言わせない

小 西 雄 々

他人の指に止まった蟬で傷をもつ  
疑心暗鬼の鉛筆にまた喝入れる  
さからえば川は逆流したくなる  
医療費の値上げに山は動じない  
豊かではない十円が笑顔もつ

野 村 太 茂 津

薬では癒えぬ世の中病んでいる  
死に神が外れたか死なぬものは死なぬ  
一手段ジュニア育てる陶冶の詩  
免許証捨ててジュニアにいたわられ  
空即是色水と墨とが助け合っ

遠 山 可 住

七夕の活気一日旧市街  
僕の行く道がいつでも混んでいる  
傘持って歩く女と道連れに  
針持てば九十の年を口にせず  
すやすやと寝ている妻にホッとする

松 川 杜 的

登りつめ考えている蝸牛  
八十路まだ君が代ぐらい歌えます  
野仏に一札をして遍路笠  
おやすみと仏に一言言うて寝る  
失樂園 沖のかめも知っていた

奥谷 弘朗

宮様のお言葉もらうみなと博  
はばたけや交流時代の幕開けだ  
我が県を世界に発信みなと博  
みなと博二十一世紀を開く夢  
開幕に感極まった知事の顔

藤村 女

風鈴の音に涼風のあるを知る  
この辻の風に荷を置く風鈴屋  
酒飲めて酔えば私も楽しかろ  
ほどほどのところでしめる酒もよし  
美しい台詞で鬼が呼びに来る

波多野 五楽庵

台風一過りんごに涙して歩く  
厨房に啖呵の好きな猫がいる  
不眠症月が益々冴えはじめ  
敗者復活私をひろう神がない  
赤トンボ雨情の音符かの如し

恒松 町紅

人脈がとことん誘う三次会  
過疎語る父に淋しい子煩悩  
似たもの夫婦空箱がまた溜まる  
猫に小判が壺の絵をほめている  
夢の続きへゆっくりに歩くことにする

高杉 鬼遊

低金利おおきな壺を一つ買い  
どうみてもきつねとたぬき人の道  
スカートがゆれて男が軽くなり  
しあわせの谷に狂わぬネックレス  
水のあるうちはしばらく生きられる

河内 天笑

五十肩なおった逆立ちをしよう  
飲みすぎたなあと西瓜に笑われる  
人がええだけでは機関車になれぬ  
また肥えたねエと無礼なご挨拶  
止まったらおしまい僕は回遊魚

橘 高薫風

浅草四万六千日  
三歳の浴衣も処女はおずき市  
隠れ家は日暮里鶯谷あたり  
誕生日マシマロ二つ掌に至福  
出陣へ男は鯨波の笛太鼓（弘前ねぶた）  
見返りにたましいの秋しのび寄る

田辺聖子先生の労作、『中央公論』に連載の  
『道頓堀の雨に別れて以来なり―水府泡幻―』  
が完結しました。長期間の御執筆に心からの  
御礼と祝意を表します。

橘高 薫風

川柳太平記

(232)

川柳の群像

## 岸田万彩郎

東野 大八

「：初め漫酒樓と号していたが、岸本水府

氏の奨めで万彩郎と改めた。私がうめだ番傘の世話をしている頃、本社同人に推薦した。

桜橋のサンケイビル隣の店の階上で「おはなしの会」を催すなど、柳界の中心に入ってきた。彼に導かれた実弟の喜志三、義弟の東照氏らが、彼と共に、うめだ番傘を経て番傘本社同人になった。

本社会計部長から幹事長へ就任後の万彩郎氏は、経営手腕を存分に発揮して、番傘の経営基盤を築き上げ、強固なものとした。

番傘六十五年記念行事には、川柳史映画の製作と、全国縦断川柳大会で全国八都市を巡回する大会を成功せしめて、その合理的な運営方法は、趣味の会の域を越え、名幹事長

と讃えられた。

幹事長退任後は、日本川柳協会の常任理事となり、行事の会場設営の役割を果たした。

晩年の労作は、類題別にまとめた句集『東照（昭57）の編集・刊行・頒布だと思ふ』（昭和59年7月号『番傘』磯野いさむ）

本名・岸田安之助。明治37年10月26日吹田市生れ。岸田精密株式会社社長。

「万彩郎の柳歴は十七、八歳の少年の頃から『番傘』同人であつた松川青影子・梶文葉とは、芦池小学校の同窓生で、『芦池会』

という会を作り、毎月の句会吟を横とじの句報として発行し、当時、芦池タイムス紙という校区の新聞の柳壇の選を、御大典の頃に青影子さんと交替で担当していたことを覚えて

いる。

万彩郎は川柳のほか、俳句・短歌を作り、カメラや音楽と多彩の人で、バイオリンは有名な先生の塾に入門していた関係で、NHKのラジオ「子供の時間」に童謡を演奏して、その出演料二十円の中から、私にスイス製の記念時計を買ってくれたやさしい兄でした。

戦後は川柳をこよなく愛し、番傘同人に推薦されて後、『うめだ番傘』『紅白川柳会』

のお世話を引き受け、特に幹事長就任以来、番傘のために私財を投じ、骨身を惜しまず活躍しましたことは、身内として番傘同人の一人としても感心させられました。

また、旅行好きも手強い、北海道から九州に至るまでの川柳大会に出席した関係で、柳友が非常に多くて、交友の広さは絶大。東京『みなと』『東番』はじめ、『きやり』『長屋連』『観光』『柳友』と各吟社の六月句会の席上等で、万彩郎の死去が紹介され、その哀悼の深さを知り、改めてその人となりを感じさせられました」（岸田喜志三悼文）

「思えば48年5月、番傘創立六十五周年記念大会がいわき市の平市民会館で、全国十回のトップを切って開催された東北大会は、映画川柳界初の『川柳史探訪』を封切して頂い

た。『川柳史探訪』は製作費何百万円もかけ、番傘ならでは、万彩郎幹事長ならではの力量を見せられ、大盛況裡に開幕できたのである。この大会で、私は記念スタンプを思いつき、いいアイデアと万彩郎さんは大喜びされた。万彩郎さんは車の運転に自信を持っておられ、奥様のお話では、三月の金沢の路也特集大会から自信を持たれ、体調よきまま、四国巡礼を思いたち、その自動車の旅を敢行された。しかし、徳島・高知を回って愛媛の松山近くで過労のため、力尽きてそのまま入院されました」（『番傘』加藤香風悼文・抄録）

万彩郎は昭和59年5月24日、吹田市の国立循環器センターで内臓疾患のため死去、81歳。筆者と万彩郎は、大陸川柳同窓会の第何回目かの出席で顔を合わせ、ばかにウマが合い、懇親会の席はいつも隣り合わせの仲だった。

「わたしは自動車マニアでしてな。車さえあればどこへでも行けます。昭和51年10月の北九州市の出口夢詩朗さん句碑建立式典は、楽しくもよろしおましたな。何さま大陸育ちの彼らしく、北九州市外の平尾台に十トンもある句碑に、持前の豪快な達筆の大文字。第一、その場所がよろしい。それから高知の大

陸同窓会へーおそらくこんな長距離運転は古来未曾有のことと思います。できつくくんば四国八十八ヶ所巡拝が終生の夢です。それまでかんばります」というのが筆者宛の沢山の書簡の中に残っている。この内の一書には、昭和51年10月末、懇願されるまま、美濃焼の多治見の窯元へ案内した折のこの札状がある。

自らロクロを回して悦に入り、

窓ガラス 雫は思案して流れ 万彩郎

の持ち句を大きな湯呑みに書いて、泥だらけの手で鼻先をなでたユーモラスな情景は今だに忘れられない。その同行者は、大陸川柳会代表で、筆者の川柳の育ての親、福井天弓のエビス顔も一枚加わり、この一行三人のロクロ回しの泥だらけの風景は、今も楽しく昨日のようである。懐かしき一景だった。

この年だったか、「番傘を守る会」の名で番傘始まって以来のお家騒動的一幕が勃発、ロクロのあとの一杯に存分にそのことを語りぬかれたのも万彩郎師匠晩年の語り草の一幕でもあった。

ともあれ、晩年の最大の念願であった四国

八十八ヶ所の車巡拝の動機は、この番傘騒動が一つの契機ともなったらしく、結局はそれがこの人の生命とりともなったわけだ。大陸同窓会参加は、都合、四回だったと思うが、そのたびごとに、ビールや酒を山のように持ち込まれた気前のよさには、われら世話人一同、終生忘れることができない。この人の温いお人柄には頭を下げて銘記している。

終りにこの本格川柳派の多作家だった岸田万彩郎作品を並べておこう。

編笠は目深がよろし佐渡おけさ  
神代から心許して飲める水  
就職と決った先の株のこと  
思案した拳男の手を借りる  
やりかたしごと名人めしを抜き  
理由なき理由勝負はすでにつき  
華やかな来し方いわけぬ流れ者  
十円の価値みとめあふ赤電話  
恋すれば異とせぬものに変化球  
つかう身のきびしさよその飯を食い  
どちらかがきつとどうかして夫婦  
その道のコツを傘寿に導かれ

▼次号は「小出 智子」

# 古川柳歳時記

9

## 『秋の虫』

清 博 美

秋は虫がすだく季節である。その鳴き声に物の哀れを感じることもあり、いたく騒々しいと思ふこともある。

鈴虫・松虫・蟋蟀・きりぎりす等が代表であるが、その呼称も地方によってかなり異なっていたらしい。『寐ぬ夜のすさび』に次のように記されている。「去年の夏〔文政五〕弥兵衛新田（足立郡川口の東北）なる牛込嘉文二が家にやどりて、茶話の中、いろいろの虫のはなしにおよぶに、わが郷にていふ所と、かの里にてよぶ所と異なるあり、これも一興なれば、こゝに書おく、吾郷にてとかげとよぶ、守宮に似て背に堅き青き筋ある虫をかの郷にてかがみつてうといふ、とかげと呼ぶは、吾郷にていふ毒虫、青とかげの事なり、蟋蟀を吾郷にてかがみつてうといふ、

かの里にてはかまきり、又はら立源兵衛といふ、蟋蟀をわが郷にて井戸ほり虫といふ、かの郷にてはねこがへる、又はすくもむしといふ、予又、松むし、鈴むしを問ふに、ちり／＼と鳴くをす／＼むしといふ、吾郷に鈴むしと呼ぶりん／＼となくむしは、此わたりにその如くになく虫なければならず、といへり、かの郷にて松むしとよぶものは、蜚に似て少し小さく、色青く細くして、じい／＼となくをいふ、といへり、妻の旧家中丸わたりにて、とかげ、かがみつてう、ねこがへる、みなかの郷によぶとおなじとぞ、江戸はおしなべてわが郷のよぶ所とおなじ、○ちり／＼となくは鈴むし、りん／＼となくは松むしなる事、諸書に論ずる所なり。また、古くは、蟋蟀をきりぎりすと称んでいた。「ギリ／＼

スは万葉集にみえたり、今俗コホロギといふ、即万葉集に、いはゆる蟋蟀の二字を用ひ、古今和歌集以下、多く葦字を用ゆるものはなり」（『古今要覧稿』）とある。また鈴虫と松虫も時代によって呼称が逆になっている。古文を読む場合、この蟋蟀ときりぎりす、鈴虫と松虫には、注意しなければならぬ。

### ○鈴虫

コオロギ科の昆虫で体長約二〇ミリ、全体が暗褐色。雄が「リン、リン」と澄んだ美しい声でなき、古くから珍重されてきた。

御り縁の跡すすむしのなく斗 一一 20

すず虫ハ御寝間淋しく夜をふかし二三 31

大名などのお寝間。静まりかえつたなかで、気品のある鈴虫の鳴き声。

### ○蟋蟀

人にもつとも身近なのが蟋蟀であろう。えんまこおろぎは「コロコロ」と鳴き、つづれさせやみつかこおろぎは「リリリリ」と鳴く。作物の芽をかじるなど、有害な昆虫でもある。古くきりぎりすと混同されていたことは既に記したとおりである。

かうろぎて女房昼寝の目を覚し 五四 5

こうろぎと一所に女房すだくなり

天五宮2

—蟋蟀の鳴き声で、日の傾いたことを知る。

だゞにこまつてこうろぎをかこへ入れ

安五松2

—蟋蟀は虫籠に入れるほどの虫ではない。

虫の内でもかうろぎはくめんもの

天七・八・15

—わざわざ買つてまで飼うことはない虫である。

懷口でこうろぎの啼く古案山子 一三六二

—取り残された案山子に住みついて。

こふろぎの閑居仁王の土ふます 一四六八

—こちらは仁王像の土踏ますに住みつく。

○きりぎりす

キリギリス科の昆虫で、ばったの類に似ている。「チョンギース」の鳴き声は、他の虫に比べると、音色の面で劣るが、素朴な感じは捨てがたい。

おもさしハ馬に似てゐるきり／＼す 六三六  
きり／＼す立ひさをして腹ん這イ 七四二三

—言われてみれば成程。

きり／＼す草をわかつてせんぎされ

明三礼4

おさへればすすきはなせばきりきりす

—掴えたと思つたが。 五二四

柴の戸の畳の上をきり／＼す 宝十一満1

—草庵の畳の上に。

○轡虫

キリギリス科の昆虫で、雄は茶褐色、雌は緑色。鳴き声が馬を御するに使う轡に似ているところから、この名がある。「ガチャガチャ」と鳴く声は大きくて騒がしい。

くつわ虫寝しなに一ツゆすぶられ 四二

—鳴き声を止める。

夜ル／＼くつわ虫なく古せんじやう

天五仁2

秋風に声もさびしくくつわむし

—右二句は、いずれも馬具の轡の利かせ。 八二一六

○茶立虫

長さ二ないし八ミリ、茶立虫科などの昆虫の総称。外観は黒褐色でありまきに似ている。障子などにとまつて大體で紙を掻くことがあり、その音が茶を立てる音に似ているので名づけられた。

句は後期の狂句ばかりで、面白くないが二

句だけ紹介しよう。

小夜更て利休が暮に茶立虫

秋の夜数寄屋の壁に茶立虫

—右二句とも茶の湯にかける。

一四六三二

九三二三

さて、江戸にかぎらず、京・大阪の大都会でも、今のようにならぬ密化していなかたから、これら秋の虫は簡単に捉えられたように思われるが、すでに「虫売り」という商売が存在していたのである。『守貞漫稿』には、

次のように記されている。「蛩を第一とし蟋蟀松虫鈴虫轡虫玉虫蛸等声を賞する者を売る。虫籠の製京坂鮎也。江戸精製扇形船形等種々の籠を用ふ。蓋虫うりは専ら屋台を路傍に居て売也。巡り売ことを稀とす。秋季には当季の商人冬の加く多からず」。

虫売ハ一荷に秋の野をかつぎ

武蔵野へ虫売の来る繁昌さ

むしうりのむなしくかへるにきやかさ

安八梅2

—街中が賑やかで相手にされない。

虫うりのむこつたらしいらうずが出二一〇

—らうずは損じ物、売れ残りの意。足

が取れたり、羽根がむしれたり、す

でに動かなくなっていたり、やはり

酷いという印象をうける。

# 秀句鑑賞

同人吟 玉置 重人

— 8月号から

鉛筆と紙を持てば皆平等で、変な權威主義

みたいなものがなく、句会では新しい人が何句も抜けて、古い人が全ボツの憂き目に会うこともある。抜けたからどう、ボツだからどうということはないが、川柳の楽しい所以でもある。

型から入り型から出て行くのが習いことの極意で、川柳も例外でないとい聞いたことがあるが、見よう見真似で川柳を始めてから随分と長い時が過ぎた。一人歩きの私は柳誌で出合う皆さんの句を読むことと、折々に出席する句会が、何よりの修練の場だが中々作句が思うにまかせない。

マンネリに机の配置替えてみる

の句のように毎日が四苦八苦だけれど、何とか川柳の打出の小槌みたいなものがないものかとムシのいいことを考えている。

約三年ぶりに秀句鑑賞のカードが回ってきた。書くことの苦手な私には大変な重荷だが、編集部のご苦勞を思うとそんなこともいつておれず、勉強させて戴きました。

仲のよい同居つばめは知つて来る

越智 一水

昔は街なかの家でも、つばめが毎年やってきて、巢作りをしたのをよく見かけたものだが、最近はそのめつつきりと減ってきた。

先日、奈良郊外の家族でやっている小さな食堂へ入った。嫁姑孫と賑やかで和やかな空気のなか、店の中に巢作りをしたつばめと放し飼いの文鳥が飛びかう、微笑ましい情景を見てきたが、それと同じような句に出合つて嬉しくなった。

五風十雨孫十二人曾孫九

田口 虹汀

千数百の投句の中で、ただ一句の漢字づくしの句に出合つたが、その巧みさに感じ入りました。五風十雨と軽く流しておられるけれど、現在の平穩な境遇を得られるまでには、並々ならぬドラマがあったことと思います。

それにしても、十二人の孫と九人の曾孫とは羨ましい限りで、この句の底流に家族の絆の堅さをひしひしと感じます。

ふつ切れてからは雑音だと思ふ

宮尾 みのり

人間生きてゆく上では、いろいろな人に教えられたり諭されたりの場合が多くあるが、あちら立てればこちらが立たず、の式に出合つたりして、結局は自分で決断しなければならぬのである。

ふつ切れるまでのいろいろな葛藤が雑音の中によく表われている。

ばんざいの形で軍手干してある

大橋 政良

この軍手はきつと真面目ひとすじ、裏も表もない本音の暮らして、愛する家族を支えているのです。一生懸命働いた軍手を奥さんにもまた心をこめて洗つて、主人に熱いエールを送るのです。

ばんざいの形とは面白い表現で、感じ入りました。

とくとくと喜ぶ水と田に還入る

蒔苗 果林

農作業の経験がない私だが、この句を見て農業に携わる方の、田圃を愛し米作りにいそしむ真摯な姿に身が引き締まった。それに比べて自分の職場勤めの頃はどうかだったか、ふり返つて恥ずかしい限りである。折柄丹精の苗もすくすくと伸びて風もこちよ。



話わかる男にさせているお金

西出 楓 楽

地獄の沙汰も金次第で肝心な時に肝心なものが無ければ、どうにもならない時だから、金が仇の世の中を思い知らされるのである。かくて男たるもの、事ある毎に話の判る男たらんとヤリクリに四苦八苦、ボーナスをへそ繰ったり、ツケのきく店を探したりといろいろと忙しいのである。

お互いに生きようといひ別れけり

田中 正 坊

毎年集まる戦友会も、お互いに喜寿近くなると、回を重ねる度に人数が減ってくる。淋しい限りだが、やむを得ない宿命で話題も孫のこと、体調のこと等元氣のないこと夥しい。カラオケで憂さを晴らして、いざ散会ともなるとこの句のようになるのである。ついこの間の戦友会をまざまざと思い出した。

捨てんならんものが仰山ある夫婦

古川 喜美子

世帯も古くなると、いらんもんがどんどんふえてくる。我が家も多聞にもれず、捨ててに捨てられぬガラクタが随分と溜まったがこの句を見ると、そんなガラクタもさることながら、その他に夫婦として捨てねばならぬものが沢山あることを教えられた。

交通麻痺 高速料を返さない

江口 度

これは又現代世相を切る痛烈な皮肉であるが、現実の姿であるだけに笑ってはいられない。忙しい仕事に携わっている人には、高速料ぐらいでは追いつかないが、当事者たる公団は、麻痺だろうが渋滞だろうが、どこ吹く風でドライバのいらいらは募るばかりで事故の原因ともなりかねない。

脱稿の辺りにすこし火の匂い

高田 美代子

原稿をやっと書き終えた時、なんとか投句の終った時など、安堵感と共に軽い昂ぶりを覚えるものだが、この句その辺りの心理を見事に衝いているのではなからうか。特に下五の火の匂いに、作者の想いが凝縮されているように感じられる。

家政婦と間違えている節がある

牧 淵 富喜子

きりがあつてきりのないのが主婦の仕事で、炊事、洗濯、掃除と次から次へとめまぐるしいが、家政婦なんてとんでもない。家族はみんなあなたに頼りきつています。作者も又そんなことは百も承知で、嘆いているフリをしているのである。下五にそれがよく表われていてユーモラスな句になった。

お天気の話をしめとはじまらぬ

三宅 保 州

日本人ほど氣候のことを口にする人種は他にいるのだろうか。天候に影響されやすい農耕民族の性で、いつも天気を気にしていた習慣が尾を引いていると聞いたような気がするが定かではない。なんでもない句材を軽く仕立て上げた手腕に脱帽。

大きな大きな貴男のシャツを着て眠る

小谷 美ツ千

大きな大きなと重ね言葉で強調するぐらいだから、いかに頼り甲斐のある人か、容易に想像出来て正に幸せ度満点である。男性たるもの、ここまで頼られるとますます頑張らざるを得ない。

とうちゃんをかもめが呼びに来て困る

鷺見 正 子

かもめとは面白い見付けである。どんなかもめか、発想がいろいろとひろがって楽しいが、熟読すると作者もこのかもめに好意を持っているように窺えるのが救いである。

以上で秀句鑑賞を終りますが、よい勉強になりました。作者の意にそぐわない鑑賞文になった点もあったかと思いますが、よろしくご容赦の程をお願い申し上げます。皆様のご健吟をお祈り致します。



西田柳宏子選

尼崎市 田辺鹿太

唐津市 宗弘

結願のその日に鯛の首を刎ね  
悪がきの昔を知っている恩師  
ひとときの至福本屋で本を選ぶ  
耳輪した男に会ってから微熱  
長生きに説明なんか要るものか

富田林市 藤田泰子

同じでも鮎の顔したお雑魚です  
孫よりもこどもと思う時がある  
梅雨晴間 銀行あたりの黒い雲  
揺り籠のような波なら身を任す  
自分でも妻に似て来たなと思う

今治市 渡辺南奉

安いものでいいすぐ伸びるすぐ太る  
十四歳表と裏にある落差  
先生も親も目線が高すぎる  
線引いてよい子悪い子普通の子  
声変わり鍵の向こうが不透明

北斎の波の中よりサーフィン  
浜風に曲って松は愛される  
わがままな爺で茶の間の笑い声  
一病を騙し六十路の野良の汗  
母と子のかすがいだったあの涙

八尾市 山本宏

ゆずること知ってひっそり暮して  
やる気出た明日の運勢吉と出た  
親しげに話をするが名が出ない  
敵味方わからぬ女の立ち話  
カンピールだけではすまぬ好い便り

横浜市 後藤早智

足腰の弱さ見られてからの運  
型通り女の一生歩んでる  
近づけば隣の芝生も枯れている  
母体とは悲しや骨も歯も溶ける  
連休も夫息子の靴揃え

富田林市 大橋 鐘 造

警策に息の乱れを諭される

本命を狙って胎をまいている

塾靴子供が走る冬の街

なみなみとグラスに嘘を注いでいる

踏み込んだ話を軽く聞き流す

豊中市 石川 勝

むつかしい一日だった陽は沈む

眠れない夜の時計は憎まれる

紙一重だったとうまい賞めことば

男の背わびしきコインランドリー

すこし阿呆でよい友達がようけいる

大阪市 一本 勇 太

恋ひとつ拾った水着干してある

終着駅へつくまで父の五つ珠

地獄絵の記憶が戻る夏の雲

巻き戻し飽きず雑兵ものがたり

未練まだ穂先にのこる筆洗う

今治市 塩路 よしみ

根回しが効いたか首がついている

じわじわと家風をかえる嫁と住み

多弁と無口釣り合いとれて共白髪

ハイハイと言えば平和なやまの神

ひとり打つ碁石淋しい音がする

今治市 村上 久美子

雲流る旅立つ人を急きたてて（小出智子先生を偲び）

何処もかも削りいびつになる地球

指切りの指がころりとももの忘れ

鏡見るたびに白髪が伸びている

堀越えて隣のバラが咲いて見せ

東大阪市 北村 賢子

嫁ぐ娘よお前の部屋はそのままに

妻の留守ルンルン鼻歌わく夫

絶望の隣にきつとある希望

ねんねこにその子その子のぬくもりが

赤トンボ羽根をやすめる水溜まり

米子市 大野 蒼 流

過去を消す消しゴムがない日記帳

ランドセルもう偏差値が待っている

汗知らぬ手では掴めぬ青い鳥

田周を歩き疲れた日記帳

漁場涸れた海に民謡帰らない

八尾市 村上 ミツ子

半分は雀が食べるパンを買う

母見舞う精いっぱい演技して

蟬の声聞かないうちにくきた猛暑

ひややつこ手抜き料理と言わないで

帰るところあつてゆつくり飲んでます

羽曳野市 西村りつえ

祭り笛若さで捨てた故里が呼ぶ  
風動き群れてた雑魚が走り出す  
悪乗りした軽い話に怪我をする  
企みがすけ透けだった夏帽子  
父母逝って近い故里遠くなり

尼崎市 森安夢之助

蜂の巣をつつきとぼけている男  
老妻と手繋いで越す水溜り  
これからが私の時間昼寝する  
ひび割れた壺から嘘が垂れている  
裏町が好きで帰って来たツバメ

横浜市 明渡トヨ子

恵まれたおまけの余生感謝する  
長旅の時差呆け元に戻らない  
弱い者いじめて遊ぶ恐ろしさ  
良く学びよく遊べない塾通い  
即答はさけて急場を切り抜ける

富田林市 中井アキ

欲望の電車が走る都市砂漠  
波のりが上手になった母の舟  
愛の鞭節目ふしめを太くする  
こどもにも言い分のある設計図  
私の季節が移る梅雨のあけ

高槻市 乙倉武史

天地変 他人事とは思われず  
社会悪 末恐ろしい子の育ち  
若者よ大志を抱け野茂 伊良部  
人生のゲームは厳し山や坂  
台所の死角ゴキブリ夜を待つ

高槻市 小林一閑

緑消す会を次々招致する  
終章を飾る一句はまだはやい  
川柳のためのパソコン独習中  
百年河清 日本にそんな暇はない  
真っ直ぐに子供の育つ国になれ

尼崎市 的場十四郎

留守なのか隣の猫がきてじやれる  
年金の肩は軽くて妻まかせ  
風の音消えるとすぐに母がくる  
肩書をすてた男の軽い腰  
花時計男はいつも待たされる

堺市 上野楽生

おまわりさんにこにこと待つレッカー車  
建築の現場でひとり女性技師  
新風を吹き込み壁に阻まれる  
復讐の鬼みぞおちに住んでいる  
血圧計今日は休めと合図する

和歌山市 森 口 美 羽

黙ってる私が私らしくない  
何もかも覚めた私の影法師  
つかい棒の軋みを聞いている私  
深呼吸して息切れに耐えている  
以下余白私ひとりが浮いてくる

鳥取市 福 永 ひかり

起きなくちやならぬ時間に眠くなる  
心配の種は呆けぬと言う夫  
賞味期限一日過ぎた マイイカ  
健康にいいと分かればそればかり  
貧しさをやつと話せるようになる

大阪府 小 泉 久 子

よろこびを知らせる声が弾んでる  
ひまわりの下で可憐につめきり草  
雨続く亡夫の靴を磨いてる  
マネキンが着て良かったと買ってくる  
遠花火独りぼっちで聞いている

鳥取県 山 内 芳 江

飼いだにまさか咬まれたとも言えず  
実を結ぶ花芽だそつと見守ろう  
まんまるい月で相談したくなる  
半分の幸を家族で分か合う  
苦の種になるとは知らぬ甘やかし

和泉市 横 山 捷 也

早退の真昼の暑さまぶしすぎ  
病む夫に明るすぎてる妻の顔  
血圧が上がらぬ程度意見する  
灯が点いた家に安堵の共稼ぎ  
仕方なく勝気な女で生きている

横浜府 長 島 亜希子

旅先も婦唱夫随で日和良し  
信仰はないがいちおう手を合わせ  
健診で年齢は年齢だと知らされる  
医学書を読んで病気にさせられる  
惚けさせぬよう悪妻を演じてる

八尾市 村 上 剛 治

目の届くところばかり光ってる  
栄進へ一度靴ひもしめなおす  
絶好調明日の晴れを疑わぬ  
愛情の手抜きに慣れて子が荒れる  
汗かいた貸農園の茄子の味

今治市 野 村 清 美

トンネルを抜けるとホッと息をつぐ  
日焼けした子の白い歯がたのもしい  
母乳たつぷり何の不足もない寝顔  
夏バテを防ぐ去年の梅酒のむ  
角立てて何がいたい蝸牛

河内長野市 大西文次

夫しか解らぬ妻の書いたメモ  
方便の嘘に思わぬ付けが来る

消火器も焼けてしまった火事騒ぎ  
ローン未だ終わらないのに雨が漏る

河内長野市 妹背 尽呂久

火の車急に激しいコマージュル

株好きが儲けた話ばかりする

鈴付けてひとり歩きを紛らわす

賢夫人どうし互いにいがみ合い

河内長野市 印藤 智子

夏帽子買って五つは若返る

いぶし銀のような老女になるつもり

百歳に励まし受けた嬉しい日

隅っこに一人で座る喫茶店

松江市 山根 邦代

遠足のなつかしさ詰め旅仕度

瀬戸内の大蛇のような橋渡る

旅二日雨 雨の桂浜

旅かばん楽しさ一杯詰め帰る

出雲市 岡 あきら

爽やかさ貰う会釈にすれ違ふ

雑草の生きる力にあこがれる

促され義理で唱える南無阿弥陀

経終わる頃にピタリと仕出し屋さん

鳥取県 藤山 弘子

蟬とりをする子がいな過ぎ疎の村

あぶら蟬暑さのパワーを上げている

過疎でいい蟬と暮すときめている

スパイスがききすぎたのか枯れました

富田林市 山原 昭水

歩くのが一番よいと医者という

再会は昔のままのジャズ喫茶

善悪ものんで梅田の人の波

酔ってくると大法螺を吹く癖がある

和歌山県 吉村 さち子

一人居は誰はばからず好きかって

押売りに睨みをきかす亡夫の靴

四畳半わたし一人の逃げ場あり

生きているから明日の事も考える

和歌山県 杉山 精子

四十路坂どんどん過去を脱ぎ捨てる

精いっぱい今日を生きてる赤い靴

サングラスかけると歩幅広くなる

走りだす自作自演の絵の中で

秋田県 湊 修水

はずまない心むなしい風が抜け

客来りひとまず延ばす休肝日

正月と盆にだけ来て過疎を褒め

過疎に住み蟬の斧振っている

横浜市 伊藤ふみ

二人だけの凸凹道はまだ続く  
カサブランカ凸凹道を飾り咲く  
青空に綿雲一つ閑居する  
炎天へ不平も言わずバラは咲く

横浜市 保田絹子

産声に固い唇綻んで  
産声に暫時無言で父の顔  
添え乳にいつか安らぐ母子像  
老兵の出番お七夜宮参り

兵庫県 倉垣恵美

路の臺座右の書にして幾とせぞ  
惜しい句と評価されたを励みにす  
路の臺両手で捧げつつ黙す  
急告の真実嘘であつてほし

伊丹市 延寿庵野鶴

蝶の羽化不思議な力内に秘め  
紫陽花寺お喋り弾む女傘  
無我の境座禅の脚に汗にじむ  
手の内はただ一字だけ勝つと書く

大阪市 中井正秀

ボランティアしてから増えた年賀状  
素うどんの薄いカマボコあとで食べ  
雑草が抜かんといてと花咲かす  
ここだけの話というて播き散らす

兵庫県 北川とみ子

敵となり味方となつて言うお世辞  
ほめ言葉ときどき友は鬼になる  
ふつくらと紙はみ出した母の顔  
まだ弱音吐けぬ赴任の子に便り

鳴門市 八木芳水

きれい事でした一本樹を植える  
放心のかたちで過去の火が蘇る  
自画像は玉虫色で描いておく  
ワイングラスに沈める青いさくらんぼ

兵庫県 西川一繁

止められた医者に内緒の盗み酒  
吾が妻にいたわる言葉出てこない  
散髪代聞いて見直す子の頭  
朝飯を抜いても化粧して出かけ

東大阪市 今岡貞人

メモ帳を繰返し読む長寿です  
溺れても藻に頼らぬ意地がある  
花束の一つが抱いている野心  
幾山河越えて日の丸美しい

八尾市 平川幸枝

角の立つ白い豆腐に自負がある  
心配のいじめられっ子卒業す  
古帽子顔に馴染んで夏の旅  
通夜の席未亡人より泣く女

豊作へ蟬を鳴かせる天の知恵  
高知市 細木子龍

長糸が男世帯を持て余し  
左遷でも栄転なみの一等車  
海戦の昔を貝に五十年

羽曳野市 三好専平

住民の力が地球浄化する

超法規ではすまされぬ国家テロ

猿芝居うまい役者が揃い過ぎ

お返しは商品券がありがたい

羽曳野市 川田晋

褒められて素直にミスと言いそびれ

買うときは胸のふくらむ宝くじ

にこやかに棘を含んでいる同居

聞き飽きた愚痴に相槌うたされる

寝屋川市 井上すみれ

嗚呼智子先生 人の優しさ知りました

クール宅急便大事にされたサクランボ

一しきりお聞きしてから出る西瓜

裏切ったメモが私を眠らせず

米子市 池尾保子

青い目も交えて今日はボランテニア

父と子の約束がある遠い道

遠い記憶いつも添い寝のお母さん

薬草の匂いの中で生きている

伸び過ぎる記念樹切るは多数決  
米子市 小塩智加恵

高知まで日帰り旅が出来ました

子供部屋無かった昔絆あり

腹の虫お帰りのさいかみ殺す

横浜市 田中笑子

若いねと言われ姿勢をチェックする

広すぎる会場の隅混んでいる

ダイエットしてストレスを食べている

へぼ将棋理屈で駒が動かされ

神戸市 船津とみ子

糸切り歯失うた日の夢を見る

着る服を選ぶひとときの青春

日に幾度水飲むありがたい時よ

冷房を止めてお経をあげている

大阪府 尾崎黄紅

言うことなし煮ても焼いても諸が好き

野良犬と睨めっこして詩をもらう

古帽子頭脳明晰だった頃

温故知新老いの意見も聴き給え

鳥取県 原みさを

八月が遠い昭和にまださせぬ

家系図の隅に私を書き入れる

正論が居眠りしてる隅の椅子

農捨てて爪がとってもよくのびる



高知県 百田 幸

ゆるやかな坂を安心して上る  
亡母の歳越したが亡父へまだ二年  
スニーカー履けばサッサと足が出る  
誘われて二つ返事で乗る夫

大阪市 榎本 日出子

灰皿を持ってどこまで行くのかな  
美味しいとほめられるのは冷や奴  
よく動き元気な友が先に逝く  
手巻ずしカイワレも入れ食べてみる

岸和田市 亀井 皎月

老残と言えるかどうかの歳かぞえ  
ここまではうかうか来たがまだ死ぬ  
残り火を燃やして今日も畑に出る  
店名をカナ文字にして流行りだし

福岡県 本田 忠男

蒲鉾をむしりつつ呑む酒の味  
狭心症医者に一合許される  
手の中に鍬打つこつが生きている  
夏涼し三連水車の回る音

綾部市 藤田 芳郎

足して二で割った余りが治まらぬ  
許せるも夫婦赦せぬのも夫婦  
句読点打ち損なつたのは血筋  
一枚岩のひびに差し込む札の束

尼崎市 河津 正治

マネキンと同じ服着て風に乗る  
ハードルが高くて越せぬ日の焦り  
平均寿命越えて世間にうとくいる  
二度と来ぬ今日一日を振り返り

泉佐野市 稲葉 洋

同じ事考えてるな時計見る  
凝り性でホップの風味固執する  
出入口どの鍵穴も癖がある  
始めから逃げ仕度して記者の前

鳥取市 岸本 宏章

真っ直ぐな胡瓜が奇形かもしれぬ  
再生紙ごみのエリートだと思ふ  
鬼の面さみしがり屋が付けている  
嘘をつく口へ封印しておこう

鳥取市 福田 登美

定年後妻が翔んでるように見え  
塞ぎ込む心潤す友がいる  
噛み合わぬ話に慣れた差し向かい  
悪友の小気味よい風受けて立つ

愛媛県 中居 善信

蜜なめてからは落ち目となってくる  
投票へ白紙を出しに行ってきた  
金運は吉とみくじに書いてある  
街灯が寂しく村が寝静まる

西宮市 古谷ひろ子

揉めごとは母があずかる昼ごはん  
老母に荷をひとつ負わせる親孝行  
すらすらと恋文書かすペン習字

パーマ屋で子育てのコツ聞いている

兵庫県 谷田多美子

流汗淋漓今日一日を農に生く

朝ドラが終って掃除機動き出す

妻の愚痴いつ止まるやら梅雨の空

温泉へバスを連ねた農閑期

高知市 桑名知華子

母だから子だから辛を祈りあい

気負わない旅で土産にしゃもじ買う

やれやれと弥次喜多の旅靴を脱ぐ

子育ては母の生命のある限り

今治市 中村好恵

散髪は妻の鋏で足りている

思ひ出を簞笥に詰めて捨てられぬ

スイッチポンで減った妻への有難味

掃除機へだんだん部屋が丸くなる

鳥取市 山本益子

蟬取りの子らも脅えるタンク山

詰め将棋脳細胞が迷い出す

もしかして台風の目は私かも

うるさいが子供の声は宝です

松江市 川本 畔

お通じが良い麦飯のせいだろう

水と夏の植木がかしましい

風船が欲しがっている青い空

いたずらに齡はとらない姑のしわ

八王子市 井上京一郎

立ち合いを逃げた白星叱られる

触診が消えて検査が増えてゆく

チャンネルにアニメが増えて子らの夏

無機物の顔でバーテン聴いている

鳥取市 藤 ふうこ

自分史に紅おしろいを塗ってみる

不幸から抜けられぬ娘が爪を噛む

培った夢よ出発年だ

裏切りをはっきり知った夜の深さ

米子市 足立由美子

いつのまにか彼女の波に乗っている

どしゃ降りの窓が太陽恋しがり

年ごとに父によく似てきた背中

胸の奥赤い蛍が灯をともす

和歌山市 木村初子

一期一会有情無情を見て生きる

七坂を越えて残り火抱えている

コーヒーもお茶もおいしい青葉風

働いてはたらし過ぎた丸い背な

横浜市 鈴 江 純 子

東京都 清 原 悦 子

近くまで来たと云っては孫に会う  
旅をする国の言葉を一夜漬  
娘の家が近くてわたし忙しい  
同病が診断しあう待ち時間

鳥取県 橋 谷 静 江

気晴らしにピアスをつけてシヨッピング  
孫の守り今じゃ通訳うまくなり  
ご近所に嫁ぐ娘なのに涙が出  
息抜きは好きな音楽きいてます

丁度良い話の出来る月の夜  
筒ぬけの声で内証は出来ぬ夫  
纏れてる糸を我慢で接ぎ合わず  
また少し話がしたく墓参り

和歌山県 木 村 親 路

路地裏に杓子定規は見当たらず  
相槌を打って泥水かぶる羽目  
恐いほど親の仕草を子は見とる  
追伸へ比重のかかる母の文

職業欄僕は無職で妻は主婦  
バーゲンへ急ぐ主婦らの目の座り  
内緒だが薬をやめて全快す  
全力で支えてくれる妻がいる

高槻市 江 原 秀 夫

泥舟に男盛りがだまされる  
親の見栄塾が重荷になっていく  
時と場合忘れることも処世術  
寄り添って登りつめたい夫婦坂

二つ三つわからぬままに五十年  
行きずりに声掛けられる顔となる  
隣から張り出してくるエルニーニョ  
饒舌が巧みに包み込む本音

島根県 梶 谷 仲 子

ジャンケンが強い何かの役に立つ  
治す気があるかと酒を叱られる  
つまらない物をあげたり貰ったり  
富士山がすっぽり入る水たまり

年金で暮せる今日の空の色  
七十路ピンク色着てはめられる  
雨上りしっとり濡れて花笑う  
モーニングサービスとしゃれ夫の留守

和歌山県 藤 井 春 子

本物の笑いへ安堵する家族  
あたたか味手作りにある母の愛  
肩書きに甘え時々ミスをする  
飢餓の児の夢はデッサン握り飯

兵庫県 円 増 純 子

独り居へ明かりを灯すボランティア  
屑入れに今日のドラマが捨ててある  
新しい命育む草を焼き  
草に臥し故郷の匂い思い出す

三重県 佐々木 森 哉

緑陰で過去の苦労を慰める  
苦労した十指と語る仕舞い風呂  
しあわせ芝居私に過ぎた妻がいて  
前向き思考私に明日の陽が昇る

倉敷市 家 守 政 子

振り向けば妻を敵にしわれ孤独  
パツとしない暑中見舞が梅雨最中  
土石流暗いニュースに箸をおく  
金婚へ我慢くらべの今日も昏れ

尼崎市 内 田 美也子

亡夫の字に触れたく開ける古靴  
亡夫の部屋ゴルフバッグが主を待つ  
孤独さも少し明るい色となり  
今日の日を夕日とともに閉めくくり

海南市 谷 口 義 男

言いたいと言えど嵐が待つて居る  
手の鳴る方へ素直に向く気などしない  
逆風に耐えて来たから逞しい  
定年を機会に妻の部下になる

八王子市 播 本 充 子

長生きの秘訣と都合良く忘れ  
オレはオレ真っ直ぐ歩く蟹になる  
ゴミの日をカラスの声に教えられ  
誰にでもいい顔をして嫌われる

大阪府 奥 野 義 夫

新聞にかすかな温み霜の朝  
お隣のマナーを真似てフルコース  
相合傘濡れてる肩が惚れている  
佗しさよ終身保険掛けてゆく

八尾市 田 中 トシエ

朝露を踏んで散歩の老夫婦  
娘の赤いサンダルはいて若がえる  
ふりあげた拳とどかぬ子の背丈  
半日をつぶす日課の医者通い

日立市 加 藤 権 悟

ヒロシマのケロイド子等に伝えねば  
昭和史を綴ると疼く日章旗  
雄兵の意地は拳の中で燃え  
平凡な米研ぐ妻の音が澄み

松江市 佐野木 み え

青梅が煮えてのどかな夏至のころ  
ミニトマト作り食卓飾る夢  
いい事は暫く胸で温める  
くちなしが咲いて兄の忌巡りくる

梅雨晴れに螢一匹自由なり

伊丹市 榎谷郁子

新聞のでかい活字が威嚇する

王朝の名前纏った花菖蒲

池田市 木村一笛

駿河屋の羊かん薄くお茶にする

村祭りおかめひよつとこ浮かれ出す

厚化粧女房まだまだ元氣者

堺市 梶本哲平

旅帰るまずありったけ窓開ける

他社よりも怖い隣の課の数字

喚問という手で蜜を吸いに来る

東大阪市 松山隆

ローカル線みどりゴトゴト弾けそつ

訴えるあとの涙は信じよう

反対も賛成もなく腕時計

大阪府 澤田和重

妻の勤たしかで怖い時がある

バーゲンで買ったと見栄が言わさない

歯を磨く今日も笑顔でいたいから

和歌山市 山根めぐみ

汗だくの日本を抱いている地球

受容れてわかる解ると言うただけ

下積みの汗にどんだん芽が育つ

真夏日は続く微熱の日は続く

人生に楽勝などあるはずがない

七人の敵の一人かこの女

愛媛県 安野案山子

幸せの定義の中に僕が居た

飛び立ってそれと気付いた青い鳥

道草がずらつと並ぶパチンコ屋

島根県 福岡博利

書道会お酒が付くとみな揃い

三歳が大声出して自己主張

玄関の一等席につばくろめ

高槻市 傍島克治

お前から誘ったからと払わされ

お隣に聞いて減らした祝金

会釈して互いに小首かしげてる

高槻市 執行稲子

ひそひそに耳ふさいでる辻地蔵

姑の城自己主張して杭を打ち

追伸に思いのたけを少し足す

兵庫県 森脇和子

ひとりには一人の悩み神頼み

婆ちゃんが張切りすぎるに皆黙る

順調な快方ですと食進む

人間の勝手きままにつくる街  
松江市 松浦登志子

同居してないから言えるほめ言葉  
普段着が似あう女とほめちぎる

松江市 安食友子

不一致が三文判で事終わる

青い梅から出されてた挑戦状

天よ地よSOSが聞こえぬか

河内長野市 水谷笙子

賞味期限過ぎて味よい人になる

もやしっ子大黒柱程遠い

男の子言い訳するなと育てられ

羽曳野市 安芸田泰子

不器用な愛だから直ぐ怒らせる

すらすらと詫げる言葉に実がない

言いにくい話は孫の口を借り

鳥取県 吉田孔美子

石垣に三万円で名を刻む

無断では石も拾えぬ里の川

イベントにお寺の庭は忙しい

横浜市 丹下智洋子

いくさ知る世代田舎に住みたがる

裏切らぬ会社と決めていた甘さ

井の中で鳴くから蛙息が合い

尾張旭市 三浦きぬ

三十五度和服の女涼しげに

初恋の糸を手繰ればそこに亡夫

五パーセント以上冷蔵庫で腐り

千葉県 大川晩翠

風鈴の音色聞きたいイヤホーンで

風鈴の日本の風情つりしのぶ

首なしの地蔵に頭石を置く

香川県 神保坊太郎

姿見にたしかめている化け具合

お綺麗と言われてからの浮かれ足

高速に消える先祖の眠る丘

豊中市 みきわきみ

敗戦で消えたは使命と正義感

柳人の長生き卒寿の句が見える

口紅を直して歯科を出て行った

東京都 井上つよし

叱れない無口不器用親ゆずり

スクランブル渡る世間の鬼の顔

トルコ風呂瀬戸の夕風思い出す

島根県 菅田かつ子

気をつけて行けよの声を背で聞き

形ふりをかまわずダリヤ花をつけ

縄のれん絡むお酒は売ってない

西宮市 井上俊二

古里を憶い野菜を鉢に植え

雨の夜に間違い電話つづけさま

仮設住む友には辛い雨と風

大阪市 杉澤汀

気をつけてゆっくりいけと地藏さん

宝恵駕籠へ乗るも担ぐもアルバイト

ギャルみこしお旅所までのメーキャップ

松江市 浦辺静江

色褪せた亡父の写真に励まされ

気晴らしに二つ並んだ万歩計

たそがれにたそがれ同士お賑やか

京都市 勝山美千代

亡母に似る鏡の中の鼻めがね

ぐし縫いのあと確かめて背を伸ばし

ばあちゃんのはんなりとした薄化粧

大阪市 亀山円女

自称サムライその妻苦労しています

イライラはタンゴを聞いて和らげる

心に夢をいっぱい乗せて翔んでます

川西市 田中喜俊

五十肩だましながらに草をひく

孫だいて肩のいたさを忘れざる

痛くても誰にも言えず年思う

横浜市 金森徳三

自適とはこんなものかところ寝する

山鳩につられて腹の虫が啼く

散歩道子供に声もかけられぬ

静岡市 増田扶美

籠下げて話のはずむ梅雨晴間

おそかった父の広さが今分かり

容赦ない言葉の裏が胸にしむ

鳥取市 富山雄幸

投入れの薔薇一輪に夢を追う

ジョッキ一杯泡がぶつぷつ喋りだす

インターネット数字に子供酔っている

尼崎市 岩倉キク子

よろい着て肩ひじ張って生きてはる

最近のニュース別世界の出来事

輪廻転生亡母に似てきた娘がやさし

兵庫県 高見末野

笹竹に吊した孫娘の縁結び

風邪ぐらい仕事に追われてすぐ直る

満開の花を信じて花苗植える

札幌市 三浦強一

ハンタイが生き甲斐だった青春譜

まさかとは思うが医師の優し過ぎ

二度の職背広やっぱり似合う夫

姫路市 服部 一典

移植法 死す死は生かされる

アイ・ラウユー死んでかまわぬ以下余白

嫁ぐ娘へそのときあけよ玉手箱

出雲市 加藤 スズコ

行く道を笑いに替えた泣きぼくろ

蛸舞う一夜泊りに来いという

地蔵さんよだれの赤が変る初夏

今治市 越智 青園

便利さにいつか人間怠けだす

竹箒朝の空気もはきよせる

境界線存じませんと草がのび

吹田市 野下 之男

果敢無くも命みなぎる蟬の声

腹の虫治まらないか飯が出ず

失楽園看板だけを見て帰り

和歌山市 楠見 章子

通販の服お隣と色違い

夏服は形状記憶と決めている

どの辺り夢つまってるそば枕

出雲市 梶 ミツエ

朝の水薬を飲めと夫が言う

青春とはモヤシの味によくにてる

そよ風に乗ってほたるが飛んでいる

鳥取県 石谷 昭恵

助けてと呼んでる子供の声がある

がらくたをほどこいて昔の風に会う

墓穴掘る道具は何もいりません

兵庫県 安達 厚

おいしいと言えはいいのに頑固者

仏前に心安らぐ掌を合わせ

一口の安らぎこれが妻の味

羽曳野市 芦田 絢子

線引きの甘さへ蟻が寄ってくる

還らない蟻のことなどもう忘れ

相談に乗りますというおとし穴

八尾市 砂田 八寿子

今日佳い日待ってたように電車来る

歳一つベルト一穴増えていく

評論家言うだけあなた何をした

鳥取県 松本 聖子

台風に追打ちかける梅雨豪雨

意地張ってみたが引込むこと忘れ

停年を過ぎてても働くのは果報

鳥取県 塔 寛子

選りぬきの苦勞ばかりをくれるひと

結ばれた御縁で無料介護人

横文字にやたらつまずき年を知る



兵庫県

井上信子

おしゃれして食事に出かける旅の味

世紀末子を欲しがらぬ才女増え

酔っぱらい最終電車をよく覚え

羽曳野市

徳山みつこ

寝そびれて頁の音の大きさよ

お日様が出るとはしやぎ出す手足

朝ごはんおいしい今日もいいコント

寝屋川市

瀧本八十八

いにしえの千尋の海を汚す罪

古希でなおひと働きか新世紀

恐ろしや地球に毒がおおすぎる

兵庫県

仲井素水

高齢者なつた気もせずまだ九十

枇杷熟れて小鳥が先に味見する

寝て待つて居れずバタバタ貧乏性

尼崎市

野瀬昌子

天の川昔話がしたくなる

水着きてプールサイドの花でいる

偶然も神が仕組んだ悪戯か

和泉市

中川楓

朝顔に水やり夏を共にする

葬式の帰りうどん屋探してる

梅干が程良く漬かり梅雨明ける

唐津市 井上勝視

万歩計一つ嬉しい坂が出来

恥をかき躓く度につく度胸

しあわせと判る電話の弾む声

横浜市

秋元和可

鏡にも笑ってみせる歯が入り

広辞苑拡大鏡とペアで居る

昨日生き今日生き明日は何しよう

横浜市

平達也

スーパへ歩幅合わせて妻の供

足を知る暮しも何時しかカビが生え

重宝に使い大事にしてくれず

熊本県

増田一乗

除草剤雑草の伸びに追いつかず

建て替えの時機が来たよと屋根の草

田の草と共に田螺も放り出され

兵庫県

大谷幸次郎

年金が清貧などと自惚れる

ねずみの顔も知らない猫が爪を研ぐ

正論が座ぶとんのない隅にいる

横浜市

荒井広和

小規模の竜巻に会う日曜日

出世するほどに孤独の溝を掘り

温室の育ちで露地の味忘れ

|                                                     |     |    |     |    |    |
|-----------------------------------------------------|-----|----|-----|----|----|
| 洗たく機ぐるぐる夢をかきまわす<br>父の日はせめて老舗のうなぎ買う<br>健康で明るいけれど職がない | 八尾市 | 神原 | まさと | 岡田 | 芳江 |
| 砂遊び高いおもちゃに振り向かず<br>固せんべいばり古希はまだ若い<br>絹ふとん夢は貧しい頃のこと  | 吹田市 | 石原 | 靖巳  |    |    |
| 蟬が鳴くはかない命懸けて鳴く<br>神様も汗だくになる夏祭り<br>フアッションの水着は浜で遊ぶだけ  | 川崎市 | 和泉 | 見早子 |    |    |
| 西暦に慣れないうちに新世紀<br>スイッチを妻の指図の通り押す<br>元気よい靴は五線譜の上歩く    | 八尾市 | 與田 | 明   |    |    |
| 猫だけが犬が本気で吠えまくる<br>無意識に止めたガス栓気にかかり<br>トタン屋根雨と闘う音となり  | 鳥取県 | 国森 | 武子  |    |    |
| こんこんと湧く名水の持つほこり<br>さまざまな個性女は皆きれい<br>近く住む娘裏玄関から入る    |     |    |     |    |    |

|                                                      |      |    |     |
|------------------------------------------------------|------|----|-----|
| 席一つまるで前歯が抜けたよう<br>ずば抜けた子はいないけど仲がいい<br>風鈴が相鎚を打つ夕涼み    | 米子市  | 猪森 | スミエ |
| 灼熱の恋も茶粥の味になり<br>やさしさは使用期限のない宝<br>子が伸びる分だけ縮む親の臍       | 和歌山市 | 武本 | 碧   |
| 太陽を含んでトマト熟れてくる<br>咳ひとつ病気にさせて休ませる<br>水際ではしゃぐ児を見る親の汗   | 横浜市  | 福田 | 由美子 |
| 駄洒落からやさしさ貰う傘の中<br>幸せな時を過ごして疲れてる<br>うかつにも二つ返事をして悔いる   | 横浜市  | 近藤 | 道子  |
| ムツゴロウもう人間は信じない<br>クレーンで積木遊びをしてるビル<br>ペランダの花のリボンになった蝶 | 横浜市  | 宮村 | ちよ路 |
| ただ座りそこに風情をかもす人<br>まだ役を持たしてくれる土地の人<br>自認する中途半端が暮れてゆく  | 唐津市  | 岩崎 | 實   |

今治市 渡邊 伊津志

盃洗の底で本音が浮き沈み

公害の海にゆっくり陽が沈み

飯だけに打つ銅羅のある貨物船

宝塚市 飯西 ミサヲ

お達者か医者も人の子背が丸い

ほんの十歩 歩けたことがうれしくて

朝市でとれたて笑顔まけてくれ

島根県 武島 ちよえ

腰かけた石に馴染んで動かれぬ

雨露を凌ぐに足りる家に棲む

合鍵を作ってからの不眠症

松江市 松本 知恵子

里からの新ジャガを煮るほっこりと

約束は雨の向こうへ置いたまま

三次会グラスが重い話聞く

守口市 石森 利昭

別れ道背中を月が追掛ける

見縊った雑魚の小骨が命取り

座禅組む手の蚊ゆっくり肥えていく

八尾市 篠原 いつふみ

親切に金の要ること言ってくる

ワイシャツが独りにしては白過ぎる

デパートで涼むつもりが高くつき

吹田市 西岡 豊

百態のドラマ演じて喜寿となる

モシモシと地球の裏から孫の声

宇治金に火照るからだが癒される

鳥取県 権代 康女

親馬鹿へ子供だんだん遠ざかる

素足にて大地の温み感じとる

花のある町にしようと老いが立つ

倉吉市 山中 康子

ほどほどに刺激も欲しい青リンゴ

くちなしの奥床しさが肌に合い

受話器から友のやさしさあためる

大阪市 中澤 孝子

お隣と近すぎ開かずの窓一つ

天守閣丸抱えしたビルの窓

銀髪となり口紅を濃いく引く

静岡市 大村 正雄

儲けだけ取ってバブルに罪を着せ

御丹精咲いてるうちは水をやり

蜜豆を食べる間惜しみよく喋り

枚方市 二宮 紫鳳

あじさいが色あざやかに雨に酔う

就職を決めて充電旅行する

馬鹿いえる夫そばにいてホッとする

大阪市 三浦千津子

いい汗に自己満足の今日を脱ぐ

抜擢へ私も影も背伸びする

じいちゃん骨抜く薬孫は持ち

兵庫県 中野とよ子

うすうすの話秋には実るらし

散歩道思わぬ花に迎えられ

上機嫌手まりが弾む青い空

和歌山市 松本良

仕事好きいのちを入れた道具箱

大吉を引いて神鈴振り直す

ステテコの昼寝平和であればこそ

高槻市 左右田泰雄

ひっそりと世間を他所に桑いちご

梅雨晴れ間物干竿のせめぎあい

裏口の犬が断わる御用聞き

高知県 桑名孝雄

割り勘の員数として誘われる

アジサイのような女で苦勞する

セクハラと言わぬ時代で生き延びた

和歌山県 中村君枝

苦勞性夫の陽気にすくわれる

小三に命あずけてタマゴツチ

我樂多の山に埋もれている元氣

和歌山市 福重美子

重役が会社に汚点つけて去り

氣前よくどんどん使う他人の金

旅の宿我が家の夢で目を覚まし

愛媛県 宮本末子

繕うてばかり余生の玩具箱

お好みの色に染まったかき氷

例えばの中に本氣をほのめかす

岡山市 清水金太郎

平凡に生きるただそれだけのむずかしさ

出直しへこんどは妻が主導権

長雨であじさいも色に迷ってる

尼崎市 古川正子

早朝の小鳥囀る梅雨晴れ間

カラフルな浴衣の似合う若い人

留袖の柄にしばらく若返り

兵庫県 植村雄太郎

出て行って下さい嵩が高いから

五十年前とおんなじ文字の癖

クラクション腹を立てても赤のまま

東京都 結城明玄

籠一杯洗濯おえる今日晴天

生かされて胃に栄養を流し込み

延命治療 病人生きて居たいかも

富田林市 欄 智久

仲人をやる気の妻に煽てられ

岸和田市 加藤 基

パン食では職場のいくさには勝てぬ

要領がわかつて義母と馬が合う

大阪府 川久保 睦子

ライバルと一緒に肩を叩かれる

触れられぬままでなごりの紅おとす

大阪府 平井 露芳

ばあちゃんが好きと丸文字書いてある

物入りやのにイベントやりたがり

八尾市 鷺見 章

知らぬ間にゴミが住んでた無人島

相撲でも見るか飯までまだ永い

唐津市 林 公一朗

国なまり飛びかうナースステーション

マルクスも苦笑いする選挙戦

横浜市 上野 天々

七面相器用な顔が頼りなく

老人の痛み触診してくれぬ

医者さえも年寄の冷水という

白髪にネット鏡は笑い出し

泉佐野市 大工 静子

鳥取市 宮脇 道子  
子の出世親の背すじがピンとのび  
みなと博 船で行こうか夢はしる

鳥取市 石上 悦子  
凶鑑買い待つ日から来ぬ小鳥です

兵庫県 緒方 美津子  
宴会のグッズ集めてひとり飲む

父の日は散髪をして豆の飯

梅雨も好き草木はみんな天を向く

鳥根県 岩田 三和

父は釣り母は女将の名コンビ

酪農家 新住民に追い出され

静岡市 宇佐美 寿美

つり上げた眉に男の意地がみえ

やさしさに会いたくなって背伸びする

鳥根県 谷岡 ふみ

幸せと思う夕餉に揃う顔

丘の上墓は紫苑の花ざかり

尼崎市 軸丸 勝巳

梅漬ける妻のつぶやき孫のこと

年輪がお役に立たぬ今日のうつ

倉吉市 大下 智子

会話にもリズム感じる若夫婦

近頃はリズムないのが倦怠期

北九州市 岡田 幸生

風化した心の傷が消えてゆく

欲しかったのは胡蝶蘭よりのし袋

大阪市 立 蔵 信 子

夕焼けに明日もあるよと背のびする

誰もいない時には君と話する

大阪市 鈴 木 トヨ子

手枕が心許そか思案する

初成りのトマトと話す朝の幸

愛媛県 黒 田 茂 代

曲がったこと出来ぬ無冠の父でいい

まだ夫をあなたと呼んだことがない

羽曳野市 森 田 四三郎

ストレスの放電に行こカラオケへ

低年金募金箱には目を逸らす

北海道 中 里 つね一

朝顔に立ちどまってゆくランドセル

連休の朝寝に孫が攻めてくる

横浜市 豊 田 羊 子

残り火に失意と言わせない依怙地

グラジオラス忘れられても咲いてみせ

大阪府 井 上 千代子

半分分け横目で見て居る孫二人

姑と舅の愚痴を孫が聞き

富田林市 杉 本 とも子

車間距離守る癖つき縁遠い

嬉しくも悲しくもあり母に似て

尼崎市 長谷川 佳 山

影集め百鬼夜行も面白く

我が道は天の王道歩むべし

和歌山県 村 中 悦 男

誕生日 古希晴天に腰のばす

古い忘れ鏡の中のうす化粧

倉吉市 田 中 八太朗

母の愛お灸の疵は消えざりき

妻のメモ握りしめてるお買物

交野市 山 川 日出子

青い目もねじり鉢巻盆踊り

探査機をエアバッグで火星着

八尾市 井 尻 民 子

梯子して酔眼に浮く妻の顔

目が合ってどきどきした頃懐かしい

枚方市 大 昇 隆 広

世の中をわかったように言わす酒

スタートで躓き楽に生きている

尼崎市 尾 宮 弘 治

減っただけ皺増えましたダイエツト

昇任の名刺の出来を妻とみる

雨が降る午後は昼寝で事がすみ  
肩書がとれて近所と仲がよい  
尼崎市 中澤 向西

孫の品選ぶ手先がよく弾む  
親と子の絆は何処核家族  
兵庫県 徳平 毬子

紫陽花と遊んで老いも花と咲く  
寄りそうて生きております嫁姑  
和歌山市 和田 美寿子

吊橋をへつぱり腰が揺れさせる  
かき氷小さな虫歯怒り出す  
横浜市 生坂 サト子

意地っ張りむかし人間背を伸ばす  
ボランティア勉強出来ぬ奴がする  
橿原市 西本 保夫

太陽に見せる背中だ汚せない  
おだてなら踊るお猿を飼ひ馴らし  
徳島県 安宅 美代子

何もかも失ってから目が覚める  
茶髪ブーム黒いカツラも準備する  
滋賀県 中 宗明

長い目でみれば大したことじゃない  
怖いものなんにもないと言う怖さ  
東大阪市 谷口 義

森林浴心の垢が流される  
バス席にまた乗合わす盲導犬  
静岡市 中西 雅

ストレスが寝汗となって眼を覚ます  
手枕の昼寝に松の風をさく  
尼崎市 小川 富江

老いさびし尾を振るすがたかもしれず  
貧乏性でぬるいお茶にて我慢する  
岡山市 富坂 志重

夢に見たカーネギーホールで拍手聞き  
手を繋ぐ温い気持が春を呼ぶ  
広島県 山本 示風

ウエストの細さ誇示するウインドー  
タンポポのお日さま色の笑顔かな  
横浜市 山下 省子

母米寿観音様のような笑み  
相槌を打ってシマッタもう遅い  
横浜市 川島 良子

大臣に包んだ金で村おこし  
道端で十円拾い思案する  
鳥取市 岸本 孝子

有料になってごみにはまだ出来ぬ  
よくメモをしている癖によく忘れ  
新潟県 高野 不二

暴走族雷親父も目をそらせ  
優待証用もないのに出歩かせ

大阪市 島崎孝一

選評のお人柄からファンになる  
久しぶり美人になつて孫娘

沖縄県 杉谷一栄

大阪狭山市 伊藤尚子

朝つゆに生気ムンムン茄子胡瓜

綿菓子のような雲だと子がはしやぎ

河内長野市 木太久正一

好きな道選んで歩くゆっくりと

玉葱を車庫にも吊し夏は来ぬ

益田市 岡田たけを

長生きをしてねと孫が耳打ちし

支持率があがる内閣憎くなり

横浜市 菊地政勝

退院がベルトの穴を又増やし

野仏になんとはなしに手を合わす

鳥取県 高尾京

予想せぬまま生きる明日の無事

核実験秘めた平和の条約よ

鳥取市 山本崇

種々雑多背負い続けた腰丸い

夢博も老いの暮しに遠すぎる

豊中市 岸田知香子  
振り向けば素知らぬ顔の独り言  
喜寿前に時間忘れる趣味がある

羽曳野市 山本たけし  
久し振り散歩に和む老い二人  
エリートも手の鳴る方へ行き転ぶ

大阪府 団野恒

住み替る人に親しみ花八つ手

お茶加減たたえ新茶の二煎乞う

### 川柳塔 (つづき)

高知県 小澤幸泉

ゆっくりとコーヒーだけを飲んでいる

生と死をブームのように語り合い

またひとつ歳をトルねと妻笑う

年金はサイの河原の石を積み

熊本市 永田俊子

待ちぼうけ花が褪せゆく花時計

錆びた針磨いて女ひとり住む

傷ついた心鎮める白い粥

世の中の狂いみている四書五経  
熊本県 岩切康子

酔い寝した昨日の分も書く日記

疑えばきりが無いけど護身術

人見つけ爆音太める暴走族

古日記結婚前に燃えました



—水煙抄

# 秀句鑑賞

—8月号から

前 たもつ

蟬も黙禱八月十五日正午

徳山 みつこ

あの玉音を聞いてから五十二年が巡ったが、  
沖繩基地問題、慰安婦問題等片付かない限り  
本当の戦後はない。

戦争を体験した者にとって、八月十五日は  
絶対に忘れない日である。その日を「蟬  
も黙禱」と表現したところにこの句の重みがある。

今年また歳を重ねて梅漬ける

吉村 さち子

母がわりをしてくれ、九十六歳で亡くなつた  
祖母と重ねて句を味わっている。

たんたんと生きているが、前向きに生き、  
家族の中で大事にされている。歳を重ねて漬  
ける度に味を増していく。この場合、漬ける  
ものは梅がいちばんよい。

ほのぼのとして好きな佳句である。

二 三日経ってほんとの事を言い

清原 悦子

ありますあります。少し日にちを置いて妻  
に実は、あれは……と告げること度々。

聞く方も、感情を抑えて冷静に聞けるもの  
です。大事なのは、二、三日経つてというところ  
です。真実を話すには翌日では早すぎ、一週  
間もたつと間のびする。二、三日でなければ  
いけないのです。穿ちのあるよい句。

今日までの顔雑巾で拭いておく

池尾 保子

雑巾で拭く手があったのだと今さら感心し  
ています。この傲慢な顔、思いやりに気づか  
ぬ顔、一人よがりの顔、顔顔顔、この顔にけ  
じめをつけるにはタオルやハンカチではもつ  
たない。雑巾で上等。

雑巾で顔を拭いて今日から再出発。ユーモ  
アあふれた句に拍手。

何度でも出直しますと陽が昇る

村上 久美子

私も毎朝太陽に励まされ、なんとか六十五  
年生きて来たようなもの。人生七転び八起き  
どころか、出直しの毎日です。

この句を読むと私もまた元気が湧いてきま  
す。失敗を気にせず、出直しのきく人生を前  
向きに生きたいものです。

おじいちゃんんと響きがいいだろう

桑名 孝雄

三番めの孫は今一歳。じいちゃんしか言わ  
れない孫と毎日のように電話で、「じいちゃん」  
「ハニー」を呼び合っている。

孫が呼んでくれる「おじいちゃん」でない  
とため。「おじいちゃん」なんと響きのいい  
ことよ。この実感、経験ないとわからない。

グッドバイお茶碗一つ割りました

川久保 睦子

母が逝つた句と並んでいるので、きつとお  
母さんを見送つた実感句だろう。このように  
身内の死を明るく送りたい、また送ってもら  
いたいものだ。亡くなった人も安心してあの  
世とやらに行けます。カタカナ語をつまく生  
かした見本と言えよう。

陽だまりを歩き始めたベアシューズ

二宮 紫鳳

結局は深いところで許しあい

村中 悦男

ねんごろにお参りすれば夢に亡妻

中尾 つね一

夫婦の睦まじさを読んだ句によい句があり  
ました。代表して三句選びました。

傘寿、金婚をめざす私にとって、手本にさ  
せていただきます。



蒼い絨毯紡ぐやさしい波になる  
私も小さな傘を一つ持ち

もう秋だ十人向きの風が吹く

昼の闇こどもは外で遊べない

残り少ない明日を見つめている螢

新聞を後ろから読むマンネリよ

壮大な喜劇始める披露宴

壊滅の道へひとつのピンホール

はつきりと言えぬ葉を飲んでい

一度だけ生母を詰った悔いがある

ライバルを褒めて嫉妬が煮こぼれる

滅塩で済ます夏山ではないぞ

この階を登りきった花浄土

しっかりと木を抱く蟬の抜けがらよ

バスの広告またも墓石に目がとまる

よく見ればよく看られてる勤務評

ひまわりの中を歩いて飢えている

泣き羅漢今のわたしに書き写し

エトセトラそれでも愛は書き足りぬ

神も仏もわたしに首を傾げない

十二神将灯して暗い梅雨の寺

生きている汗だ優しく拭いている

どうしてーともう尋ねない子供部屋

ビタミンが切れる きままな旅に出る

この世には青天の霹靂がある

ボロボロの毯を抱えて悲を抜ける

和歌山市 楠見 章子

八尾市 高橋 夕花

鳥取県 田村きみ子

和歌山市 玉井 豊太

和歌山市 堀畑 靖子

和歌山市 榎原 公子

横浜市 菱田 満秋

和歌山市 川上 富湖

兵庫県 北川とみ子

八尾市 高杉 千歩

海南市 三宅 保州

岡山県 小林 妻子

米子市 野坂 なみ

大阪市 松尾柳右子

尼崎市 春城 年代

大山市 早川 盛夫

和歌山市 福井 桂香

泉佐野市 稲葉 洋

和歌山市 山田 高夫

鳥取県 土橋はるお

京都市 松川 杜的

神戸市 船津とみ子

大阪市 本間満津子

八尾市 宮西 弥生

富田林市 片岡智恵子

岡山県 山本 玉恵

蝸牛雨に少うし歩が早い

わたくしの首は好奇心が強い

貧しいが笑袋はたんと持つ

ナイフよりナタの説得力に負ける

体臭をなくした顔のある鏡

遮断機が降り花の道とぎれけり

どっちつかずの思案夏の日暮れやすし

懐かしい日にもどりたい時目を閉じる

迷惑は誰にもかけぬローヒール

人様のことに手にとるようによく見える

猫の目の媚びた細さが気にいらぬ

笑い袋からから干して夏にする

一日で成った笑顔でない笑顔

めでたしで終わる童話が親は好き

海の日には海にいいことがけ

久しぶり遠く灘で深呼吸

羊にもなめられたら眠れない

理解ある親を演じている疲れ

生きおれば闇の大小からみつく

犬と僕とはいとも波長が合っている

馬鹿のつくことが多くて日が短か

コスモスの風になり切る花浄土

本命は後ろについて様子みる

離れ住むひとが優しいことを言う

太陽に恥じぬなどとは申しません

真夏日に浴衣の糊をピンと張る

今治市 月原 宵明

米子市 澤田 千春

和歌山市 青枝 鉄治

大阪市 一本 勇太

尼崎市 田辺 鹿太

弘前市 佐治千加子

吹田市 山本希久子

富田林市 藤田 泰子

松原市 玉置 重人

堺市 志田 千代

八尾市 宮崎シマ子

鳥取県 さえきやえ

寝屋川市 堀江 光子

唐津市 仁部 四郎

鳥取県 谷口 次男

静岡県 蘭田 猿香

寝屋川市 井上すみれ

鳥取県 岩崎みさ江

倉吉市 淡路ゆり子

京都市 都倉 求芽

尼崎市 春城武庫坊

寝屋川市 坂上 高栄

兵庫県 大谷幸次郎

倉吉市 松本よし江

西宮市 西口いわゑ

和歌山市 岩本美智子

煌々と門灯 妻が帰らない  
まだ亡夫により添う若さあるつもり  
ペン皿に双葉残した路の臺  
美人ではないが良い顔ならでける  
輸入しても浅草のりは浅草のり  
諦めなさい何も出来ないのは同じ  
他人ごとでないぞ必ず霊柩車  
仏壇へ心残りを長々と  
投げそこねた石は言い訳などしない  
老舗にも金太郎飴の影がない  
胡瓜からもう命は緑色  
悠々蒼天この頃好きな言葉です  
パンドラの箱の底まで待ちきれぬ  
秒針よせめて深夜は眠ろうよ  
一つだけシグナルくれる星がある  
人間が出来れば頭低うなり  
あまりにも突然だった絹の喪服  
アンテナが錆びてしずかになるカラス  
残されたページ落書など出来ぬ  
離された矢を反省が追っている  
長生きも互いに嫌な面も出る  
最後まで残った靴が入らない  
駆けつけてくれた素顔は愛だろ  
一団の子等挨拶しバス降りる  
バージロード父は寂しく歩きだす  
旅行社がボクを誘惑して困る

|       |       |    |
|-------|-------|----|
| 枚方市   | 浜田    | 良知 |
| 羽曳野市  | 芦田    | 絢子 |
| 奈良県   | 鍛原    | 千里 |
| 今治市   | 中村    | 好恵 |
| 寝屋川市  | 江口    | 度  |
| 河内長野市 | 植村    | 喜代 |
| 鳥取県   | 乾     | 隆風 |
| 高槻市   | 乙倉    | 武史 |
| 鳥取県   | 上田    | 俊路 |
| 黒石市   | 相馬    | 一花 |
| 米子市   | 木村富美子 |    |
| 鳥取県   | 春木圭一郎 |    |
| 川西市   | 松本ただし |    |
| 今治市   | 村上久美子 |    |
| 米子市   | 中井    | ゆき |
| 倉敷市   | 田辺    | 炎六 |
| 和歌山市  | 福本    | 英子 |
| 八尾市   | 大内    | 朝子 |
| 今治市   | 塩路よし  | み  |
| 米子市   | 木村    | 春枝 |
| 和歌山市  | 山口三千子 |    |
| 鳥取県   | 前田    | 一枝 |
| 岡山県   | 福原    | 悦子 |
| 米子市   | 小塩智加恵 |    |
| 堺市    | 上野    | 楽生 |
| 豊中市   | 田中    | 正坊 |

鐘チーン カサブランカが咲きました  
話ときれシンシン迫る闇の音  
ソプラノの妻にはうまく乗るつもり  
大いなる誤算で孫の世話をする  
楽しみが負担になってくる熱意  
イエスともノーともとれる首の振り  
毒舌は嫌われ者の美学かも  
きょうだいが減ってお次は誰の番  
追い風は良い方向へいつも吹く  
蟻たちも失業してる鉢の中  
目の中に刺さった儘の離婚劇  
馴れ合いの梓抜け出した心太  
年金も組に乗る寒い冬  
味付けの美味さを連れて嫁がせる  
雑草のようになれないばらの棘  
血税が零れていますすそこかしこ  
足跡に花を咲かそうさりげなく

古久保和子さんの裸電球が好きです。今はもう昔になってしまいましたが、あの大部分の肌も構造もむきだしにした裸電球の用途から、どれほどの発明や名作が生まれたことでしょうか。幼いころエディソンの名を覚えタングステンという金属元素を識り神さまのように見つめ続けた事を想っています。小野克枝さんのたのしみは大方の女のもです。掃除好きのタイプと料理好きとに分かれるといつても、洗濯だけはどちらの型にも嫌われぬ家事みたいで、まして全自動のあとを畳んで引く張って干すときの幸で何でしょうね。神夏磯典子さんの波頭には考えさせられました。その場その場の心、その刻の姿勢一つで絵にも鬼にもなる大自然、恐いものです。

|      |       |
|------|-------|
| 寝屋川市 | 太田とし子 |
| 尼崎市  | 長浜 澄子 |
| 鳥取市  | 植田 一京 |
| 横浜市  | 清水 潮華 |
| 箕面市  | 岩津ようじ |
| 横浜市  | 後藤 早智 |
| 八王子市 | 播本 充子 |
| 寝屋川市 | 岸野あやめ |
| 横浜市  | 秋元 和可 |
| 横浜市  | 宮村ちよ路 |
| 鳥取市  | 坂田和歌子 |
| 今治市  | 渡邊伊津志 |
| 倉吉市  | 野中 御前 |
| 鳥取県  | 乾 喜代志 |
| 大阪市  | 小泉 久子 |
| 宇部市  | 平田 実男 |
| 岡山市  | 川端 柳子 |

## 麻生路郎の作品とその周辺

# 大空の、い、ろ

(80)

橘 高 薫 風

昭和十年五月号の路郎先生の巻頭言「川柳祭提唱」は次のように述べる。

柳翁忌とは別に川柳祭をやりたいと思う。全国各吟社が一斉に挙行するのもいいし、京浜連合、京阪神連合といったやり方もいい。

兎に角、川柳の正しい認識を社会へ植付け、運動としてやりたい。具体案はここでは縷述しないが、今よりも一層川柳を殷盛に誘導する精神の下に大々的に川柳祭が行われることはのぞましいことである。

川柳の社会化の常に先頭に立つ路郎先生らしい提言だが、後にこの夢が実現する。

同じ号に福田山雨楼記として、

「高知県安芸郡の川柳村」が紹介される。

高知県安芸郡川柳村で郵便が配達されるといふ羨ましい話題の村は、高知市と室戸岬との間の片田舎の村だが、富田幸次郎氏や黒岩涙香氏を生んだ村で文筆風流に富んだ土地。

それが県下に流行の川柳熱に共鳴して朗らかな川柳村出現となったのは、十年前に高知の中澤濁水氏（同人、後に不朽洞会員）から

手ほどきを受けたのがことの起りで、四百戸の村民は川柳の心得なくば交際も出来ぬという。川柳会の中心は中川星水氏、名物のつぶを売る菓子屋で「川柳つぶ」の看板には、「頼張って出る門口へ五つ紋」と広告に利用、出合頭の挨拶も川柳で交わす。氏はまた自句

「故郷へ女房をつれて久しぶり」などをユーモラスに脚色し、川柳仲間を引具して川柳劇も上演する。昭和八年には村の入口、松栄山弘法大師堂境内へ高さ一丈五尺の「川柳追徳の碑——川柳村」を建立、除幕式、記念川柳大会を開催した。句会は毎月三回星水居で催し、二十数名がたのしんでいるが近隣の町村からの仲間で六十名ぐらいの日もあり、川柳村の大旗を押し立てて歓迎するという。

星水氏の言

「本当の平和、円満は川柳にあるという信念のもとに私は村を川柳化する決心でいます。川柳村即ちこの世のユートピアです。どんな労苦も川柳気分でかかればたちまち解消されます。それで川柳同人はとても勤勉で仕事

に精一ぱいですぞ。村長も村会も川柳党に引入れて、きつと名実ともに川柳理想郷を創造してみますよ」とある。

現在日本一の川柳の町と自他共に認める岡山県の久米南町は、昭和二十五年九月に路郎先生の第三句碑が建立されて始動した。

それより二十年以上も前に川柳村を目指した村が高知県にあったのである。この記事を見て私は興味を抱き、川竹松風氏に電話をして川柳村の現状を聞いた。

松風おんちゃんの声は生き生きとしていた。

「高知県川柳村で郵便の着くのは川北村と言つて、わしの産まれた村でな」と安芸郡までがすつ飛んでしまっている。惜しくも昭和十二年の戦時色の高まりから下火となつて行く。現在、川柳会だけは立派に続いていて、毎月松風氏が指導に行つておられる由、星水氏の娘さんの中川和（本名和子）さんも会員の一人であると知らされた。

編集の窓の一項に、本社の川柳マッチは本社句会の出席者のみに呈上しているが、これを毎月揃えれば大変有意義なものであるとの好評を博している。出席者以外には絶対に配布せぬ川柳マッチを揃える意味にも句会に出席を、とあり、これも興味をそそるが、誰に聞いても詳しい様子は不明である。

# 首香のむ

宮西弥生選

女妻 最後の姑に賭けている

見えずいた言訳だから許します

名も知らぬ花がはげます花の色

いい夢の種を枕に入れておく

掘り出した壺のかけらがしゃべり出し

マイナスになるかも知れぬ道を行く

咳込んで仮面が少しずれていた

見通しをよくする窓を拭いていた

目ざすものあるので山が越えられる

この波に乗ると裏切ることになる

標的に邪魔な女がひとりいる

二つ捨て一つを拾う欲を持つ

ゴールまで背筋のばした露の臺

遠近両用境界あたりにある迷い

約束は忘れない茄子の花

やせ我慢筋をとおしているのです

紅を引く翔べる女でいたいから

やがて青空家族の傘を干しましょう

炎天は嫌いと寝釈迦仏になる

岡山市 川端 柳子

横浜 清水 潮華

米子市 木村富美子

大阪市 神夏磯典子

米子市 石垣 花子

西宮市 西口いわゑ

和歌山市 木本 朱夏

西宮市 門谷たず子

米子市 青戸 田鶴

八尾市 高橋 夕花

今治市 塩路よしみ

鳥取県 岩崎みさ江

奈良県 鍛原 千里

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 福井 桂香

八尾市 大内 朝子

岡山県 大石あすなろ

米子市 政岡日枝子

鳥取県 土橋 睦子

緊張をほぐす大阪弁が好き

人の字の中へ自分を置いてみる

爪磨いてからコーヒーを挽きに立つ

うたかたの輪廻に迷うペンの先

鍵のあるドアに凍りつく絆

きびしくてあたたかな目よ紫陽花忌

命のバトン受けてこの世を生き通す

塩壺を充たせば胸に満ちる潮

あの日には見えないものが今は見え

わたしの川すこし濁して妥協する

鮎は瀬に人は自然の情に棲む

銀行のカメラで人を睨む癖

妥協より従う事の多くなり

水色になるまですすぐ汚れた手

母よりも私しあわせだと思ふ

辛い水でしたと海へ出た蛙

真相は知らないという猫の顔

幸せなことです仕舞風呂が待つ

民族の血かき立てる夏祭

向日葵の脈を心配してあげる

positioning はつきりしない嫁姑

割れそうで割れぬゆがんだシヤボン玉

催眠術論争次元が噛み合わぬ

失敗もひとつとだから笑つとく

鉢植にすると雑草らしくない

寝屋川市 平松かすみ

大阪市 稲本 凡子

和歌山市 福本 英子

米子市 林 瑞枝

倉敷市 小野 克枝

西宮市 奥田みつ子

吹田市 山本希久子

寝屋川市 岸野あやめ

芦屋市 黒田 能子

熊本市 永田 俊子

貝塚市 池田寿美子

和歌山市 川上 富湖

八尾市 生嶋ますみ

横浜 近藤 道子

尼崎市 春城 年代

今治市 村上久美子

弘前市 佐治千加子

鳥取県 さえきやえ

横浜 後藤 早智

鳥取県 田村きみ子

和泉市 中川 楓

藤井寺市 高田美代子

大阪市 板東 倫子

今治市 中村 好恵

大阪市 渡部さと美

流行には無縁わたしの彩を着る  
実直に生きた証のべた足よ

あの日から語りべとなる核の土  
何も通らぬ赤信号を待っている

讃美歌にこころの死角洗われる

五パーセント余波じわじわと薄年金

通販で靴は買わないことにする

この坂を越えれば老いが加速する

悪友の色は私も持っている

溜息が続くと酒が欲しくなる

ねぎらいの麦茶絶やさぬ母ごろも

九は不吉ベートーヴェンもマラーも

その人を知りすぎてふと興ざめる

もう部屋の一部のような古びた絵

夏まつり色んな国の人に会う

そっとおしゃれしてゆく病院も又たのし

父の日の父のない子の白い風

招き合うこともなくなる夏祭り

水子たちから泣かす風車

明日のこと神も約束してくれぬ

ひとり居で煮物たくさんつくる癖

根も葉もないと棄ててしまえばよいのだが

幸せは聞く耳あつて泣けること

ポリシーが重荷になつて森を出る  
面影を偲ぶ旅路の安かれと

|      |       |    |
|------|-------|----|
| 岡山県  | 福岡    | 悦子 |
| 大阪市  | 日阪    | 秋子 |
| 米子市  | 鷺見    | 正子 |
| 羽曳野市 | 吉川    | 寿美 |
| 米子市  | 白根    | ふみ |
| 八尾市  | 高杉    | 千歩 |
| 寝屋川市 | 森     | 茜  |
| 横浜市  | 秋元    | 和可 |
| 鳥取市  | 福田    | 登美 |
| 鳥取県  | 西原    | 艶子 |
| 大阪市  | 津守    | 柳伸 |
| 愛媛県  | 黒田    | 茂代 |
| 枚方市  | 森本    | 節子 |
| 寝屋川市 | 堀江    | 光子 |
| 鳥取市  | 坂田和歌子 |    |
| 唐津市  | 浜本    | ちよ |
| 兵庫県  | 北川とみ子 |    |
| 愛媛県  | 宮本    | 末子 |
| 横浜市  | 田中    | 笑子 |
| 米子市  | 中井    | ゆき |
| 横浜市  | 明渡トヨ子 |    |
| 和歌山市 | 桜井    | 千秀 |
| 和歌山市 | 吉村さち子 |    |
| 富田林市 | 中井    | アキ |
| 岡山県  | 矢内寿恵子 |    |

そう言うが悪女にもある深なさけ  
天敵と言う何よりの起爆剤

あるときはレトルト食に助けられ

やりくりをみじんも見せぬ割烹着

秋風が旅とグルメの耳打ちを

夏痩せを期待してないワンピース

細胞をゆり動かした茜雲

笑い皺つくり風船売れ残り

キッチンに少女のままの色づかい

この度、茴香の花の選者交替で選者としてお仕事をさせていたたく事になりました。その重さと責任がずつしりと私を釘づけたまま、あわてて始末でございます。皆様の命のある句と毎月接して、私もいよいよ勉強の課題を与えられるようこびを心より嬉しく思っております。御支援を待ち申し上げます。

柳子さんの句―壮絶な女の一生を感じさせる強い句です。女と妻それは見事なものである以上に最後の姑として賭けられる見事さ心より拍手をしたいと思います。潮華さんの句―見え見えの言訳。本当に汗が流れ出る思いがいたします。誠実で実直な人柄。最近ばかりとこのような人間が少ないですね。富美子さんの句―最近色々な花が沢山出ました。でも不思議な花と色を街角で見うけますね。ホッと疲れを忘れるその瞬間、生きていてよかったと。典子さんの句―こんないい夢を見る種がほしいですね。どこかにあるのでしょうか。

|     |       |
|-----|-------|
| 大阪市 | 藤田頂留子 |
| 尼崎市 | 長浜 澄子 |
| 大阪市 | 本間満津子 |
| 大阪市 | 三浦千津子 |
| 池田市 | 栗田 久子 |
| 横浜市 | 宮村ちよ路 |
| 米子市 | 澤田 千春 |
| 川崎市 | 和泉見早子 |
| 横浜市 | 川島 良子 |

露

中井 ゆき選



露の間の命を蜚乱舞する  
露の声小さく一人の庭に立つ  
はかなげな名の露草が庭の主  
もやもやが朝露踏んで消えて行く  
露ほど罪の意識がない汚職  
花の露母に嬉し朝がある  
バス停の壊れた椅子に朝の露  
露草はいらないペランダの蜚  
露ふくむ草たくましい成長期  
露に濡れ茄子一本を採って来る  
幸せもまあこの程度露天風呂  
露草の青が少女にしてくれる  
朝露の墨でカルチャー一単位  
露ぼたり熟れたトマトのひとり言  
露路めば健やかなりと叫びたい  
露払いのままで終着駅が見え  
赤ちゃんの涎可愛い玉の露  
露草に昨日の嘘が浮いている  
ハスの葉に居場所みつけた玉の露  
春団治露の五郎にあこがれる  
梅干しの梅が夜露をたんと吸う  
朝露に蝸牛まで急ぎ足

高夫 富美子 文時 鉄枝 克枝 正雄 大輪 シマ子 康子 良 四郎 政良 登美 晴翠 雅城 きみ子 旋風 次男 善信 満秋

止めどなく露が落ちるわたしの胸に  
夢を見ていたのと露が地に還る  
朝露を係はお花が泣いている  
露の世に石仏が傾いていた  
里芋の葉で遊んでる露の玉  
露払いできる男についてゆく  
露草へ夢の続きの話する  
露ほどを集め集めた離婚劇  
露受けたトマトりんごの味がする  
甘い露求めて蜚消え失せた  
芋の葉の露で書いてもわたしの字  
露ほどの声で真実訴える  
ためらって大きく落ちる露の玉  
露払い今にみておれ俺だつて  
露ほどのことをぐじぐじ言わないで  
住  
露貰うところへ蜚筆を吊る  
太陽をはじいて露は未来図に  
朝露の草踏んでいる生きている  
朝露がキラリ新聞少年の朝  
露うけて輝きの増す磨崖仏  
人  
結界の母かもしれぬ露しとど  
地  
朝露に濡れて子牛に会いに行く  
天  
ころころと露の行方を聞き漏らす  
軸  
露あつめ弥勒菩薩に差し上げる

佳雲 畔 隆風 典子 蜚 正子 しげお 富喜子 タミ 英子 日枝子 隆盛 路児 ミツ子 宵明 寿恵子 雅楓 重人 あずき 保州 島

あきれる

川端 一步選



心の火あきれるほどの片想い  
耳打ちへあきれた顔が二つ寄り  
何時の世をあきれたままでの羅漢  
忘れまいあきれることの大切さ  
怒ったり誉めたり犬もあきれてる  
腕白が三人米が減りすぎる  
楽天家の妻であきれる物忘れ  
不器用にあきれて孫が助言する  
あきれても笑ってすます孫の無理  
大卒が聞いてあきれる誤字脱字  
あきれてた田舎が花野に見えてきた  
お星さまあきれています 火星まで  
シャルウイダンスあきれる妻をつれてゆく  
いいじゃあない八十路の恋も花の恋  
調子つばずれの歌がマイクを放さない  
読まない本があきれている書棚  
ビール掛けあきれながらもファンです  
他人の金だから総会屋へ貢ぎ  
老いの目に少年Aのトップ記事  
胸張って記憶を無くす参考人  
あのカラスあきれるほどの二枚舌  
天地神明 神もあきれる嘘を言う

照久 久仁 宵草 和歌子 大輪 重人 英王 愛論 つね一 清芳 俊子 雅楓 克治 シマ子 たず子 花匠 和重 満秋 勝美 朝子 帆雀



おらが先生また政党を綱渡り  
あきれてばかりおれない時の経つ早さ  
あきれてはおれぬぞ老いに死の倫理  
傘寿とや 一番先を歩き出す  
古い尺度で今日もあきれて生きてます  
非を悔いば自分にあきれることはかり  
天才のひらめきあきれた事をする  
去って行くあきれた口は開いたまま  
阿吽の像あればあきれた顔だろう  
捨てるなら生むなと顔のない鬼に  
長すぎる小言あきれる膝小僧  
早口にあきれてヒバリおりてこず  
賞味期限すぎても女翔んでいる  
落語家が呆れた顔を見せてくれ  
貧しくもあきれる数の鍵を持つ

住

愛愛愛親があきれる一直線  
日本どうなる私のさが間にあわず  
怖いもの知らずあきれて物言えず  
愚痴不満あきれてるだろ日記帳  
あきれる程の知恵を内臓している児

人

どちらにも転ぶ尻尾を持っている  
地

公園の朝の簪があきれてる  
天

少年にあきれるほどの知恵がある  
軸

ほとほと呆れる妻の大きいきき  
中山 雅城

良 知  
有 一朗  
洋  
たもつ  
勝 已  
高 栄  
武 史  
宵 明  
富 喜子  
克 枝  
正 雄  
しげお  
よしみ  
虹 汀  
登 美

プライド

新家完司選



ふるさとを誇り隠さぬ国詠り  
一流へ三浪させるお家柄  
プライドを捨てて頼張るにぎりめし  
無職にも明日への夢は少しある  
プライドが人の情けに首を振る  
プライドがバンドの穴を替えている  
プライドを捨て六十の習い事  
清貧に甘んじプライド武器となす  
プライドが黒を白とは言わせない  
プライドが大馬鹿門を許さない  
高邁なプライドを持つ鶴のボス  
プライドを一枚脱いで涼をとる  
斬られ役なら主役には負けぬ自負  
無礼講プライド横に置いて  
プライドをくすぐる胸の紅いバラ  
身障の父が勲章はなさない  
プライドは高くお店は左前  
いつまでもプライドだけがへこたれぬ  
プライドを捨てて踊りの輪に溶ける  
母さんのプライド秤などいらぬ  
親にもらったプライドが邪魔になり  
プライドがあるから背すじ伸ばしてる

勝 周 信  
彩 子  
時 弘  
しげお  
愛 論  
實 賀子  
多 賀子  
勝 已  
次 男  
有 一朗  
久 美子  
柳 弘  
岳 水  
みつこ  
文 時  
朝 子  
義 男  
ちかし  
蟹 生  
金 生

プライドがありすぎ愁は傷だらけ  
プライドが邪魔をしてますまだひとり  
湾曲の背なにも自尊心はある  
プライドがごめんなさいを言わせない  
前職のプライド肌に沁みている  
年金をきっちり守る高橋枝  
プライドも年金なみにしておこう  
院号で死後もプライド持ち続け  
年金の額プライドが語らせぬ  
中卒というプライドが父にある  
ほとほとプライドでまだ浅い傷  
海軍のプライドだけは持ちつづけ  
ロケットがプライドもてば動かない  
プライドが孤独な酒に誘い込む  
線香花火とうにプライド捨てている

住

漁に生き養殖などは口にせぬ  
ささやかなプライド妻はミス河内  
プライドを捨てるとうまい蟹の足  
この家はわたし一人で保った家  
プライドが高いと財布拾えない

人

真っ白な下着プライド秘めている  
地

肩書きが消えてプライドだけ残り  
天

金というやつにプライド削られる  
軸

驚見正子

日枝子  
たず子  
隆 風  
省 子  
和 枝  
ツ 子  
龍 子  
克 治  
あずき  
佳 雲  
富 美子  
喬 水  
めぐみ  
政 良  
美代子  
いつふみ  
志 洋  
宵 明  
あやめ  
黎之助  
典 子  
大 輪

# 初歩教室

題——肩

吐<sup>は</sup>田<sup>だ</sup>公<sup>きん</sup>一<sup>いち</sup>

破調句のことをやかましく言う背景には、

破調句を創り出すと中毒症状を起しやすくなり、推敲のむずかしさを避けるようになる。

言葉を増せば増すほど、自分の意図するところが十分に相手に伝わるだけに、ついそれにつられて句が安易に流れる。だが反面そうした句には、往々、句の生命ともいえる余韻や余情というものが欠如する。

○そつと肩に手を置かれて目覚めた恋心その意図するところは十分に分かるが、次のように略することで、余韻が出るのでは

▽肩に手をそつと置かれてからの恋

添削句

○肩車乗せてやれない孫肥満

苑子

下五の推敲不足。孫の肥満を問題にするより、自分の「老」を詩うことによつて、思うにまかせない嘆きが詠めるのでは——

▽肩車乗せてやれない老いた肩

○肩肘をはつてたまには生きたいな 信幸

肩肘であれば老人の切ない願望よりも

▽肩肘を張つた昔がなつかしい

○いからした肩など似合う筈がない 俊二

下五に難。川柳は下五が最も大切

▽下積み父に似合わぬ怒り肩

○肩幅がせまし身に合う服がない 静子

もの中に肩幅だけでなく、身も瘦せて

小さくなつてゆく老いの姿を詠む。

▽肩幅も瘦せて合わせる服がない

○山車を見る特等席は父の肩 美子

視点はいい。欲言えは父の姿をもつ少し

▽山車見せてもらった父の広い肩

○肩撫でて長生きしてやと孫の言う 多美子

下五が粗雑。前後を入れ替えることも

▽長生きをしてやと孫の肩叩き

○新柄のゆかたが肩で風切つて 幸子

言い古された言葉かも知れないが、言い切

つた方がすっきりするのではないか

▽新柄のゆかたが肩で風を切る

○肩書きをとれば人間らしくなり

いま一つ。説明句に近い。

▽肩書がとれて人柄丸くなり

○肩の荷の軽さに口が踏み外し つよし

下八の解釈がむずかしすぎる。分りやすく

▽肩の荷の軽さにちよつと破目外す

○肩車されていつしよに見た夕陽 楽生

中七を今少し掘り下げて「誰と」に思考を

巡らせば

▽夕陽見たでつかい父の肩車

○同住して肩は軽いが気は漫ろ みやこ

同住という言葉は辞書に見当たらない。わざ

わざ無理な言葉を使つて上六（破調）にな

なくても。推敲不足といえよう。

▽肩軽うなつたが同居気を使い

○梅雨空へひとつの傘に肩を寄せ テル子

中七が冴えない。古い表現といえはそれま

だが、ここは相合傘が。また俄雨でも

▽梅雨空へ相合傘の肩を寄せ

○肩で息男は役に立たぬもの いつふみ

「男は」とすると男全部となり不適切。参

考句も芳しくはないが

▽一寸したことで息切れ老いの肩

○肩書がとれて本音の意見吐き 純子

理屈を言えは本音は一つの意見。同義語

▽肩書がとれて遠慮のない本音

○初孫の肩車ちつとも重くない つね一

中九の破調。色々推敲してみること

▽初孫の重さ感じぬ肩車

○肩書きのついた名刺がすてられぬ 道子

原句へ軍配。いい点を突いておられる。

▽肩書の名刺に未練定退日

○死ぬまでに肩の荷物を降ろしたい 登美

上五に難。死を發想した時に、死に關連する黄泉、三途の川、天国など句想の展開を図ること

▽肩の荷を下ろし三途を渡りたい

○肩すかし見事にきまり星拾う 克己

中七が冗句。力士にとつて勝ち越しは大事なことなので、これを詠むといひのでは

▽勝ち越しを決めた一番肩すかし

○肩車乗せた息子の親父顔 隆

下五(締めくり)のむずかしい例

▽肩車してやった子も二兄の父

○肩の荷も苦ではなかつたあの頃は 円女

いい句だが、あの頃を具体化してみると参考句は過去形ではないが

▽子育てに追われ肩の荷苦にならず

○力抜き共に貸し借り老いの肩 和可

上五と中七の關連が解り難い。川柳は誰が読んでも解る。一読明解が必要

▽お互いに持ちつ持たれつ老いの肩

○金星に肩で大息勝名乗り 茂代

金星とあるから下五は言わずもがな

▽金星が肩で息する名勝負

○肩書の無い名刺の字太めにす 崇

下五が安易。肩書の無い名刺は大物?

▽計りかねてる肩書の無い名刺

○肩落しだまって座る薄灯り 美恵子

見付けは拔群。自分の場合だと▽肩落し思案のつかぬまま茶の間娘さんの場合では

▽肩落す娘へ励ましの茶を入れる

○肩よせて趣味に生きる共白髪 ミツオ

中六。せめて生きてるとすれば中七に

▽肩寄せて趣味生き甲斐の共白髪

○長々と回りくどくて肩が凝る 義男

説明句。祝賀会などを想定すると

▽肩が凝る話長々式次第

○肩綿でごまかしているたくましき 路子

中七を考えて、且つ前後を入れ替えてみる

▽たくましき見せる努力の肩パット

○肩越しに笑顔で交わす朝の駅 美也子

本来添削はこのように、てにをは程度をもって良しとするのであるが、如何せんこ

のような例の少ないのが残念

▽肩越しに笑顔を交わす朝の駅

○年かさね肩の丸味も母に似て 三代子

▽年毎に肩の丸さも母に似る

○この肩に後の始末は重すぎる 富江

▽なで肩に後の始末がのしかかる

○肩の荷をおろし夫婦の旅に出る てる代

佳句の智加恵さんの句をご参考に

佳句

娘が嫁ぎ肩の荷おろし二人旅 智加恵

お神輿を見せに割り込む肩車 泰雄

肩の手を払って孤独噛みしめる 彩子

肩の手のぬくみへ言葉などいらす 志重

肩書を持った女に敵が増え 早智

手作りの肩掛け母の匂いする 日出子

肩書きが消えて気楽なはしこ酒 君江

肩書が鼻についてる粗大ごみ 郁子

肩叩き欠伸ばかりの窓にいる 子龍

(窓際をうまくまとめている)

肩書きが多くて名刺いそがしい 多哥由

(擬人法の下八がいい)

一徹の妻に淋しい肩たたき 忠男

(リストラは骨身に応える)

骨太の肩エリートにこづかれる 芳水

(上五がいい。進歩のあと)

肩書がとれてゆつくり靴をはく とよ子

(定退後の姿が彷彿と)

なで肩が女らしいと励まされ 八寿子

(正に実感句)

しなやかに生きて肩パットはいらぬ 幸枝

(さらりとした表現)

肩たたき窓辺の夕陽赤すぎる トシエ

(着想表現共申し分なし)

私の句

年金の肩に食い込む消費税

# 路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成九年五月号〜八月号

## 路郎賞候補作品

### 河内天笑

あきらめて夫婦喧嘩をしないだけ 榎本路児  
 王様のメニューへ加えたい鯛 青枝 鉄治  
 寄り添って痛み分けあう八十路坂 北川竹萌  
 通帳は年金を出す用事だけ 原 さよ子  
 七十の恋はスマレか菜の花か 田村きみ子  
 迫力で大阪弁が勝っている 川上 大輪  
 宇宙から来た弟のお嫁さん 鷺見 正子  
 涸れることあふれることのない清水 細川 稚代  
 新しい入れ歯でさらうドイツ曲 竹内 紫鏑  
 瓢箪のくびれを少し妬いている 川上 富湖  
 うわの空で聞けば小言は面白い 越智 一水  
 大部屋に病人のブロー人居る 古久保和子  
 借金も財も残さぬ死の美学 赤川 菊野  
 老いてなお死ぬことなんか考えぬ 橋本多哥由  
 年よりに無駄な物なしボロ溜める 浜本ちよ

### 小島蘭幸

魚屋も八百屋もみんな多国籍 川上 大輪  
 舞台では師匠の方がよこれ役 松本よしえ  
 はじめのはじめ人間もやわらかい 黒田能子  
 北の人北の形をして生きる 榎本 路児  
 鬼になるほどたいへんなことはない 大角 正道  
 一本を空けて昼からポカンポカン 肥後和香子  
 月も花もいのちもおぼろいとおしき 山本 半銭  
 恐山わが骨ならむ白き石 佐治千加子  
 断固たるフジモリ日本人より日本人 小砂 白汀  
 どなた様にも灰皿は出しません 堀 良江  
 しあわせなふりをしているふしあわせ 岩崎みさ江  
 わがままに生きて老いなど知りません 越智 一水  
 母逝き妻ゆきこの家に壁の多いこと 麻生アート

### 吉岡美房

傾いた家でも温い灯をともし 光井 玲子  
 大きな大きな貴男のシャツを着て眠る 小谷美ツ千  
 スキップをしながら春はやつて来た 川上 大輪

### 小池しげお

とてもいい一日だった歯を磨く 高瀬霜石  
 山だつておこれば自然発火する 川崎ひかり  
 自動ドアためらい癖が直らない 細川 稚代  
 一徹の骨の硬さが邪魔となる 北山 悟郎  
 白樺の絵にふるさとの路がある 吉岡きみえ  
 風下に立つと情けが身に浸みる 米田 幸子  
 曼陀羅の真ん中へんに母が居る 山本 半銭  
 生命線今の命はどのあたり 岸 桂子  
 雲を追ひ雲に追われるひとり旅 越智 一水  
 ほどほどに悟った顔で老いてゆく 上田俊路  
 ビリオドを打てずに今日も靴を履く 田中 透太  
 負けた日も同じ陽の射す窓がある 門谷たす子  
 酸欠の街から抜けて丘に佇つ 木村あきら  
 なだれ込むように縫った友の胸 石倉美佐子  
 くす玉を割る人汗を知らぬ人 辻川 慶子  
 辻褄が合つて疑い深くなり 梅田 宣司  
 手斧目を残して柱ゆるがない 林 荒介  
 節税の企みもなく鰯焼く 仁部 四郎

ふりむけばいつもうしろに居る母で

天正 千梢

子に見せる父の背中の中正誤表

吉川 寿美

何べんも頭を打って来た大人

矢内寿恵子

爪先を鍛える背伸びするために

川上 富湖

せり勝った椅子でひとりの風を知る

上田 俊路

妻の乱掃除洗濯ばかりする

玉置 重人

亡父の歳越したのが亡母をまだ越せず

吉村 一風

梅干しが旨いやつぱり日本人

川上 大輪

蝶になるまえをしつかり孫に見せ

内海幸生

家系図の隅でちいさく咲いている

木本朱夏

花びらが散ると私も不整脈

坂田和歌子

板尾 岳人

## 板尾 岳人

百歳に驚くなかれまだいのち

土橋 螢

腹立ちを入れる仏の火消しつば

乾 隆風

生きてよし死んだとてよし花吹雪

宮西弥生

味方にも隠しておこう縄梯子

舟木与根一

北の人北の形をして生きる

榎本 路児

天寿全う身じろぎもせぬ落椿

秋元 てる

急がずに生きてしきり切る句読

伊藤寿美

考えがついたか鶴が歩き出す

永田 俊子

木洩れ目をもらう大きな木を植える

岩崎みさ江

二十一世紀覗いてみたい豆のつる

野村 京子

遠吠えをしないか月が綺麗だよ

川上 富湖

煩惱もそれでよろしいとは羅漢 町田 達子  
袂紗ひとつむらさきの思慕たみこむ 佐治千加子

## 川柳塔賞候補作品

### 川 島 諷云児

私がわたしを喰う忘れもの

菅田かつ子

新聞がレインコートを着て届く

岡田 幸生

券売機お前も皺がいやなのね

徳山みつこ

スイッチポン ポン ポンで日が暮れる

川島 良子

昨日今日そしてあしたがきてほしい

古谷ひろ子

ご期待に添えないままでまだ夫婦

桑名 孝雄

ハツ裂きにされても笑う花名刺

越智 青園

極楽の余った風で昼寝する

大西 文次

不器用で右へ做えが出来ません

田辺 鹿太

反骨の気力も萎えた唐辛子

石原 靖巳

いい友といい酒酌んていい話

西岡 豊

白衣から母に着替える夜勤明け

篠原いつふみ

必ずと約束できぬ根なし草

山中 康子

似合っても似合わなくてもペアルック

猪森スミエ

捨てられる句もそれなりの自負は持つ

藤 ふうこ

## 福 本 英 子

鯛網にかかった雑魚が捨てられる 岸本宏章

コンピュータ金の工面はしてくれぬ 村上ミツ子

セーターをほどこいて過去を丸めとく 和泉見早子

丸を書く明日は今日より大きいぞ 藤ふうこ

妻が哭く子が泣く週刊誌が売れる 藤田芳郎

溺れたとだれも思わぬ金魚の死 石川 勝

悪の芽に誰かが水をやってる 村上久美子

長生きの予定表にはないおむつ 川島 良子

反論の余地たとある島流し 八木 芳水

老人が立つて老人座らせる 福岡 博利

へそくりが溜って笑い止まらない 大西 文次

ジャンボ機の中の運命共同体 藤田 泰子

輸入大豆らしいが美味い冷や奴 楠見 章子

肩書きが欲しいと思う痩せ蛙 安野案山子

## 榎 本 吐 来

喉のあたりで迷子になっている記憶

雨になりはっと息つく予報官 村上ミツ子

裏門をくぐったことを子は知らぬ 近藤春恵

一時間きつちり終るお葬式 篠原いつふみ

満期まで生きて不満の保険金 越智 青園

居酒屋に天下国家を置いてくる 大谷幸次郎

ウインクの片手拝みにまたやられ 一本勇太

嫁はんが種を播いてる長電話

野下 之男

豪邸に住んでも老人医療法

芦田 絢子

携帯に産声とどく深夜バス

古谷ひろ子

肩書は会長という世話係

川田 晋

忘れもの届けて貰うまで忘れ

井上すみれ

二時間も待って歳だというカルテ

和田和風

保証人ある銀行を探してる

軸丸 勝巳

おしっこを溜めてツアーのバスが着く

澤田 和重

## 宮口笛生

極楽は今がすいてる言われても

大西 文次

健康の部品揃ってまだ達者

山本 正光

壁の耳にも聞かせるちよつといひ話

村上ミツ子

昭和史に赤紙という人さらい

三浦 強一

養殖魚海の広さをまだ知らぬ

木村 親路

カプセルの色で生命の灯を点す

田辺 鹿太

ローン地獄わが家が重いかたつむり

石原 靖巳

脇役の生涯でしたきざみ葱

石川 勝

あと戻り出来ぬ道です急がない

武島ちよえ

新茶入れ白い時間の中にいる

木村 初子

子に残す道はきれいに掃いておく

塩路よしみ

戻りたくない時もあるブーメラン

傍島 克治

おしゃべりは昔のまんま姉の家

杉谷 一栄

工場で作ったような胡瓜買っ

大谷幸次郎

土壇場の薬一本は譲れない

芦田 絢子

## 小林 由多香

幸せは戦を知らぬ武者飾り

西村りつえ

満ち足りた今日がこんなに短くて

八木 芳水

北国の春へあかき痒くなる

藤田 芳郎

六月の花嫁となる雨おんな

田辺 鹿太

往復の切符がないと落ち着かぬ

立蔵 信子

七人の敵にいい顔して疲れ

清原 悦子

一人でも独りではない皆やさし

安芸田泰子

半分のキャベツ買うにも見比べる

村上ミツ子

中立の僕に火の粉が飛んで来る

安野素山子

亡母に似た顔が鏡の中にある

石谷 昭恵

ゆずれない位置にボタンの穴がある

大野 蒼流

内心は互いに老けたなと思ひ

稲葉 洋

父の日は自分で欲しいものを買う

乙倉武史

年金へ未だ生きてます証明書

仲井 素水

## 大阪川柳の会

とき 10月2日(木)午後5時開場

ところ サンケイビル本館322号室

題と選者 コースⅡ足立淑子△湊い△前

田咲二△踏む△宮西弥生△のん

びり△磯野いさむ(各題二句)

会費 500円 締切 午後6時

## 新同人紹介

富 永 敞子

— 薫風・直次推薦 —

松 山 まみ子

— 薫風・直次推薦 —

田 辺 正三郎

— 薫風・直次推薦 —

奥 村 しずえ

— 薫風・直次推薦 —

嗚呼

## 肝っ玉智子さん

黒川 紫香

一番頼りにしていた小出智子さんのご急逝を聞いた日は、三十八度の熱を出して翌日のお葬式にも参列出来ず、悶々と床で合掌するばかりでした。お許し下さい智子さん。

私が智子さんとお会いしたのは、川柳塔初期に当時の主幹中島生々庵氏心齋橋診療所の二階で、不二田一三夫さんが小谷葉子さんと編集を担当されて居た頃、しばしばお邪魔した時、見えていてお知り合いになりました。

それからは本社句会ではお会いしましたが余り親しくはありませんでした。その智子さんがお世話されていた双葉川柳会で、保津峡「ゆずの里」へ吟行があり正本水客君と共に誘われました。集まる者十四、五人、成程女性ばかり、心をときめかせて参加しました。

今思えば西出一栄、河野君子、鈴木節子、銀原千里さん等、中年の美人ぞろいでした。

その後、お互いに川柳塔の中堅どころとなりいろいろお世話させて頂きましたが智子さんのご功績が沢山ある中で特に、西尾葉先生の号令とはいえ、霊峰高野山で川柳塔大法

要を催し、死んだ後でも川柳家の拠所となる  
俱会一处「川柳塔碑」が出来た事は皆さんご承知の事と思います。正面切つてご意見

は申されませんが、内に秘めた御意思は計り知れないものがあり、この追悼文を書くに当り「肝っ玉智子さん」と題しましたような一つの事件が私の膝元で起こりました。

それは平成五年春、尼崎市小園公民館内で発足しました小園川柳会が丁度一周年を迎えましたので、会場近くの尼崎市ゆかりの近松門左衛門を記念した近松公園を午前中散策した後、公民館に戻り食事をして句会を開く趣向でした。極く内輪の催しで市内のいくしま尾浜の二句会から応援を得ても二十人位の集まりでしたが、一周年という節目なので本社から選者を一人来て頂くという事になり、智子さんをお迎えしました。

公園巡りを終え、会場へ戻り二階で食事をする段取りで、隣の小部屋に荷物を取りに私と智子さんともう一人が入った途端、ピタリとドアが閉まり鍵を掛けた覚えもないのに、ひねつても叩いても開かない。外から中から大声で怒鳴り合ってもテコでも動かない。館長が鍵を持って来ても駄目。荒っぽいのがドアを叩き潰そうと言い出し館長が青くなつて止めるシーンもあり、道路側には騒ぎを聞き

つけて近所の人が二階を見上げながらガヤガヤワイワイ。私が窓から覗くと野次馬の中に居たワンパクが「おじいちゃん頑張れよ」と応援してくれる始末。道路を挟んで向こうがビール会社の倉庫でいつも二、三台のフォークリフトが動いているので親切的な野次馬さんが運転手諸共借りて来たが、公民館と道路の間に溝があつてこれも駄目。リフトは上下するがクレーンのように前へ伸びない。

ワイワイ騒いでるうちに誰が知らせたか火事でもないのにブーカンカン消防車が梯子車を連れてやって来た。何の事はない梯子車が二階の窓へ梯子を掛けるといきなり飛び込んでドアを叩き潰して一件落着。事情聴取して消防車はあっさり帰ってしまったが、新聞記事にでもなりそうな事件でした。

感心したのはその間、問題の小部屋でチャリと扉に眼を移しただけで一件落着きで身動きもせず作句に専念されていた姿は、肝っ玉かあさんと言うより形容出来なかった。

智子さんいろいろと有難うございました。安らかに眠り下さい。

合掌

女丈夫を失い再りし日を偲ぶ

あの世でもひっぱりだこの智子さん  
失えば大きき目立つ人だった



# 川柳塔みちのく十周年記念大会

燃える津軽の夏

宮崎 シマ子

川柳とねぶたと

奥入瀬溪流と

高須賀 金太

川柳塔みちのく十周年記念大会は、八月二日弘前市のさくら亭二階大広間で、九十七名の参加者を得て開催された。

本社からは薫風主幹以下十六名の猛者(?)が、一日夜八時十七分寝台特急日本海三号で出発、約十五時間をかけて九八六・一キロを走破、定刻通り十一時五分弘前駅にすべり込んだ。改札口では、五楽庵氏をはじめ「みちのく」同人の方々の熱烈な出迎えを受ける。

大阪からの出席は、別途参加の三名を加え総勢十九名と、横浜から満秋氏外一名の参加。句会では、まず「思いやり」が七名の共選という珍しい形式でスタート。続いて、特別参加の森中恵美子さんの選で「うつむく」。主幹の選で「したたか」と、滞りなく進行。

総合得点一位は十位には、肥後和香子さんの立派な書が額入りで贈られた。

句会終了後、引き続き懇親宴となり、ご馳走に箸がすすみ、ビールと地酒の「じよっぱり」がどんどん空になっていった。宴会終了後十九名は、国指定重要無形民俗文化財でもある「ねぶた」を観にでかける。

ここでも、椅子が用意されているなど至れり尽くせりの歓待を受け、お礼の言葉もない。本当にありがとございました。

当日の秀句は左の通り。

微笑んだ薔薇は斬れない花鋏  
逃げ道の一つに拾う神を置く  
暑からう枢の妻へ扇子入れ  
マスターは背を向けたまま若いジャズ  
父のドア開かないように開くように  
慈悲菩薩母はりんごの皮をむく  
車椅子の難所まなこで押してやる  
笑うという知恵さみしくうつむいて  
お辞儀するかたちでしたたかに眠る

小鶴 健二 夕香  
みずの 雪州 隆樹 寿久 雨山 恵美子

陸奥新報の一部を引用させていただく。

「八月一日、弘前ねぶたが開幕する。三国志や水滸伝、日本の戦国時代などを描いた迫力ある大小の扇はヤーヤドーの掛声も勇ましく短い津軽の夏を駆け抜けてゆく。今年は大型扇五十台、組み六台、小型扇八台、担ぎ一台の六十五台が出陣し、昨年同様熱気あふれる祭りが展開されそうだ」

川柳塔みちのく十周年記念大会も懇親会も盛会のうちに終り、私達がねぶた祭りを見に行く時間がきた。五楽庵先生始め地元の方々が手配してくださった車で、弘前の目抜通りへ向かう。帽子屋マルヤマ様の御好意で見物の特等場所に椅子を並べてくださった。青森の動に對し、弘前のは静と聞いていたが一番先に来たのは二階の大屋根まであるような大太鼓。パシリパシリと長い撥で叩く豪快な音は、地球上のオゾンも払い除けるかと思つた。それに和するようには小太鼓・笛などが子供、若者の手によって続く。各町内、各グループ、老人から幼子まで熱狂的に綱を引





関西空港にて（8月3日）

く。お囃子掛声等、持ち場に精いっぱい頑張っておられた。こちらでも椅子から立上がり、大声援と大拍手を惜しまない。特に森中恵美子先生は打扇片手に双手を上げての歓声、お陰で扇を二、三回廻してくださる。扇といつても道幅一ぱい高さは大屋根に届きそう。扇の前面を鏡絵、後ろの絵を見送りと教えてもらう。囃子方の男性が笛をくさきり吹いてくださったのも二度、三度。

全部見るには十二時までかかるので、名残惜しいが早目に切り上げ、河豚（なまぐ）という店で御馳走になる。海の幸の数々、特においしかっ

たのが掌ほどもあるイワ牡蠣。ミズも初めて頂いた。落に似ているが違ふ。歯切れがよく酢の味に合っていた。蛇草という名だそう。楽しかったお祭りに十分酔わせていただき五楽庵先生始め、地元の方々の大変なお心尽しの賜物と厚く厚くお礼を申し上げて、筆をおきます。本当に有難うございました。

## みちのく見るべ記

### 高杉 鬼遊

弘前ねぶたの興奮の一夜が明け、三日の朝八時に出迎えるマイクロバスでホテル・ニューレストを立つ。車は弘前から一路、浪岡から五所川原と緑の中を走る。国道一〇一号から七号線に入り、三内丸山遺跡に到る。巨大な復元掘立建物は縄文人の祈りを天に届けるようだ。現場の柱穴は約二メートルあり、朽ちたクリの柱材が底の方に見える。復元されたのは六本柱だけでない。大小竪穴住居や掘立柱建物（高床倉庫）があり、一体の集落を形成し見る者を想像の世界に誘う。地方文化を叫ばれる今、これらの公園遺跡ゾーンは青森県の大きな歴史遺産である。八時五十分出発、雲谷山（もや）へ向って走る。なかなかま

どが色づく。

十時、萱の茶屋で「かやの三杯茶」をよばれる。案内の五楽庵氏の説に「一杯で十年、二杯で二十年、三杯で死ぬまで生きろ。」これで死ぬまで川柳ができる。

一〇三号線八甲田山の麓に記念碑がある。

これは明治三十五年一月二十三日、歩兵第五聯隊第二大隊、神成文吉大尉以下一九三名遭難の碑である。その遭難状況を雪中に屹立報告した後藤房之助伍長の銅像もあるが時間の余裕がなく見る事ができなかった。

三九四号線、萬川から奥入瀬渓流に到る。

車は渋滞するが車内はワイワイガヤガヤ賑やかである。ヨシモトの演劇よりも面白い。手から手に渡る車内の袋菓子、お菓子を頂くは言いたいことを言うは正に移動サロンである。

十二時五分、子の口乗船、十和田湖遊覧である。半島の見所や蜂の太郎伝説等、船内放送の案内を聴くも、窓側の席でなかったので見ることができず甲板に上る。さすが十和田湖の水である。十和田湖よみな酒になれ旅人へ。路郎先生の句がよきる。第3十和田丸下船、レストランたかきで豪華な昼食、十四時出発、車は三沢空港に向う。車窓にのうぜんかずらが咲き競う。十七時三沢空港着。五楽庵主幹 みちのく皆様 さようなら。

# 本社 八月句会

八月七日(木)午後五時半

メンスファツションセンター

夜半の激しい雷雨から明けて七日は、どんなよりとしたむし暑い一日であったが、八十九名の参加と十一名の投句により、八月句会は定刻開催された。

はじめに六月二十二日亡くなられた理事長小出智子さんに黙祷を捧げ御冥福をお祈りする。

お話の時間は高須賀金太氏の担当。少し趣向を変えて、氏の愛好するラテン音楽を解説しながらテープで聞かせるというものであった。ラテン音楽と言えば広範囲なので今回はメキシコの絞る。曲はロストレス・ディアマンテスのシェリト・リンド他五曲で、おなじみのベサメ・ムーチョ、ク・ク・ル・ク・ク・パロマなどラテンムードにすっかり酔った三十分であった。

初出席は大阪市の清水絹子さん。

月間賞は吉村雅文氏(寝屋川市)に輝く。

(司会―隆盛)(記名―月子・弥生)

(受付―たもつ・寿美子・かすみ)

## 席題「洗う」

田頭良子選

愛しくて指を一本ずつ洗う

顔洗って出直しますくじけない

幸せは今日も洗える対茶碗

洗車する水をもったいなく思う

字が好きな妻丁寧に筆洗う

髪洗う女夢二の絵となつて

下宿ではいつもパンツを洗つて

洗い熊のように何でも洗うかせ

新緑のシャワーでわたし洗われる

気まぐれに抱く人形を丸洗い

カラオケの気分で終い風呂洗う

手八丁の姑の茶碗二度洗い

うちのボチ何年も洗ってません

少々の写経じゃ心洗えない

腹立てて洗つてるのはよくわかる

御来迎にこころ洗うてめしにする

目を覚ます今日も生きてる顔洗う

ハミングで洗う家族の皿がある

洗札を妻から受ける二日酔

へそくりをトコトン洗うことはない

今日の傷洗って今日の幕下ろす

住む人の心が見えるお手洗い

無理やり握りしめた手をすぐ洗い

手洗い顔を洗って文句言つ

夏休み朝の手洗い混んでいる

僕よりも先にベットの背を洗う

美代子

頂留子

洋

洋敏

金太

紫香

ますみ

とし子

昭子

雅文

一步

絹子

楽生

満州

義

義子

武庫坊

希久子

とし子

正坊

英子

高栄

美代子

義

しげお

桂香

晴れるとすぐに洗濯したくなる  
腸を洗って腹の黒さがとれました  
地球儀を洗うと鮮やかな緑  
洗いざらい話してわたし見て貰う  
朝シャンをだんだんしなくなり二十歳

佳

汚れた眼洗いに覗く絵画展

心洗うひとことだったありがと

沙羅の花 思いすごしを洗いおり

ひとりで毎日まわる洗濯機

一枚の鱗を洗う日の法話

人

去年から手洗いはじめにする

地

耳の裏洗い忘れた負け戦

天

ほんとに川で洗濯したのだよ

軸

ほとばしる水で疲れた目を洗う

## 兼題「忘れる」

川上大輪選

一つずつ忘れていつて生きてる

忘れたら損すること覚える

山頂に着けば全てを忘れる

忘れたい傷に他人は触れたがり

忘れたことは忘れぬ苦労性

飽食のつけを忘れた血糖値

忘れ癖ついた男に貸した金

なんのメモだったのか考えている

重人

シマ子

西湖

英千子

洋

グン吉

みつ子

信子

森子

信子

朱夏

保州

良子

幸生

清史

照子

メ女

靖巳

狸村

しげお

重人

記念碑のあることさえも忘れられ  
折角のメモを忘れた披露宴

忘れても忘れなくとも納税書

日本史の汚点忘れぬ核の傘

ドロップの缶へ忘れた僕の夢

約束の好きな小指の忘れ癖

変換キー押して忘れるあなたの名

過去を忘れないとボウセンカがはじけ

札入れを忘れ彼女とカキ水

妻がいることを忘れて走り出す

進化論シッポに重い忘れもの

いつの間にか下駄箱の傘減っている

アロハ着て歳を忘れることにする

行楽地父ちゃんという忘れ物

大臣の名前はすぐに忘れまます

新刊書飢えを忘れたことがある

白雪姫は小人も森も忘れかけ

蟬しぐれ和尚法話を忘れかけ

あのことは忘れてあげろ金貰して

もの忘れ指の先から老いてゆく

忘れたがり笑ひ合ったりして夫婦

酔うとすぐ嫁さんのこと忘れはり

坊さんが来るまで仏忘れられ

夫婦茶碗の音を忘れるほどヤモメ

二つ聞き一つ忘れてる迂闊

歌詞すし忘れたままのわらべ唄

佳

忘れるとやさしくなれる嫁姑  
忘れない言葉耳搔きで捨てる

洋

度

子

論

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

忘れたいのに修正液がお喋りで  
領取証もらい忘れたことはない

くやしさを忘れぬうちにバネにする

忘れてはあげない指切りのひとつ

タイマーがなんで鳴ってるのか忘れ

忘れたら出发点に立ってみる

軸

と忘れを思い出してる五十音

兼題「発見」

池

森

子

選

正

子

正

子

正

子

正

子

正

子

正

子

正

子

正

富

湖

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

発見のない日でぬるい水を飲む  
寝たきりになると発見ばかりする

お隣の猫が第一発見者

幸せの風を発見乗りました

発見をびっくり箱に詰めている

偶然に発見をする目の高さ

円周率の発見数字なお続く

化石の森で私の奥歯見つけた

頑固親父の書架にひっそりあるヘッセ

猫の目の位置で獲物が動いたぞ

盆踊りの輪に発見がある二人

敵機発見妻とばかり街で会う

発見は亡母の文箱の中の闇

土壇場で泣かない妻に惚れ直し

発見があるから明日のドア叩く

生きていることが発見だと思っ

戸籍発見土に還るまで父・母よ

おふくろのよさを発見した日記

肩書の数だけ敵を発見す

発見は女王蜂がよく肥り

ニュートンはりんごで僕は体重で

夫の嘘を発見した日の勝利

再発見母を許した冬母

ビー玉が転んで家が下ってます

発見をしたのは新しい私

詩ごころをやつと発見したわたし

軸

軸

美

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

兼題「マンション」 木本朱夏選

一千万値引きマンションさあどうだ  
 マンションで規格通りと言つくらし  
 過疎を出てマンションに住みこも過疎  
 マンションの気楽さ狭さ住み難さ  
 マンションの扉刑事事も信じない  
 長旅もマンション住居なればこそ  
 マンションの回覧板が戻らない  
 ワンルーム癒えぬ被爆の老いひとり  
 マンションがふるさとなる盆踊り  
 億ションに住んで屋台の味が好き  
 高層マンション話し相手は空ばかり  
 高台のマンションに住む高い鼻  
 マンションの夜景を母に見てもらう  
 マンションが馴染めぬ母の日和駄  
 マンションを買いみの虫になっている  
 マンションのスイッチ過労死せぬよう  
 ワンルーム独居房に似る味気なさ  
 マンションへ未来のファール寄つてく  
 マンションの死角向日葵背くらべ  
 マンションの客で賑わうモーニング  
 こつそりと借りたマンションから序章  
 マンションから男が持ち出すゴミ袋  
 前後左右上下にマンション耳が有る  
 マンションに移り仏ははなさない  
 草引きに追われマンションにあこがれ  
 マンションの窓から幕地がよく見える  
 マンションに小さな顔のなすトマト

マンションの余生下シャツまだ若い  
 孤独から孤独へマンションのエレベーター  
 蔓なしの朝顔が咲く娘のマンション  
 どのベランダもカタカナの花咲いている  
 高級マンション洗濯機はならしい  
 ベランダを鳩と共有して暮す  
 高層マンションに住み仙人とはなれず  
 猫ばかり描いてマンションの孤独

佳

マンションに独居老人会がない  
 マンションも住人も古い葛が這う  
 マンションを買つたら嘆く土踏ます  
 マンションへ女はいくさから帰る  
 マンションを睥睨 からは朝を鳴く

人

マンションの窓自由たり孤独たり

地

マンションを見上げる老いた鬼瓦

天

十階の廊下であそぶ三輪車

軸

表札もなくマンションに住み慣れる

兼題「現役」 河内天笑選

年金で食えず現役まだ続き  
 現役のつもりで起きる六時前  
 九十五で店番してた天牛さん  
 現役はいいねボーナスくれるから  
 三代が揃い演ずる名歌舞伎

現役の向こうへつづけ持久力  
 七十二まだ現役のおさんどん  
 還暦の祝い現役最後の日  
 現役のうちは笑わぬ鬼瓦  
 死ぬまでが現役父の農作業  
 土に生き定年はない老父の鍬  
 現役のまま逝かれては困ります  
 昼酒を飲む現役の接待費  
 顔パスで行けた現役なつかしい  
 ぬか漬に祖母現役をゆずれない  
 現役の美学ネクタイはなさない  
 現役の顔がいばっている名刺  
 真夏でもスーツ着込んで苦勞さま  
 現役と今さんばつの数が減り  
 年金を支えて現役疲れてる  
 現役を離れて知った胃の軽さ  
 現役を退いたら妻が手抜きする  
 日焼けて停年のない網を打つ  
 現役の姑にキッチンさしずされ  
 喜寿迎え隠居が出来ぬ小商い  
 現役の大きな傘に庇われる  
 現役で喜寿越す幸と淋しさと  
 生涯が現役だったデスマスク  
 呆けてきてまた現役の頃を言う  
 何もかもまだ現役と老いの見栄  
 ああ女いつまで主婦は現役で  
 現役にしては吝嗇な縄のれん  
 現役をおりた軽さと寂しさと

佳

次の職考えている後すこし

ひと夏の現役蟬の精一杯

小企業なかなか社長やめられず

定年後水虫だけは現役だ

朝の駅たたかう顔が並んでる

人

働いているからその日曜日

地

現役でまだ狩人の目をしてる

天

稲妻のようなひらめき妻の勘

軸

現役のバリバリというお弔い

兼題「稲妻」

橋高薫風選

黙示録の一頁から稲光り

稲妻に念仏が出る母の癖

稲妻の形で目から火が走る

想い馳せる心稲妻にもなつて

稲妻が走ると浮ぶひとが居る

稲妻もあなたの愛も一直線

稲妻にチャンスをもらう夏の恋

こめかみに稲妻ためている女

稲妻に打たれたような恋だった

稲妻が心の嘘に突きささる

夏やせを串刺しにする稲光り

稲妻を利用してきぬかエネルギー

弱そうなところへ稲妻落ちてくる

美代子  
柳弘

隆盛  
いゝ

保州

稚代

山久

天笑

朱夏

靖巳

高栄

富湖

佳秋

信子

朱夏

いゝ

一風

鬼遊

雅文

大輪

稲妻が止んで小言がまた続き  
稲妻にぼくの邪心が透けて見え  
稲妻が走った人と暮してる

いなびかりしても食べてる老夫婦

へソ出シルク雷さんに都合いい

白竜が天壇駆けた北京の夜

稲妻は竜のウイंकかもしれない

ヤマトケルの剣稲妻を呼び寄せる

人間の墮落稲妻糾してる

下界では稲光りする比良に立つ

対岸で見る稲妻は素晴らしい

女のひざ枕に稲妻を見てる

稲妻へ古里偲ぶホームレス

稲光り子守りの姉をまた泣かせ

稲妻とB29は聞き分ける

伏魔殿を暴いてほしい稲光り

地球汚染鉄鎚下す稲光り

過去未来瞬時に写す稲光り

佳

稲妻に刺されて恋の虜なり

稲妻へなますのひげはあわてない

とつとつと話す彼から稲光り

稲妻が走る不倫があばかれる

稲妻が走り男がすてられる

人

稲妻の先に宝が埋まっている

地

稲妻が失樂園を貫きぬ

幸生  
剛治

義子  
東雲

萬的  
正坊

悟郎

千歩

紫香

佳秋

柳宏子

しげお

保州

悟郎

武庫坊

たす子

英王

満州

章久

鬼遊

正子

美房

天

稲妻へ盲導犬は伏せている

軸

稲妻に堅穴住居跡遺跡

(清記一希久子)

雅文

薫風

大阪文化祭川柳大会

とき 11月29日(土) 午前11時開場

ところ 大阪市中央公会堂

(地下鉄・淀屋橋または北浜)

宿題と選者(各題2句)

「城」

「他人」

「時事雑詠」

「外野」

「海」

「風」

席題(2題・当日発表)

◎午後零時半出句締切

会費 1000円(作品集代含む)

賞

各題秀句に知事・市長・府・市

教育委員長から「川柳賞」授賞

主催

大阪府・大阪府教育委員会

大阪市・大阪市教育委員会

# 在地物語

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

天の川神戸に太陽祈る孫  
余命知りたくて天の川うろうろ  
打ち上げた火花に残る天の川  
天の川に忘れた星が浮いている  
ひと恋えばたちまち速し天の川  
夕方に飲みに行く癖についている  
あの頃は過疎とも言わず寺の鐘  
喜びに限りあるよう陽が沈む  
夕方の雷雨見事に虹残す  
浴衣着て下駄に慣れない娘の歩み  
亡き友をしのびつ羽織る赤い服  
水着着て八十路の夏や日本晴れ  
浴衣着は櫓太鼓に誘われる  
着る真似でそつと形見に手を通す  
着る物で言葉つかいを左右され  
鉄冷えの街作業着が汚れない  
偶然も運と不運の別れ道  
白磁の皿に嘘を盛るのは気がひける

富世 伊三郎 向西 比呂志 正子 薫 白溪子 昭三 渉 吉太郎 昌子 千恵 愛 一 笛 紫香 キク子 歌子 夢之助 武庫坊

ニンマリと心許した訳でない  
和解しようお月様が丸くなる  
転んだ老婆をきよんと見てるキリスト  
黄昏れて炎を生むこともない螢  
秒針がチクタク余命を削ってる  
満ちてなお女ガラスの靴を待つ  
カタカナの花で埋まる植木市  
トンボ眼鏡に疲れた蝶が来て止まる

澄子 年代 芳子 ハツエ 久子 義芳 美子

いつもの景色今年最初の蟬が鳴く  
今朝もまたいつもの人に会釈する  
冷蔵庫にいつも玉子のある安堵  
いつものとこで犬がおしっこする散歩  
母病んでいつもの音がせぬ厨  
はつとするいつもの人に今朝も会う  
音一つせぬというの恐ろしい  
少年法裁けぬ罪が多すぎる  
ベレー帽無職に合っているベンチ  
梅雨晴れへ蟻には蟻の用があり  
線香花火仲直りした二人です

富喜子 春蘭 哲子 萬的 石舟 てる 正坊 柳宏子 白溪子 しげお いわゑ

水滴の光って雨あがりの音符  
朝顔の今日は何色露光る  
グラス光るバーテンに見る心意気  
梅雨晴れ間若葉がきらり裏がえる  
往復切符買うと予定がよく変わる  
故郷捨てた片道切符に夢を賭け  
地獄極楽三途の川で買切符  
薄っぺらいけどアフリカへの切符  
配給切符無茶な戦争思い出す  
来る来ない来ると信じて待つ切符  
明日あると信じあしたの切符買う  
軽い軽い切符で天国へ発とう  
駆け落ちをさせる切符を二枚買う  
買うやつがおるから闇で売る切符  
手放した毬の行方よ青嵐  
大空に放つと虹となる火花  
放たれた自由の中にある孤独  
呪縛から少年を野に解き放つ  
言いたいこと言ってこころ開け放つ

涼子 トミエ 絹子 静子 義子 江美 透太 文 故道 嵐 佳秋 風云児 求芽 紫香 曙蝶 みつ子 房子 澄子 鹿太 能子

生きざまを書くにはうすいHB  
鉛筆がカタカタと鳴るランドセル  
消しゴムでけされてしまふ鉛筆よ  
鉛筆で哀しいいじめ訴える  
調子出し鉛筆の芯丸くなる  
6Bの鉛筆で書く右ききがり  
街角で逢えるわたしの赤い糸  
友情もここまで街はこざかしい  
人も家も変わらぬ馴染め街となる  
生きて行く街だ目玉を考える  
街角にぬくもり誘うおでんの灯  
街へ来て妻の財布が軽すぎる  
取りやすい位置にエプロンもある  
タカラジェンヌ エプロンよく似合う  
日曜日今日エプロンはパパがかけ  
エプロンの裾へ理不尽仕舞いこみ

桂子 明子 登志子 房子 満江 蛭 きみえ 雄々 清子 きみ子 芳枝 午朗 日出子 鶴丸 早苗 太泡

エブロンは我が家の暮し知っている

登美子

エブロンが欠伸している均等法

知恵子

ライバルが上手に泳ぐ今の椅子

米子

見栄っぽい泳ぎを披露する金魚

畔

反抗の海へ少年泳ぎ出す

寿美子

泳がせて反応を見る奴隷

友子

濁流を泳ぐ幼女が親を恋う

茂美

朝風呂へ昨夜の噂泳がせる

義良

手鏡に口説かれ皺が少し減り

静江

ある日手をじっと眺める孤独な目

みえ

金星へ手刀ひときわでかく切る

静恵

手を振って別れた母が小さくなる

与根一

手も足も出ぬ正論を温める

町紅

戦後史へ銃を握った手も老いる

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

梅を干す老母の戦争まだつづく

朝子

戦争を語るぬ父の八月忌

恵子

きな臭いくさが匂う世紀末

弘直

戦争を知らない子供はや六十年

昭二

金で非難浴びつつお付き合い

信博

罵声を浴びる蛙の面になつておく

度

水浴びをした頃徳富木のたらい

賢子

スポットを浴びて再起の舞台踏む

一風

月光を浴びて懺悔の道歩く

萬的

喝采を浴びてる猿の無表情

春子

浴びるはど飲んで修正する軌道

柳伸

苦勞した汗は世間が知るところ

宏

父の汗母が静かに拭いている

弘一

明日へかく汗惜しみなく惜しみなく

洋

今だから言うが冷や汗ものやった

頂留子

少年の汗は心をかきたてる

美幸

汗拭く夾竹桃は花盛り

治也

予言者と言いつてから狂い出す

三男

予言通り妻が荷物をまとめ出す

とし子

バンドラの箱から予言はみでてる

隆盛

自信のない人を捉えている予言

剛治

人間の弱さへ人間の予言

欣之

切株へ父の予言は当り出す

たもつ

一番近いあしたに賭けてみたい運

泰

道遠し明日は朝日と歩きだす

シマ子

明日開く蕾に迷う花鉢

ますみ

早寝して明日はきれいな絵を描こう

夕花

また明日軽い小さい嘘一つ

柳宏子

芽を出そう出そうと明日の方へ向く

森子

はびきの市民川柳会

荻田 絢子報

古希迎え裾野広げた趣味ひとつ

たけし

支柱ない朝顔が地に這って咲く

泰子

カレー作りそろそろ留守になる知らせ

俊男

妻の名が小さく載った同人誌

晋

ペランダのみどり眺めて気を癒す

昭平

税金で足らずバクチでまきあげる

専平

父の日に父の点数つけてみる

敦子

ない知恵を使い果たして考える

一壺

身の内の小さな鬼を追い出せず

美代子

はしばしに母の論しが効いてくる

辰子

上役がさとされている社長室

志洋

論しても世代のギャップ埋め切れず

昇

まずほめてゆつくり論す老眼鏡

みつこ

掘り下げて論せば理解できるだら

金太

何もかもすっかり忘れ寝るとしよう

四三郎

すっかりとスリムになつて病み上がり

美喜

嫁が来て息子すっかり気が変り

キミ子

ふくませる乳房すっかり母の顔

絢子

ひよつこのすべてをおかめ知りつくし

重人

すっかりと欺されましたお人好し

利武

すっかりと私を変えたのはあなた

悦子

地獄みた男すっかり低姿勢

ダン吉

すりガラスうっかり油断したヌード

庸佑

砂浜の美女を裸にして眺め

かつみ

成人祝い晴れ着脱ぎすて撮るヌード

忠広

ヌードヌードヌードを追った青春譜

吐来

佳句地十選 (8月号から)

叔山 隆盛

自転車で朝一番の風を切る

高千 盛

七十のロマン電池を入れ替える

章峰 枝

もめ事が嫌で置いてる車間距離

よしみ

梅雨空へあと幾きのない漱洗う

一風

旅に来て許容範囲が広くなる

サト子

方言で交わす歪よく動き

四郎

億の金抱いて疑心の森に棲む

アサ

ひと皿に母はバセリの役でよい

悦子

絵日傘を回して恋を呼んでいる

子龍

ビエロの服を一枚入れてある靴

あずき



裸婦像にいたずらしたい手をひねる  
ヌードで誕生ヌードで死にたいな  
メーデーも町工場は汗をかき  
メーデーに声援送る鯉のぼり

### 川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

梅雨晴れに着てるシャツまで脱がされる

ダンジリの屋根で男は夢を舞う

子育ては目を放さず手を放せ

核心をつかんではない女

合同の葬儀悲しい梅雨末期

暴れ梅雨青春無惨土石流

梅雨晴れ間折つています稲の出来

梅雨冷えへ身籠つた娘をふと案じ

梅雨明けてからの雑草逞しい

三面鏡わたしの影も梅雨になる

トタン屋根に雨の交響曲を聴く

屋根裏で夢を育てていたアンネ

大屋根の下でもやしがよく伸びる

父がいて子がいて温い屋根の下

一つ屋根姑と情けが通い合う

葦屋根の下で飛躍の時を練る

産んだのは女育てたのも女

友情を育む酒がまた美味い

コンビニで育ち心に穴がある

北風に揉まれて育つ太い胆

子育ての母の枕は眠らない

子沢山育てる母の泥まみれ

別姓になっても一つ屋根の下

りつえ  
敏  
洞庵  
伴子

鉄治

さち子

三男

輝子

愿

吞天

豊太

稚代

精子

栄美子

和重

君枝

公子

紀美女

富美子

千寿子

大輪

金太

富湖

泰子

めぐみ

高夫

保州

少年を育てる器ひび割れる  
核家族玩具のような家並ぶ  
核抱かせ立派な真珠夢に見る  
真ん中で母が能取る核家族  
核家族いつも娘は里帰り  
部屋鍵かけて心に核をもつ  
核家族独り歩きの頼りなき

### 京都塔の会

松川

杜的報

淡々と天引きで買ういい暮らし

器量天引き根性悪との噂

善玉のかびが美味しい味噌つくる

従軍記の微そのままにしておこう

呆れるのは象の方かも知れぬ

腐食するままに伸び放題の爪

呆れ果てたような男が家にいる

ひたすらに生きて呆れる事ばかり

老いの坂急所は医者に預けとく

愛の釘わざと急所を避けて打つ

総会屋急所外したことがない

ライバルの急所押さえている余裕

揉め事の急所となった花名刺

折り終えて鶴一匹にある急所

留守番をたのまれ昼寝のままならず

ガラス張りの天井地上と錯覚し

尾を振って犬すれ違ふ青葉道

幸せは今年も二人菖蒲湯に

送りついでに言い残したとつてゆく

寿子  
萬的  
美子  
利治  
ふみえ  
佐代子  
英子

圭坊

百合子

波留吉

杜的

京子

磯

芳子

求芽

吉之助

紫香

諷云児

白溪子

友照

てる

笑子

達子

春蘭

武庫坊

年代

ほととぎす鶯に励まされる画帳  
切り返す言葉はつねに持っている  
心にも微生えてくる梅雨を病み  
かび臭い暮らしの知恵に救われる  
熟年のおとこが選ったカビの彩  
反抗期親の言葉は微が生え  
呆れはて言葉もつげぬ子の無礼  
ライバルの急所押さえてから強気  
末席の一声急所突きささる

### サークル檸檬

小林

一夫報

哀しみのひとつ転がり霧の街

これれやすい影となり歯医者椅子

野菜サラダに押しつけの愛を盛る

もつよいよそのうち過去になることだ

書道展少うし迷った顔で出る

迷うのもまたよし生きている証

迷い道いつかあなたに逢える夢

迷い解け急に進んでみたくなる

迷ったら静かに風の音を聞く

旅に出て迷いは深くなるばかり

### 岬川柳会

八十田洞庵報

はん押ししてまだ迷ってる保証人

0157気にながらのサラダ鉢

食欲をサラダで満たす腹の虫

まだ若いもう年ですよ使い分け

事故を見てハンドル握る手に力

美穂  
水客  
飛鳥  
英一  
とし子  
福子  
巨詩  
庸佑  
高栄

ただし

一夫

薫

希久子

房子

智恵子

みつ子

あずき

いわゑ

正坊

薫風

里子

年子

みやこ

幸子

孝子



迷わずについておいでよプロポーズ  
散々に迷ってチャンス逃がす縁  
残りものサラダばかりのバイキング  
ゆっくりと愛と妬心を盛るサラダ  
誉めてから妻がサラダを食事毎  
ばあちゃんはいい塩梅とサラダ取る  
ロブスターサラダの高値手が出せず  
カニサラダ最後に野菜残るだけ  
サラダでも恐くて出せぬ生野菜  
神様も迷っているのか見え隠れ  
まだ女明日着る服を迷って  
久しぶり握り合う手にときめいて  
食事毎サラダサラダと責められる  
うつぶんをコショウで晴らす夏サラダ  
くす野菜盛りつけサラダ出来上がり  
胃カメラに遠慮サラダにしておこう

川柳塔鹿野みか月

土橋

玄関の花が曇さに吐息つく  
印象はまず玄関の応待から  
玄関の貌が温うて寄りやすい  
この城の迎える場所に気品充つ  
別姓の玄関天守閣ふたつ  
玄関を出るとおとこになる親父  
玄関をあけると犬が吠えかかる  
ライバルがありやこそ意欲湧いてくる  
こんこんと湧く名水のもつほこり  
夏休み茶の間を沸かす孫がくる  
瞬間に沸くほど燃えて馬鹿をみる

みつ子 信博 浪速子 正美 悦子 庄六 優加 とみ 令子 寂子 ミチエ 鉄男 ユミ子 ヤエ 洞庵 螢報 野草 弘子 美恵子 茂 忠良 宣子 はるお 菊乃 武子 かつ乃 実満

雑木林からおいしい水が湧く命  
初産の欲びそして母乳湧く  
回転ずしさまさま食べた皿がある  
人間模様さまさまな終をみる  
さまさまな行儀姑から教わった  
様々な苦難乗り越え祝辞いう  
幸せは人さまさまの価値を抱く  
鹿野湾そばがうまいと寄ってくる  
気がつけば湾のひとつは落し穴  
漁火が湾いっぱい絵を描く  
東京湾旅の夜風が眠らせぬ  
決断がつくまで湾に立ってみる  
子供でない大人でもない少年怒る  
条件をつけてボンチン肩叩く  
子も走る負けてなるかと武者ぶるい  
少年に少女に玄関がひろい  
庭石にわたしの詩を彫っておく  
石に木に俺のころを彫っておく  
西本願寺経由の浄土行きがある

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

この首を宥めすかして五十年  
笑顔でもカメラは心映し出す  
干拓の是非を映している湖面  
子のしぐさ映した親が目をみはる  
三面鏡シミは数えぬことにする  
ファッションが古稀になっても目に映る  
流行を映す雑踏からのがれ  
背を曲げたわたしを映す水たまり

くに子 孔美子 節子 みさ子 八重子 公子 孝男 久枝 和子 季芳 智恵子 きみ子 汲香 隆風 陸子 諷人 幸枝 喜志 螢 玲子 時子 蘭 寿々子 天雀 晶子 文子 保子

内面を映す鏡を磨かねば  
バラ色の景色ばかりが目映る  
陽を斜め美人に映るコツがある  
今映る鏡の顔よ本物か  
二度とない今を大事にやきつける  
シャガールの窓に映ったのはどなた  
桃色や黄色を映す青い刻  
井戸涸れて太陽も月も映らない  
夕映えもやがて疲れてホツとする  
油断して心の隙を映される  
水溜り月を映して踏み込めぬ  
白壁の崩れに映す昔の絵  
虹を映している雨垂れのひと雫  
自分史を映せば伏せ字多くある

恵子 八重子 瑞枝 春枝 富美子 ゆき 正子 花子 ふみ 亜弥 美世 荒介 千代 日枝子

城北川柳会

吐田 公一報

ペットにも言いたい事はきつとある  
針と糸持つて娘の家に行く  
気の毒と思う自分に近ごろみる  
能登の海晴天にのみ島近し  
驚きは女の顔に眉がない  
モンゴルの母は海にも手を合わせ  
八十坂紅うすく引きカバースる  
母さんは笑顔で家族守ります  
お気の毒あかの他人がいう言葉  
商品化されていません素顔です  
白い歯が光り拘りなく別れ  
いたずらに時を過ごして残る悔い  
人情に負けて損した日の笑い

あき子 静枝 あきよ 美代子 春蘭 政子 登美子 トヨ子 史風 睦子 満津子 久留美 扇帆

淋しさを癒してくれたベットの瞳  
都市砂漠石のかわりに蹴った缶  
素晴らしい字を書く友の筆不精  
思い出の時計は逆に回らない  
逆境を乗り越えてみる青い空  
さわやかな笑顔に惚れてゴールイン  
豆ごはん五月の宵の華やかさ  
気の毒に甘えるもんな雑草の意地  
その顔が僕をこんなに悩ませる  
男には女の知らぬ顔がある  
逆境に耐えた女の束髪  
空気のようなものでどうも寝される  
最高の顔はあなたにだけ見せる  
甘言にうっかり乗った薔薇の悔い  
半世紀添った歴史の照り曇り  
子の胸に風穴明けたベットの死

川柳大阪

坊農 柳弘報

高 栄 あやめ あい子 昭子 寿美子 八重 典子 だし 倫子 白峰 千歩 朝子 達子 一枝 公一

鮮やかな新緑ブナの保水力  
トラぶったあとは無言の行に入る  
鮮やかに転身夢を持つ若さ  
土俵入り今日の相手を供にして  
鮮やかなネオン道草したくなる  
母さんの工面が見える八宝菜  
女関に針のむしろがある予感  
トラブルへ人の情けが後を押す  
鮮やかに嘘一つ飲む喉仏  
夜の灯が鮮やかに生きている証  
どうにでも工面して来る酒の席  
妻帰宅いっせいに動きだす  
鮮やかに背くと誰も気づかない  
老人大学先ず君が代を歌います  
南海のいくさを忘れないブルー  
鮮やかな赤で女は街泳ぐ  
工面する才覚嫁はんには負ける  
鮮やかな答えをくれたのは他人  
トラブルの兆し地球の温暖化

川柳ささやま

酒井

靖子報

川 童 酔舟 雅巢 本蔭棒 鉄心 朝子 比呂志 希久志 まふ志 まつお ダン吉 笑風 三十四 金太 洛醉 柳宏子 重人 柳弘

一口の酒にあしたを養って  
屑かこの屑ときとして光りだす  
屑入れに今日のドラマが捨ててある  
無口でも心が通う血の絆  
いたわりの心が通う車椅子  
夢一つ抱いて点した家族の灯  
愛犬が家族の顔でポーズとる  
小包は家族みんなで確かめる

お金では買えぬ値打ちを友がくれ  
通い慣れた道にもあった落し穴  
知らぬ娘に傘をさされて青を待ち  
子の夢が大きく傘がしまらない  
値打ちなど要らぬドングリの輪になろう  
好きだから通っていますピアノ塾  
三代の笑いが絶えぬ低い屋根  
相合傘妻と歩いたことがない  
気が通う一で五を知る夫婦箸

ほたる川柳同好会

井上

直次報

一 衆 八重子 素水 とみ子 つや子 和子 芳郎 可住 靖子 直次 馬洗 正安 祥風 久子 まみ子 蜜柳 明光 博史 善守 正三郎 よしろう 昭子 桂子 吉太郎 竹二 たけお

私には大切だから捨てられぬ大切な人が煙草を吸いすぎる弾丸を捨てた命だ大切に大切に育てて貰ふ親あけられず一歩前に出たので風が良くあたる

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

病床の奥方助け主夫健気ロボットに汗の苦勞は語れない平坦な道で拾った栗の毬プライドが邪魔になる日の服を脱ぐ植え終えて後の管理は妻だのみ十を聞き一を悟って生きて来た白星の背中触って駈直し悪童の今は懐かし西瓜ドロ送る齡迎える齡に歌がある松頼が運ぶは風よ虹の浜牟寿まで蔓を延ばしている米寿ライバルに代走させぬ望がある

富 柳 会 池

五月空青葉若葉に枯葉見る子離れで五月人形忘れられ幸せが細い絆を太くする快音が響く球場夏の空響き合い無から生れるものがある幻聴の響きの中に黒き蝶五里霧中恋の主艦定まらない微温湯にたっぷり浸っている微罪

英子 保子 キヨ子 郁子 敞子  
久則 とも子 文子 秀樹 勝子 紅紫朗 アキ 鐘造

五月病あの子もきつと殻を出る夏祭りに帰れと母の声響く人生は出たとこ勝負五里霧中よう産んだ七五三で揃いぶみガード下響き同居しています五線譜に乗せて牟寿を祝われる三歳児も五線譜にのつている故郷の自然がわたしを抱き寄せるバラ匂う部屋で心が響き合う迷うたら帰って来いよ母の渦頭陀袋新橋色の紐で吊る五線紙の上を踊っているピアノ五三の桐女性好みめの紋どころ

三幸川柳教室

三宅

保州報

栄進し男は歩幅広くなるクローン研究榮えて背筋寒くなる汗の量月桂冠は知っている榮養過多日本は沈みかけている一朝に榮えた城が揺れている真つ当に榮えりや何もこわくないたんばの綿毛榮華をふりむかぬ寄せ植えにあつめられてる落ちこぼれ割り箸に困らぬほきの木を植える思いやり植えていきたい孫の胸鉢植にされて自由はどこへやら早乙女が文化財にもなる田植植え替への利かぬあだ花咲かせてるジェンナーが植えて開いた医学の目

登子 昭水 (四) 勇 (伊) 柳太 一二三 千梢 トシエ 花梢 欣之 岳人 森子 智久 登美代 当代 正男 秀男 公子 よし子 朱夏 豊太郎 百合子 美智子 親路 孝子 町子 健三郎

植込みを刈って隣と丸く住む文明が島々つなぐ鉄の塔忠霊塔亡兄の声する深みどり一徹を誇りに生きた亡父の塔夫婦別姓 家にふたつの司令塔クローン羊バベルの塔をよじ登る裏表でできない顔をもつ私能面のような顔して黙秘権少しでも美人に見えるポーズ取る年輪と思えば愉し顔の皺流れゆく雲父の顔母の顔丸顔で苦勞して来た話する逆光へ男の顔が引き締まるじいちゃんの顔に似てくる焼きなすびハンガーへ明日の顔をぶらさげる

竹原川柳会

時広

一路報

セラー服真つ白最後の夏が来る気がつけばあつという間にもつ夏だ長女十八もつ指切りをしてくれ苦勞した指で焼き物つまく出来後ろ指などはさきまいさされまい指を指す二歳に飛行雲が伸びビールつぐ指もソロバン入っている指切りを何度信じた子の寝顔ひとつ知りふたつ忘れたゆく小指男性を交えて薄味料理する呑むときはパパの料理が口に合い道は道料理上手にまかせとく

鉄治 三千子 美寿子 みね 貞子 桂香 美子 さち子 満洲子 保州 千秀 和代 和子 章子 めぐみ 高史 千枝 蘭幸 美佐雄 房子 貞子 笑子 静風 八重美 笹舟 千年枝

ステーキだ我が思い出の結婚日  
大仕事終えて安堵の初夏の風  
アメリカに希望の種を蒔きに行く  
渡る世はドラマだねみなおもしろい  
親子とも世渡り下手で生きてます  
渡り来て米寿の橋の美しさ  
世をすねて渡り歩いた飯場の灯  
渡ったら何とかなった浮世橋  
一生に何度渡るか丸木橋  
渡り廊下にいつも童話がひとつある  
長い橋渡り終えると髪光る  
都会の風が橋を渡って来る早さ  
鬼が寝ている間に渡ってみませんか  
橋渡る孤児に涙は消えていた

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

カルチャーのはしごで脳の錆おとす  
定年の花束だいてはしご酒  
余生にも予定があつてはしご酒  
槽糠の妻とあしたは旅に出る  
磨崖仏彫つて外した命綱  
梯子売り京の裏町昼寝どき  
ため息と背中あわせにある希望  
登るほど足がふるえてくる梯子  
移民地の汗で五人の子は育ち  
はしご車が来て届かないビルの火事  
梯子酒下戸には辛いおつきあい  
赤提灯よせば良いのはしご酒  
ため息でとけてしまったかき氷

蝸牛 汎美 淑喜 孝枝 喜久恵 静佳 栄恵 清水 一枝 喜美子 節夫 菁居 一路

安上り手抜きと言わず冷ややつこ  
出初式はしご天までとどくのか  
丸い豆腐口にしたと思う時  
たわいな実はしご登れぬ老い二人  
しやべり過ぎG8からホイコット  
はしご酒借りを返してはしごする  
ため息が出ますロイヤルオークション  
うちの虎はしごの芸が得意なり  
新しい世紀へはしご架けておく  
どのはしごのぼるか決めるのはわたし  
落ちるのを待っているのか出初式  
ペンキ屋のはしごの下は遠くよけ

川柳塔ふくべ川柳会

橋本多哥由報

ぽかぽかと出費の嵩む日がつづき  
晴れ続き母ちゃんじつとしておらず  
晴天へ昨夜の悩みпойと投げ  
日本晴田圃も僕も元氣付く  
包帯の端を結んでくれますか  
彼と目が合つて早鐘打っている  
骨壺に早く入らぬようにする  
ぽかぽか日和五体のネジがみなゆるむ  
ハウス苺にみせてやりたい日本晴れ  
結び目の数だけ胸に痕がある  
声かけて見ようまだまだ脈がある  
気が晴れるには難間が多過ぎる  
どん底で母のやさしい声を聞く  
ぽかぽかと隠した秘密芽が出そう  
ぽかぽかに花も綻び蝶も舞う

いつふみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 鬼遊 天笑 月子 和歌子 一夫 螢 幸子 忠良 美恵子 玲子 ひろ子 節子 孝男 春恵 明美 輪多朗

ぽかぽかと緑の中に蛇昼寝  
母と娘を結ぶ電話が長すぎる  
いやだけれど過去を流して手を結ぶ  
溝口川柳会 小西 雄々報

ぶらさがるへちまの夢は母に似て  
からみつくへちまのつると話し合う  
生活の知恵はへちまの使い分け  
へちま棚夏風情が楽しめる  
へちま水趣味と実益かねている  
化粧水へちま作って十五年  
へちま作り楽しみにする化粧水  
背伸びするへちまに妥協せぬつもり  
恙なく燃える命へ蟬が鳴く

川柳東大版

森下

愛論報

疑わず母薬草を子に煎じ  
俺らあ好きだ雑草の匂いのする女  
たんぽぽは太い根っこで冬を越す  
ペンペン草仇のように引き抜かれ  
味方から欺き意表突いた策  
突つ込みと呆け堂業の顔になる  
突き返す勇氣をもっている対話  
たたきあげトイレ掃除もするトッパ  
トッパにはグミをたてて切り回し  
トップレス自信の胸が天を向く  
箱すしになにわ美学を盛つて出す  
花金の夜は祇園にいるトッパ  
学校も塾もトッパで友がない

昭恵 信由 多哥由 久子 静江 智恵子 康女 弘子 鈴枝 信敬 雄々 豊枝 シマ子 昭二 たもつ 度 庸佑 柳伸 太郎 あや子 柳宏子 一志 東雲 半蔵門 雅文

帆船バレード迎え賑わう埋立地  
二次会も賑やかに暮三次会  
にぎやかな街を歩いてひとりぼち  
賑やかな鬼で閻魔に嫌われる  
賑やかな輪の中蛇が死んでいる

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

色眼鏡かけて世間を甘く見る  
眼の中にひとりずつ死ぬ白い風景  
お見合いの後反応の待ち遠し  
リトマスの反応賄賂が効いて来た  
ツーカーの反応若いっていいな  
別居中妻の反応ないままに  
反応はじつくり煙草吸いながら  
閉じられた干潟へ反応さまざまに  
すれすれにさよなら出来た発車ベル  
法律とすれすれに居る古狸  
すれすれで堪忍袋耐えている  
六法を繰るすれすれの善と悪  
すれすれのところに甘い蜜の壺  
すれすれの屋根の真下の深い溝  
平等に割るのに苦心する遺産  
割れるかも知れぬ船見てるだけ  
割れるのが嫌で貸し借りせぬ仲間  
芋蔓的に割れる総会屋の違反  
興味本位に割り込んでつまずく  
シャボン玉割れて少女の夢を消す  
腹割って話せば解ると動じない  
割れた皿一度合わしてから捨てる

文子 信博 朝子 湖風 愛論 芳子 薫 宵草 ルイ子 一笛 杜的 求芽 とし子 澄子 重人 秀夫 しげお かおり 東雲 波留吉 萬的 節子 白溪子 比ろ志 よ志子

お隣で茶碗が割れる音がする  
ありがたいことに働く場所がある  
水中花あなたと恋におぼれよう  
かたかな語覚えた頃にまた新語  
ジグソーパズルのバラに時間を食べられる  
リストラの首職安で上げ替える  
すれすれに合格してもサクラサク  
前向きに生きよう過去は過去として

大原川柳社

矢内寿恵子報

明日もまた私がつける明り消す  
決断を下し大人の顔になる  
子どもの日離れ住む子を曳き寄せる  
まだ夢があります六十路の旅プラン  
曲折の旅路を越えて咲かず花  
野良仕事原っぱで食う握りめし  
孫三人連れて淋しい夜の駅  
ころあいの刺激求めて旅の地図  
強かに走り続けた丸い背な  
麦飯の思いは胸にしまっとく  
につこりの孫へ財布が口あける  
長いこと続けた趣味でやめられず  
老いの人果立った後の策を練る  
大空の鳥へハミングしています  
家も車もロンドンですと子が帰る  
夏近し草と私の根ぐらべ  
光陰の早さを語る三回忌  
正面の敵に本音の酒をつぐ  
陸海空軍備完了オモチャ箱

紫香 庸佑 静江 克治 恵子 石舟 柳宏子 諷云児 和子 あすなろ ひでの たづ子 寿恵子 みさえ 朝代 敏子 こふゆ 幸子 巴子 喜美子 悦子 辰江 妻子 あやこ すみえ 玉恵 さちこ

これも人生諦めましよう胸張って  
天狗の子鼻の高さが気にかかり  
自由席乗った差額の缶ビール

川柳岩出 児島与呂志報

子育てはびっくり箱のような日々  
困らせて試行錯誤の知恵を生み  
雨期もある夫婦の傘に保険かけ  
リフオームの上手な母の針の箱  
片袖が濡れても雨は合傘で  
神様にだかれいつかは箱入りに  
困らせた兎に慕われる師の冥利  
すずり箱秘の過去がとじこもる  
友訪ね団地迷路に困り果て  
返答に困る話を持ち出され  
エリートのはたと困った別れ道  
好い知恵は困った時に湧いてくる  
困るとは知りつつ嫌と言いつつ  
以心伝心あめには雨の客があり  
軒下に今では休む箱もない  
雨を待つ笠もまばらな千枚田  
寸志です小箱に入れた心付け

南大阪川柳会

寺井 東雲報

お互いの我意にとまどうヤジロベエ  
拘りを捨てて明日の靴を履く  
我を通す癖で世間を狭く生き  
盲導犬と歩く背筋をびんとし  
我をおさえだんだん僕が消えている

重人 透太 朝子 楓楽 ダン吉 千鶴子 和一 良一 愛子 精子 綾子 悦男 春子 昌子 正直 英子 ふみえ アサ 哲雄 正義 与呂志

職人氣質自説を曲げぬ父の鑿  
花咲いてカネがすぐ散る春でした  
拘りを水に流してする握手  
生きもののようには水蓮花開く  
自然界咲く順番をわきまえる  
介添えの嫁の温さに手を合わす  
親友もそっぽを向いてしまふ我意  
言ひ出せば互いに引かぬから困る  
自説引つ込めず敬遠されている  
明日はあす今日懸命に咲いて生き  
拘って損をした父こりもせず  
その筋に下駄を預けて片付ける  
井の中の蛙で我意を押し通す  
介添えはいらんと父は口達者  
舞の海我意を通して男上げ  
親友です金に拘ること以外  
拘りの間へ一言ヒビを入れ  
会う度にますます元氣私の強さ  
心配を押し切り朝の靴をはく  
我を捨てたとたんに視野が広くなり  
解決へいつも弱者は見放され  
輪切り撮って私の悩み解きました  
蜜蜂は人より先に開花知る  
夫のわがまま脱サラについてゆく  
補償金心は解決出来てない

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

寿美 哲郎 真砂 萬的 度 志華子 庸佑 柳宏子 文秋 東雲 久峰 柳伸 頂留子 たもつ 章久 悟郎 智久 シメ子 三男 勝美 みさ子 日出子 直子 ハル子 かおり 吟笑

百点が明るい顔でとんでくる  
還暦は昔隠居で今熟年  
觀光の名で戦跡を回るバス  
信楽の狸暑さでボケて居り  
片隅に寄ってくつろぐ虫族  
愛情が濃いかから味付薄づくり  
煩惱を断ち切るまでの命乞い  
丘の道口マンは遠くなりけり  
人住まぬ尖閣列島の波さわぐ  
菊日和こんなにも美味い握り飯  
紫陽花が咲けば寄り道回り道  
手の平の丘で運命変つてく  
さわやかな目覚めよい事ある予感  
健康に備えがあればうれしいなし  
保育室見舞に来る人皆笑顔

岸和田川柳会

長谷川呂万報

マツエ 正雪 文仙 あきら 放任 よしみ 坊太郎 治延 チカエ ひかり はつ恵 なみ子 くに子 いさむ 輝夫 呂万 蛙城 みえこ 敏光 盛之 弘象 ダン吉 柳宏子 文時 朝一 東雲

ライバルに見えない場所です流す汗  
ライバルが居てリハビリに精が出る  
ライバルの作り笑いは癩の種  
憎しみも親しみもある好敵手  
ライバルの会釈小さく火花散る  
親友がライバルという楽しさよ  
ライバルにいつも追われているトップ  
メンバー表面なライバルに見えてくる  
ライバルもできてるらしい幼稚園  
ライバルが減って淋しい商店街  
口裏を合わそう鬼が耳を寄せ  
裏面で仏を騙す遺産分け  
トンネルを抜けると裏面見えてくる  
一言で心の裏面見たショック  
あきないの裏面が凄いい安売り屋  
裏面にはほんとの姿ある暮し  
政界の裏面女将は知り過ぎる  
広告の裏面にこわい顔がある

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

松風 苑子 鹿太郎 二南 白光子 ひで 金太 信博 浪速子 昭二 洞庵 一齋 一弥 さよ子 狸村 洋 甚一 路子 清芳 弘直 シマ子 欣史子 香住 慶子 能子 喜美子 あずき

川柳塔打吹

米田

幸子報

ひやひやで億の現なま持ち歩く  
 情念の雫に耐える肩パット  
 さみだれの雫やさしく傘たたむ  
 泣きボクロ炎の恋の一雫  
 取賄の雫を貰い連座した  
 雨だれの穿った石に水を溜め  
 雫する女と海の底で逢う  
 的外れ雫の妻と添いました  
 幸せを双手で掬う一雫  
 亡父しのび星の雫が頼ぬらす  
 はすの花仏の雫受けて咲く  
 母さんの手加減醬油ひと雫  
 娘の目から出る雫にはうろたえる  
 過去の傷雫も知らんとは嘘だ  
 寝がえってタイスを振ったのは女  
 寝がえってみたけど元の場所がいい  
 人柄が寝がえる技にたけている  
 寝がえりもせず朝まで死んだふり  
 寝がえりの酒は思ってたより苦い  
 寝がえった水も決して甘くない  
 夢一輪咲かせるために寝がえりする  
 離婚する愛の雫も無くなった  
 地についた苺寝がえりさせてやる  
 湯水の池に菩薩の五六滴

川柳塔みちのく

小寺

花肇報

真夏でも猛暑はやりかなわな

隼人

やわ肌を天日に焼いて夏謳歌  
 わくわくと夜叉も仏も抱いて待つ  
 この暑さ続けと農夫雑草を抜く  
 天と地に暑さ感謝の稲である  
 クーラーの音風鈴にしたくなり  
 ベル鳴って開幕までの長いこと  
 飲み過ぎたビールふきだす熱帯夜  
 胸の火を点す灯台見当たらず  
 いつかしら見つけてくれるかくれんぼ  
 封を切る指の先からふるえ出す  
 乱舞するネプタ猛暑を吹っ飛ばす  
 ブラジャーの一つが泣いた片乳房

川柳ねやがわ

江口

奇抜さのある子でたのし怖くなり  
 他人には奇抜な服装すすめてる  
 意表つく奇抜な人事で若返る  
 奇抜さが消えたその後が気にかかる  
 紅一点奇抜な意見期待され  
 新任の奇抜な授業が受けている  
 田相場庶民の暮しにもひびき  
 人様に相場を付ける悪い癖  
 あの人の相場誰にもわからない  
 この辺が世間相場の手切れ金  
 通り相場すばやく睨む奉賀帳  
 相場師の髭が伸びてくる不況風  
 したたかな仮面の下で読む相場  
 たかが鼻血なんて主治医に大目玉  
 税務署は逆に振つても出す鼻血

花匠

誰にのぼせているのやらまた鼻血  
 わんばくの鼻血をかばう女の子  
 鼻血すら出ない浮世の隅に居る  
 廃校の庭に少年期の鼻血

小路

千加子

豪華メニュー長い祝辞を聞いている  
 ほどほどに好きで連れ添う五十年  
 父の日に親父と飲むのも久しぶり  
 不揃いにならない不気味葱坊主  
 深々と下げた頭にある謀反  
 父の日も父には変りないリズム  
 狙ってる鳩がヨチヨチ寄ってくる  
 シャッターチャンス狙って森の二十四時  
 暗闇に獲物を狙う目が光る  
 欲ひとつ捨てると狙う的が見え  
 大穴を狙う男と仲が良い

惠子

哲郎

浪留吉

波留吉

北歩

朝子

朝子

順三

亜也子

亜也子

隆樹

良知

良知

柳々

庸佑

庸佑

花水

とし子

とし子

岳一

勇太郎

勇太郎

五楽庵

三郎

三郎

度報

度

度

一笑

満秋報

満秋報

たもつ

満秋報

満秋報

亜成

満秋報

満秋報

茜

満秋報

満秋報

黎之助

満秋報

満秋報

博泉

満秋報

満秋報

かすみ

満秋報

満秋報

高栄

満秋報

満秋報

ルイ子

満秋報

満秋報

光子

満秋報

満秋報

権太

満秋報

満秋報

淳朗

満秋報

満秋報

雅文

満秋報

満秋報

一途

満秋報

満秋報



ハイという電話の声がおしやれする  
受話器取る孫の声から無事が見え  
受話器からの明い声を信じよう  
不貞腐れ何の言っても生返事  
生傷に母の得意のチチンブイ  
歴史的記事は深夜の生中継  
生クリーム夢をぐるぐるかき回す  
混浴の男いっぴき生殺し  
生身です心ときどき痛んでる  
生の声期待されてる目安箱  
雨の日に身をもてあます日曜日  
世の中に特別がある不公平  
特別と言われ弾んだ心付け  
極上の寿司特別の客らしい  
年齢に条件が付き入社する  
好きだとは書かずハートのシール貼る

倉吉川柳会

谷口

次男報

太陽の熱を利用したお風呂  
利用して上れば梯子外される  
駄じやれ一つ利用だあれも笑わな  
鍋ひとつ飯炊きに利用される  
アイドルも人気あるうち利用され  
リサイクルに凝ってがらくた集める  
再利用されて届いたこみ袋  
顔役をいろいろ利用するオバン  
利用するうちが華だと金せびる  
利用してみようか無人金貸し機  
若い日の理想とこかへ飛んでった

由美子 広和 あらた のぶ子 よし一 羊子 芳江 見早子 早智 サト子 歌子 八重子 愛生 トヨ子 潮華 満秋 御前 和枝 苦句 玲子 三代子 節子 ゆり子 次男 幸子 完司 ちよ子

理想主義衣食住に金を積み  
保険金理想の額が増えて来た  
理想論述べて現実見うしなう  
現実とちがう理想の聖女たち  
相手にはなるな理想が高すぎる  
親蛙理想は高く持てという  
南極に陸は本当にあるかしら  
陸に住み海を忘れた亀の背な

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

根まわしは得意と思った日の不覚  
根まわしのお茶の苦さが舌を刺し  
根まわしがどんでん返しになろうとは  
子のためにした根まわしを子が嫌い  
喰いついた餌は放さぬ蟻の意地  
直ぐそばに辞書があるのに引かない  
戻る家あって我がまま言っている  
晴れる日もあるさ戻ってくるがよい  
根まわしに踊らされている葱店主  
根まわしは充分ですよ玉手箱

川柳高知

川竹

松風報

思うこと思うとおりに言う若さ  
初曾孫百日箸の記念撮る  
若者に沸く開校が維新めき  
若者のしゃべる言葉が辞書にない  
若者に妥協をせねば生きられぬ  
豆ごはん季節の中にいる夫婦  
仏壇へ読んで聞かせる好い便り

小生 智子 雄々 螢 かつみ よしえ 天雀 睦子 鈴江 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 英子 はるみ 博利 清泉 白汀 竹萌 朱坊 快風 京子 有佳 菊野

捨てる気の雑誌が旅の友となる  
若い者マンガ雑誌が愛読書  
エロ雑誌こまめに読んでまだ独り  
激動の昭和帽子と共に去る  
日帰りの旅お土産を買っただけ  
色あせた日の丸掲げてみどりの日  
共白髪約束したにベレー帽  
中折れの帽子に父の過去があり

川柳藤井寺

高田美代子報

長生きは悪友だけの同窓会  
まだ傘寿二人仲よく趣味に生き  
青汁を飲んで体調考える  
労りあってやっと迎えた五十年  
父の日にいたわる術を母に聞く  
いたわりを愛と錯覚した悲劇  
母を看るわたし皆からいたわれ  
へそ出しルック雷様も選り好み  
雷で大的男が吐く弱音  
動けない妻には避雷針がある  
雷を落とし気まずい夕ごはん  
雷が遠くに鳴って愛終る  
落雷に逃げ足早い次男坊  
雷をこわがる妻でいとらしい  
抱くチャンス与えてくれた雷よ  
乱世を生き抜く背筋真っすぐに  
心電図大きく揺れている余白  
毒舌家行く先々と和を乱し  
乱れ飛ぶ蝶の命をふと思つ

子龍 和風 佳雄 孝恵子 幸泉 功 松風 みのる 三郎 宗一 恒雄 二南 六子 昌子 敦子 桂子 花梢 史郎 絹歌 美房 昭子 一屯 かつみ 志洋 吸江



肚さぐる酒だ乱れてなるものか  
散り際は少し乱れるやも知れぬ  
失樂園に乱れたくない乱れたい  
単身赴任される暮らするチャンス  
花ぐもり息の乱れた髪を貼る切手  
人間不信 乱れた髪を一度洗つ  
辻褄が乱れて寒い日が続く  
乱れ髪 女の彩を一つ足す  
天気図が乱れて梅雨の真ん中に

### 尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

ハイキング何時も参加の脚達者  
母と娘のねがいが笹に鳴っている  
風鈴を鳴らした風が部屋を抜け  
幸せな角度で日傘まわして  
地球儀を回してハロー嫁と孫  
七夕に出会える人を募集中  
字の下手を七夕さまに笑われる  
どこへでも首つっこむと皮肉られ  
参加して白髪たてえるOB会  
大物の参加で山が動き出す  
気の早い風鈴を立てる梅雨晴間  
食卓へいっしょに並ぶ常備薬  
気負ひ捨てるとなんと長閑な視野の中  
ささやかな噂話が風に乗る  
ささやかな夕餉にぎわう子沢山  
細やかなこと大きく言って笑われる  
幾山河越えささやかな夫婦旅  
隣からささやかですと来る土産

婦美枝 扶美代 修六 正一 鐘造 トミ子 アキ 和樹 美代子  
いわお ハツエ 石舟 正治 弘治 鈴 歌子 昌子 十四郎 鹿太 勇次郎 夢之助 澄子 江美 満寿蔵 向西 まさ 六浦

### 翠洋会

柴田英壬子報

ささやかなプロポーズです紙こより  
ささやかな夢二〇〇一年屠蘇を酌む  
ささやかに生きて西国抜けられぬ  
七月の旅雨雲をひきつれて  
壁際の影が消えゆく昼下がりが  
昼行灯芯はしつかり炎えている  
露天風呂混浴ですかとそと聞き  
充電のつもりたつぷり昼寝する  
震災のがらくたにみる傷深く  
腹立つと血がさらさらと流れない  
ガラクタをよけて芸術家が眠る  
孫カナダへ旅するという大リユック  
弱虫の男が逃げる昼の酒  
到来のコブで茶漬をさらさらと  
寺の縁日欠けたお皿が売れている  
人工の小川さらさら汚れている  
昼の月昨夜の事は知りません  
さらさらと流れた川に土石流  
ローカルの旅で味わう草団子  
一人旅ひとりの部屋が広すぎる  
悪縁とさらさら思わぬいよう  
人間の揉め事覗く昼の月  
久し振る悪友と会う昼の酒  
夜と昼違える母に子守唄  
海外の旅行は夢でみたまんま  
論ず気はさらさらないが駄目を押し  
過ぎた日を笑い話に旅の膳

年代 武庫坊 紫香 希久子 靖巳 蛙 東雲 凡子 蕉子 義 英壬子 真砂 佳秋 会美 さと美 千枝子 叔子 綾子 志坊 正坊 鬼遊 石舟 恭昌 絹子 照子 宣司 澄子

### とつとり川柳会

武田 帆雀報

がらくたの中に青春赤バット  
賞味切れがらくた並にあしらわれ  
新世界ぶらり歩いて昼は蕎麦  
化粧して逢う当てもない昼下がり  
ひっそりと咲けぬ私はひまわりよ  
夏まつり迄はひっそり神の鈴  
ひっそりと包丁研いでときを待つ  
ひっそりの部屋で汚職の封を切る  
裏木戸を開けてひっそりお待ちする  
ひっそりと産んで未婚の母となる  
般若の面ひっそり箱に眠らせる  
ひっそりとこの世去る日がきつと来る  
ひっそりと傍に立つてる殺人鬼  
平社員栄転辞令は左遷地だ  
平社員妻もバイトをしています  
宴会の時だけ部長済めば平  
ゴマすりか嫌いで平のままよい  
時期を待つ雑草に似た平社員  
生き字引父は万年平社員  
村長が転職して平社員  
三次会辺りでもって平社員  
お辞儀ぐせ悲しいまでに平社員  
大盃の酒もこぼれて槍も折れ  
金盃はまるを書くとき使います  
盃の底に決意を置き忘れ  
兄弟と盃かわす村まつり  
娘の嫁ぐ日の盃がほろにがい

周信 久峰 正雄 光子 正和 よしえ 圭一郎 忠良 季芳 和枝 きみ子 かつみ 鬼桜 輪多朗 節子 喬水 銀嶺 舍人 孝男 はるお 典子 美恵子 一子 悦子 静生 一夫 一京

盃へ涙がぼとり内祝い  
盃が男の口を軽くする  
左手に盃右手あご竹輪  
盃を受ける互角に呑む女

### 豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

和歌子  
睦子  
石花菜  
帆雀

柔道の受身先生転ぶ猫  
恩師にも嫁ぐ姿を見て貰い  
先生と涙鉄棒思い出す  
先生と呼ばれる軽んじられて  
定年のない来年の種をえる  
定年を百歳までと腰据える  
定年へ上司も部下もない暮らし  
定年はバラ色全部持ち時間  
定年に始まる余生彩を変え  
定年の駅で自適の風に乗る  
占いで開運願ひ嫁さがし  
時々秘密の箱を開け掃除  
その扉開けばそこはパラダイス  
襟広く開けて自信のあるバスト  
カプセルを開けて昔に花が咲く  
ムツゴロウ水門開ける時待てず  
知恵袋開けて時々陽に晒す  
さすが老舗この店より早く開け  
幸運は自分で開けと神の声

### 堺川柳会

河内 月子報

崇 艶子  
登美  
みさ  
野草  
風花  
由多香  
佳子  
幸次郎  
俊路  
道子  
伝住  
和子  
舍人  
敬之介  
小生  
宏章  
孝子  
銀嶺

美代子  
みつこ  
春蘭  
楓

例えはの話その気になつてくる  
元気で退屈せず生きている  
ひや奴あれば事たる祖父の酒  
退屈な日は雑音がよく聞こえ  
衿あしから失せてしまった熱い私語  
人間にロスタイムあり生きている  
失つたものへ愛着倍になり  
生と死の情緒失うタマゴッチ  
期待せず期待もされずマイベース  
退屈な日だな電話も誰も来ぬ  
失うもの持たぬ男のふところ手  
窓際にストレス捨てる鉢がある  
ぽっかりと空いた休日もてあます  
期待などしてほしくないカタツムリ  
ひと鉢ずつに千の情けをかけている  
托鉢に自分をかける若い僧  
退屈の虫ギャンブルのカモになり  
助つんだから期待する本塁打  
子供より孫にかすかな望みかけ  
あくびする人も混つてコンサート  
マイベース重い期待に崩れだす  
株分けの観音竹を待ち焦れ

満州  
りつえ  
梓

祝福を受ける頭を叩かれる  
梅雨明けの少女小っちゃいしくやみする  
仕事持つママの重荷は夏休み  
ゆっくりと歩きゴールに着くつもり

### 川柳塔おとり

上田 俊路報

清子  
真一

天下茶屋へ豆腐を買いに行くわたし  
退屈でここへ運ばうこの図体  
お豆腐の味がこのごろよく分かる  
良心を失い立つた崖つづち  
高度八千退屈などはしておれぬ  
退屈と遊ぶ方法習うてます  
回復を期待景気も健康も  
退屈も過ぎると悲しくなるらしい

楽生  
冬虹  
泰子  
喜代子  
文  
アキ  
哲平  
扶美代

高校の国語の副読本『大阪の文学』近  
現代編（大阪府教育センター発行）に  
故人の武部若菜・富士野鞍馬氏等と共に  
本社同人・高橋夕花さんの句が採用され  
た。道頓堀カニのはさみと赤い灯と

人生の先生きついお姑さん  
動物や虫に先生などいない

清子  
真一

人生の先生きついお姑さん  
動物や虫に先生などいない

清子  
真一

人生の先生きついお姑さん  
動物や虫に先生などいない

## 平成9年度 岡山芸術祭参加 西日本川柳大会

と き 9月7日(日) 午前9時開場

ところ 久米南町中央公民館

岡山県久米郡久米南町下弓削

(JR津山線弓削駅から5分)

兼題と選者(各題2句・午前11時締切)

|      |          |
|------|----------|
| 「遠い」 | 平山 繁夫 選  |
| 「明日」 | 河内 月子 選  |
| 「草」  | 塩見 草映 選  |
| 「走る」 | 林 荒介 選   |
| 「枕」  | 土居 哲秋 選  |
| 「小径」 | 寺尾 百合子 選 |

特別課題 当日1題

会費 出席者2000円(昼食・記念品呈)

表彰 総合成績で13位まで

主催 弓削川柳社

## 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月7日(日) 午後1時開場

ところ 堺市立母文化会館第1講座室

堺市桃山台2丁2番1号

(泉北高速とが美木多駅3分)

おはなし 堺市博物館副館長 中井正弘氏

宿題と選者(各題2句・午後2時締切)

|       |          |
|-------|----------|
| 「席」   | 藤井 一二三 選 |
| 「絵の具」 | 平松 三恵子 選 |
| 「食べる」 | 小池 しげお 選 |
| 「やがて」 | 蔭田 早苗 選  |
| 「ベルト」 | 田中 新一 選  |
| 「天狗」  | 墨 作二郎 選  |
| 「電車」  | 梶川 雄次郎 選 |

参加費 1000円(作品集・参加賞呈)

賞 秀句呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会

## NHK全国川柳大会

と き 10月18日(土) 午前10時受付

ところ くにたち市民芸術小ホール

(JR矢川・谷保から徒歩10分)

ショートスピーチ

「これが川柳だ」 宿題選者5氏

宿題と選者(事前投句・各題2句)

|       |          |
|-------|----------|
| 「組む」  | 竹本 瓢太郎 選 |
| 「西」   | 八木 千代 選  |
| 「タッチ」 | 斎藤 大雄 選  |
| 「超」   | 森中 恵美子 選 |
| 「玄関」  | 渡邊 蓮夫 選  |

席題と選者(当日出題・各題2句)

坂本 一胡 仲川たけし

事前投句 9月5日締切

投句料 2000円(作品集郵送)

投句先 国立市富士見台2-36

NHK学園全国川柳大会事務局

## 第5回 和歌山県川柳大会

と き 9月14日(日) 午前11時開場

ところ J A会館5F

兼題と選者(各題2句・午後零時半締切)

|      |          |
|------|----------|
| 「点」  | 馬場 明子 選  |
| 「声」  | 的場 みきお 選 |
| 「抱く」 | 寺岡 吞天 選  |
| 「敵」  | 松尾 節 選   |
| 「重い」 | 大岸 暁星 選  |
| 「待つ」 | 三宅 保州 選  |

会費 1500円(軽食・記念品呈)

懇親宴 3500円

事前投句 「揃う」 堀端 三男 選

◎8月15日に投句を締切りしました。

主催 和歌山県川柳大会

後援 和歌山県・市、同県・市議会  
同県・市教委 和歌山文化協会

# 柳界展望



★いずれも川柳会の有志10名は、6月21日に行われた出雲信用組合主催の北半球で一番美しい夕日を観る会に参加、日御崎の尼緑之助句碑を見学した。

★熊野地方の文化育成に貢献した人々を偲ぶ「あじさい忌」が7月6日、新宮市の西村伊作記念館で営まれたが、今年は川柳しんぐう

吟社主幹・川柳塔社参与として川柳の普及と振興に努めた故大矢十郎氏（享年七十一）の名が七十一人目として碑に刻まれ、まさ子夫人と長女の川上富湖さんが参列、献花した。

★第6回島根川柳まつりは7月5日、出雲市民会館で91名が参加して開かれた。

当日の各題秀句次のとおり不思議な事ばかりだ回れ右しよう 渡部 大泡 喝采のない花道に待つ家族 吾妻 昭二 グラスの底の液体は何ですか 土橋 螢

一世紀生されば名物になれる 但見石花菜

脈が打つぽんやりしても打っている 土江 藤枝 神様の答えはやがて来るだろう 加藤 安次

壺のなかからほんものの顔が出る 金築 雨学

★第2回大砂丘川柳大会は

7月13日、鳥取県福部村の砂丘センターで開かれた。当日の秀句つぎのとおり

自分が好きになるよう心掛けて 藤原 鬼桜 近所の声ありがたく恐ろしく 鈴木 公弘

炎天にさらされているあばら骨 野口 節子

上司より大きい判を捺してやる 大石あすなろ

僕を作った神様はもの好きだ 宮園射月芳

ありつたけの靴湿らせて梅雨半ば 新家 完司

水虫を治してくれた大砂丘 小池しげお

★第15回夜市川柳大会は、8月3日、堺市総合福祉会館で開かれた。本社同人の各題秀句つぎのとおり

泣き疲れ笑い疲れてひとりかな 小島 蘭幸

二十一世紀に代るのれんは真っ白に 池 森子

勇気を出して夏の乳房の

前に立つ 新家 完司 新鮮な魚は自分で釣ってくる 三宅 保州

僕は小さくて神様から見えない 新家 完司 一番高いところでおむすびを食べる 小島 蘭幸

菜園を回ると朝が動き出す 前 たもつ

降るような星が見たいと思っ夜 高田美代子

その時は三べん回る芸がある 小池しげお

★川柳天守閣の発刊600号記念大会は8月24日午前11時からエル大阪（大阪府立労働センター）で開かれた

★川柳グループみまさは次の要項で第6回誌上大会を開く、題は「女」と「雑詠」、各2句で3人共選、会費500円、締切は9月末日、宛先は岡山県真庭郡落合町下方325武村一美

## ▼訂正▲

■7月号P42上段5行目（川柳塔）「子は果立ち……」↓「子の果立ち……」

▽P90中段2行目（各地柳壇）「史風」↓「完司」

■8月号P54下段11行目「世間並に愛情を重ね」↓「世間並に愛憎を重ね」▽P96下段「懇親宴」12行目「田頭よしこさん」↓「田頭良子さん」▽P107下段14行目「夏形の風に……」↓「夏至の風に……」▽P111下段（佳句地十選）1句目「史風」↓「完司」

▽おことわり△

■8月号P56上段4行目「鉄塔で一休みする昼の月」を本人の申し出により削除

▽芳志△

■小出智子さんの供養としへ小出家から金一封を拝受

## 9 月 各 地 句 会 案 内

| 句 会 名                 | 日 時 と 題                                  | 会 場 と 投 句 先                                               |
|-----------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 堺川柳会                  | 4 日(木)午後 1 時から<br>伝える・両方(共選)             | 堺市総合福祉会館 南海高野線東駅市役所西入る<br>〒593 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑         |
| 尼 崎<br>いくしま           | 5 日(金)午後 1 時から<br>首・別れる・雑詠(A・B)          | サンシビック尼崎 3F 阪神尼崎南西徒歩 5 分<br>〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代     |
| 西宮北口<br>川 柳 会         | 8 日(月)午後 1 時から<br>宵・叫ぶ・教える・自由吟           | 西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分<br>〒662 西宮市両度町 2-19-515 山本義子   |
| ほたる<br>川 柳<br>同 好 会   | 9 日(火)午後 1 時から<br>噂・結ぶ・とことん              | 豊中市立螢池公民館 阪急宝塚線螢池駅西へ150米<br>〒560 豊中市螢池中町 3-10-28 井上直次     |
| 八尾市民<br>川 柳 会         | 10 日(水) 午 前 11 時<br>火種・煩惱・浮気・のど仏         | やお10周年吟行句会 近鉄国分駅集合<br>〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎シマ子             |
| 川 柳 塔<br>ま つ え        | 13 日(土)午後 1 時から<br>時 計 ・ 影 ・ 納 得         | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅                      |
| 川 柳 塔<br>わかやま         | 14 日(日)午前11時開場<br>和歌山県川柳大会(定例会句会<br>は中止) | JA 会館 JR和歌山駅前 本文 P113 参照<br>〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良       |
| もくせい<br>川 柳 会         | 15 日(月・祝)午後1時から<br>事故・チーム・ひしひし・自由吟       | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩 5 分<br>〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊 |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯 の 花 | 18 日(木) 正 午 か ら<br>空白・したたか・拒む・自由吟        | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分<br>〒569-11 高槻市宮田町 3-8-8 川島颯云児     |
| 南 大 阪<br>川 柳 会        | 19 日(金)午後 6 時から<br>軽快・傾向・毛嫌い・減点          | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分<br>〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲      |
| 岸 和 田<br>川 柳 会        | 20 日(土)午後1時半から<br>ゆきすぎ・欲張る・ラムネ・利用        | 市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩 3 分<br>〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村     |
| 川 柳<br>ねやがわ           | 21 日(日) 正 午 か ら<br>余分・野心・奉仕・自由吟          | 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前<br>〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉     |
| 富 柳 会                 | 25 日(木)午後 1 時から<br>塔・ぴかぴか・自由吟            | 富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分<br>〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子   |
| 京 都<br>塔 の 会          | 25 日(木)午後 1 時から<br>駅・陰しい・勢力              | ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ<br>〒600 京都市下京区諏訪町通松原下弁財天町 都倉求芽    |
| 東大阪市<br>川 柳<br>同 好 会  | 27 日(土)午後 6 時から<br>邪魔・ヒント・神・証拠           | 東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3-21 片岡湖風  |
| はびきの<br>市 川 柳<br>民 会  | 28 日(日)午後 1 時から<br>故障・届く・バトン・「たびたび」      | 羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分<br>〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏      |

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 編集後記

で、私が全日本川柳三重大会の選者に出掛ける時には服装までアドバイスをして

♡八月号に小出智子さんの追悼記事が載ったが、九月本社旬会は智子さんの追悼句会ということなので、少し書かせていただく。

♡智子さんは大先輩であるが、一人の女性として真摯に細やかな情と知性で対等に付き合ってください。

♡自己に厳しく、常に周りに気を遣う方だったので、その厳しさ、気遣いが寿命を縮めたのではなかろうか。

♡入院されてからも皆さんのお見舞状に返事が書けないことを気にしておられた。岩佐ダン吉さんの見舞状に「お母さんの病気の間は兄弟仲良くして留守を守ります」と書いてあるのを笑いながら見せてくださった。

♡姉妹のない智子さんは時にお姉さんのような気遣い

で、私が全日本川柳三重大会の選者に出掛ける時には服装までアドバイスをして

♡七月号の巻頭言も編集後記もゲラ刷りの時に智子さんに読んでいただくことが出来たのは幸いだった。入院中、時々、自宅へ帰られ

五月半ばには、大切にしておられた数冊の本を、それぞれの本にまつわる思い出を語りながら私にくださ

た。「五月雨やわが旅立ちの物つつむ」の句と共に。

♡六月二十一日朝、逢いたいの連絡に病院に駆けつけ、昼過ぎまで居て「明日また来ます」と握手して別れた。その十二時間後に永久に旅立ってしまった。

本当にかけがえのない方を失った。心から御冥福をお祈り申します。友が逝く

根こそぎ奪う大嵐(み)

## ひとこと

「昔の名前で出ています」

「大輪さん」と久しぶりに呼ば

れたのは平成七年十一月、高野山にある川柳塔碑の前でした。故大

矢十郎が呼び寄せたのかも知れませんが、そこには薫風主幹はじめ

大阪や和歌山の懐かしい方々のお顔がありました。温かいお誘いを

いただき、また十郎の供養にもなると川柳に復活したのが平成八年

五月でした。「大輪」の雅号は昭

和四十七年に川柳塔社同人に加

えていただいたのを機に「大車輪」

から「車」を取って故垂井葵水先生が名付けてくれたものです。昭

和六十一年頃から「体操クラブ」が忙しくなり、「しんぐう吟社」

だけの活動となつてしまいました

が、川柳塔に復活させていただいた今でも、この「大輪」を気に入

って使っています。

川上 大輪

☆先輩であり、尊敬する師 教えて頂くことばかりであ

であり、やさしいお姉さん った。無念という他はない。

であった智子さんが亡くな また入院中から案じておら

られた。私達を悲嘆のどん れたが、残された御主人の

底に突き落した計報を悪夢 お淋しさも察するに余りあ

のように聞いてから二ヶ月、 るものがある。

月日だけは容赦なく過ぎて ☆昨年十二月号から編集部の

いくが、失ったものの大き の一員として、校正などの

さは増すばかりである。 お手伝いをしている。

親しみやすいお人柄で、 目を皿にして、ゲラ刷り

わけへだてなく接して下さ の文字を追っているにも拘

った智子さんから、柳歴の らず誤字を見落している。

浅い私はまだまだこれから 丁寧な落穂拾いの如きチェ

思ふこの頃である。(希)



# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表(11月号)

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。





## 作品募集

川柳塔(8句) 橋高薫風選  
水煙抄(8句) 西田柳宏子選  
澎湖抄(3句) 八木千代選  
茴香の花(3句) 宮西弥生選  
課題吟(3句) 「味」 川端柳子選  
「かなう」 岸端桂子選  
「気付く」 井上喜醉選  
初歩教室 「作る」(3句) 吐田公一担当

11月号発表(9月15日締切)

12月号 課題吟 「屋根」「放す」  
「求める」  
初歩教室 「心」

## 小出智子追悼 本社句会

と き 9月7日(日) 午後5時半  
ところ メンズファッションセンター3F  
中央区内本町1-11 電06・941・1918  
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
おはなし  
兼題 「洗 濯」 高杉鬼遊氏  
「あじさい」 桜井千秀選  
「祈 り」 宮西弥生選  
「指 輪」 西田柳宏子選  
「茶 碗」 奥田みつ子選  
席題 1題 当日発表 会 費 500円  
◎投句は投句料(80円切手5枚)を同封、各題2句厳守

本社10月句会は、第3回川柳塔まつり記念句会として開催いたします。

## 夜市川柳募集

第4回「足」 土橋 螢選  
ハガキに3句 9月末締切  
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺 川 柳 会

## NHK川柳作品募集

課 題 「視 く」 森中恵美子選  
ハガキに3句 9月10日締切  
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
「文芸部」川柳係  
発 表 9月27日(土) 午前11時5分  
からラジオ第1放送(予定)

〒545

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)  
一年分 七千九百元(同)

平成九年九月一日発行

編集兼 発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ト

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六  
ウエムラ第2ビル209号室

発行所 川 柳 塔 社

電話(06)545-1691 四番

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

## 「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- ②澎湖抄・茴香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

# 全日本柳人写真名鑑

日川協では昭和55年・同60年の二回にわたって、『日本川柳人名鑑』を刊行、さらに社団法人設立を記念して平成5年、書名・体裁・内容を新たにし、全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を発刊、好評を博しました。今回はあれから5年目にあたり、さらに一段と充実した平成10年版を刊行したいと存じます。みなさま方には一人残らず、この名鑑に名をつらねられるよう、お勧めいたします。

**資格** 参加は柳人であればどなたでも結構です。  
**内容** 各人ごとに、①氏名(雅号)②生年月日

③職業④所属柳社⑤住所⑥電話番号⑦顔写真⑧自薦作品3句(所定用紙があります)を掲載

**体裁** A5判・本文アート紙500頁・美装本

**刊行** 平成10年3月予定(参加者に1冊送付)

**参加費** 4000円(申込時にご納入ください)

**締切** 平成9年11月15日(土) 厳守

**申込先** 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話(06) 352-2210

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8  
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928